

この故に、これを國家全體の立場から言へば、經濟の任務は、できるだけ價値の生産を大にすることであるが、價値を大にする方法としては、財物の生産量を大にするといふことも、その一つであるが、それよりも大切な事は、その生産された財物を、成るだけ多く、有たざるものに供給することである。有たざるものほど、欲望満足の度合は大きく、それだけ價値は大になるからである。孔子の言葉のなかに、およそ家を持ち國を治めるものは、その富の少きを憂へずして等しからざるを憂ふ。富が少くとも、等しければ貧しきことなし、といふ意味の句があるが、このところを言つたものである。日本の人口一億に垂んとして、有てるものは百のうち一にも當らない。九千萬人は有たざる窮迫の徒である。天皇の大御心を五體のうちに宿してゐる貴き陛下の赤子が、餓えてゐるのだ。餓ゑたるものに與へられたる財物の價値は絶大である。富の少きを憂へず、乏しくとも、これを窮迫せるものに、廣く分ち與へよ。然らば、國內に於ける經濟的價値は、驚くべき躍進を示すであらう。

然るに、現實の社會を見ると、一國內に於ても、又國際間に於ても、それが恰度、その逆になつてゐる。有てるものは、ますます多く有つ力があるに反して、有たざるものは、永久に持つことが

できない。くどく解説するまでもなく、それはわれらが眼前に見てゐるところの儼たる事實だ。この點において、すでに現在の經濟機構は、眞個の經濟の任務を達するに堪へなくなつてゐる。然らば、どうして、そんな間違が起つたのであるか。それを考へて見よう。

## 五

今日の經濟機構の救ふべからざる缺陷の一つは、富の偏在といふことである。そのために、國內に於ては階級の對立を來し、つひには醜惡なる階級闘争とまで進展し來り、國家間に於ても、有てる國と有たざる國、奪ふ國と奪はるゝ國とが對立を來し、それは愈々激化して行く。

然らば、何故に、かゝる富の偏在を來したのであるか。マルクスはそれを説明するために、有名な勞働搾取論を樹てた。その基礎になつてゐるのが、勞働價値學說である。それを簡単に検討して見よう。

マルクスの勞働價値學說にいふところの價値は、商品交換價値である。勿論彼も、人間の欲望を満足さす意味の價値を認めないわけではない。彼はそれを使用價値と言つてゐる。すべての商品

は、使用価値をもたねばならぬ。誰にしたつて、自分に無用な生産物を目的として、交換するものはないからである。しかし使用価値が、一たび商品となるや否や、即ち使用価値が互に交換されるやうになるや否や、その交換は一定の数量比例を以て行はれる。その比例が即ち交換価値である。然らばこの交換価値を構成するのは何であるか。

元來數學上の計算なるものは、同じ種類の數量にのみ適用せられ、又同じ條件のもとに於てのみ行はれる。十個のリンゴから二個のリンゴを引く事は出来るが、十個のリンゴから二個の金槌を引く事は出来ない。然らば此處に五斗五升の小麥が二百封度の鐵に等しいと云へば、即ち

$$55 \text{ 升(小麥)} = 200 \text{ 封度(鐵)}$$

と云ふ方程式が成り立つとすれば、この小麥と鐵との間には、何か共通の性質があつて、この比較を可能ならしめたものと見なければならぬ。この共通物が即ち小麥と鐵との内に含まれる交換価値である。然らばこの共通物は何であるか。小麥と鐵と、この二つの商品の自然的性質には何等共通したものはない。使用価値は人間の欲望を満足し得る自然的性質に依つて生ずるものであるが、この自然的性質は交換の動因にはなるけれども決して交換の比例を決定し得るものではない。其處

で商品體からその自然的性質即ち使用価値を除去して見る。すると後に残るものは、唯一つの性質、即ち労働生産物としての性質である。それが交換価値を決定するのである。

マルクスの所謂價值とは交換價值の事であり、すべての商品は、一般的人間労働を對象化してゐるが故にのみ價值をもつと説くのである。それは商品の價值の大きさはどうして測定するか。それは商品の中に含まれてゐる價值形成要素即ち労働量に依つて測られる。そしてその分量は労働の時間を標準として秤量せられるのである。例へば小麥五斗五升を生産するに要した労働時間と鐵二百封度を生産するに要する労働時間とは等しいわけになる。又椅子一個と鐵一挺とが交換されると云へば、椅子一個を作るに要する労働時間と、鐵一挺を作るに要する労働時間とが等しいと見るのである。労働時間が等しいから價值も等しい。それでは鍛冶屋が懶者で、ぶら／＼鐵をつくつたから労働時間が二倍かゝつたので、その鐵一挺は椅子二個と交換されるのかと云ふとそうは行かない。一定の社會的生產關係に於て、普通鐵一挺或は椅子一個作るのに、平均して何時間かゝるか云ふ程度がある。この平均時間をマルクスは社會的に平均せられたる必要なる労働時間であるとする。従つて労働の生産力が變化すれば、社會的に必要なる平均労働時間も又變化し、價值も又

同様に變化すると云ふのである。  
續いてマルクスは單純價值形態と綜合價值形態とを説いてゐる。前者は前に云つた小麦五斗五升と鐵二百封度と云ふ様なものであり、後者は一つの商品をして色々の商品との交換比例を示したものである。例へば

個	合	四	個
本	五	個	他
六	油	十	
十	駄	拭	
其	下	手	
	盃	盃	

米一升=

と云ふ類である。さうして一個の生産物例へば米が、習慣的に他の多くの労働生産物と交換される様になると之を綜合價值形態と云ふ。この標準となる商品は昔は米が中心であつたが、今日では金銀を中心に計算され、さうして貨幣を單位に計算された價值を價格と云ふのである。従つて商品の

價格は價值と一致する。即ち價值量の多い商品程價格が高く、反對に價值量の少ない商品程、價格が低いと云ふ事になる。

然し現實の社會では價格と價值とは必ずしも一致してゐない。それは社會に獨占的條件があつたり、需要供給の關係に變動があるから、其の法則が歪められるのであるとマルクスは説明する。例へば落體の法則のやうなものである。物理學の法則に依れば總べての物體は鉛のやうな重いものでも、羽毛のやうな軽いものでも、全く同じ速度をもつて地上に落下する。處が空中では空氣の抵抗があるためにその通りには行かない。即ち落體の法則は眞空界でなくては適用されない。而もなほ落體の法則は眞理である。それと同様に價值を決定するものは労働量であると云ふ法則は、例へば現實社會に於ては行はれなくても眞理であるとマルクスは説くのである。

以上がマルクスの労働價值論の大體である。その餘剩價值論も、階級闘争説も皆この上に立つのであるから、マルクス主義を批判するためには労働價值説を批判せねばならず、又労働價值説が崩れば、マルクス主義も崩壊する。

マルクスの餘剩價值論即ち資本は労働の搾取に依つて成ると云ふ立論の根底は労働價值説であ

る。然らば剰餘價值は如何にして生ずるか。マルクスは價值はすべて労働時間に依つて決定されると説いた。従つて商品流通の法則に依れば、貨幣は常に商品と同價值でなければならぬ。然るに一つの商品が一定の貨幣と同價值であり、同時に貨幣と貨幣と同價值であるとは如何なる意味であるか。これ商品がその消費中に本來もつてゐた以上の價值をつくる商品である場合即ち

$$\text{貨幣} - \text{商品} \dots \text{商品} + (\text{商品}) - \text{貨幣} + (\text{貨幣})$$

である場合にのみ可能である。それでは消費中に本來もつてゐた以上の價值をつくると云ふ様なそんな不思議な商品とは何であるか。それは人間の労働力が一つの商品である場合にみに實現される。人間の労働力は如何にして其のやうな不思議を現すのであるか。マルクスに依れば次の様である。

労働力の價值は労働者及びその家族の生存に必要な一定量の生活資料の價值に依つて決定する。即ちその生活資料を生産するために社会的に必要な労働量に等しい。かりにそれを労働五時間間に依つて生産せられ、貨幣三圓に相當するものとする。こゝに一人の資本家があつて、先づ労働用具と綿花とを買込む。假りに一斤の綿花の中には、社会的に必要な労働が二時間分含まれて居

るとする。その貨幣價值は一圓である。更に一斤の棉花から一斤の綿糸が作られ、棉花百斤を紡ぐ毎に紡錘一個づつ、即ち一斤毎に百分の一個づつ磨滅するとする。最後に紡錘一個の價值を二十労働時間(即ち十圓)とし、一労働時間に棉花二斤づつ紡がれるものとする。然らば生産されたる棉花一斤の中には幾莫の價值が含まれてゐる事になるか。

$$\text{棉花 } 1 \cdot (2 \text{ 労働時間}) + \text{紡錘 } \frac{1}{100} \text{ 圓} \left( \frac{2}{10} \text{ 労働時間} \right) + \frac{1}{2} \text{ 労働時間} = 2 \frac{7}{10} \text{ 労働時間}$$

これを圓で云ひ表せば

$$1 \text{ 圓} (\text{棉花 } 1 \text{ 斤}) + \frac{1}{100} \text{ 圓} (\text{紡錘 } \frac{1}{100} \text{ 個}) + \frac{1}{4} \text{ 圓} \left( \frac{1}{2} \text{ 労働時間} \right) = 1 \frac{7}{20} \text{ 圓}$$

即ち一圓三十五錢である。さうして其の通りやつたのでは、資本家の買った労働力は何等の剰餘價值も作り出さぬ事になる。

處が資本家は其の範圍に留まらない。彼は労働力を全一日分買ったのである。だから彼は十二時間働かせる。前の假定に依れば、棉花は一時間に二斤紡がれるのであるから彼は今棉花二十四斤を

持つてゐる。その價值は三十二圓四十錢である。然らば其の生産費として幾莫を要したか。

棉花 24 斤 (24 圓) + 紡錘  $\frac{24}{100}$  (2.4 圓) + 労働力 3 圓 = 29.40 圓

この故に資本家は

32.4 圓 - 29.4 圓 = 3 圓

結局三圓儲けた事になる。之が餘剰價值である。

以上がマルクスの資本論の概要である。然しながら價值論は果してかくの如きものであらうか。

## 六

マルクス學説は、商品の價值は労働だけが決定するとした處に、資本主義經濟社會の缺陷を鋭く剔抉した處にその特徴はあるけれども、資本主義社會の經濟制度を以て人類社會が必ず之を經過し、その行き詰りに依つて、社會革命に到達するとした唯物史觀的歴史觀に根本的に謬りがある。即ちその労働價值説は、第一には經濟の機械生産段階に於ては既に適用されなくなつた事であ

り、第二には、必ずしも歴史の發展が唯物史觀の通りに行かず、資本主義の崩壊が社會革命に依らず、全く別個の經濟原則に依つて行はれる事が明瞭である事である。

簡単な器具しかもたなかつた手工業に於ては、労働は生産の主要素であつた。ピラミッドのやうな大建造物でも、殆ど人間の労働に依つて作り上げられた。このやうな時代に於てはすべての價值も労働時間に依つて決定しても、大きな間違はない。然し科學が発達して機械生産の時代に入つた今日に於ては事情は全く違つてしまつた。マルクスの誤謬は手工業時代の解剖に依つて得た法則を、普通の眞理として、無理に機械生産時代に當てはめやうとした處にある。昔の戦争は弓矢の數に依つて決定した。マルクスは弓矢の數に依つて今の科學兵器時代の戦争を測定しようとするのである。

マルクスは價值はすべて労働が決定すると云ふだから、労働の加はらないものは價值が無い。然し現在に於ては、我々はそれが人間の労働で作られようが、機械力で作られようが、將又天然自然に存在しようが、いやしくも國民としての欲望を満足させるものであれば、之を價值ありとする。人間の労働で作られた人絹と、機既力で作られた人絹との間に價值の差別を認めない。何れにして

も着てみて同じなら同じ価値があるとするのである。

我等にとつては、出来得る限り労働を省いて機械力にかへる事が理想である。労働は苦痛だ。財物を生産するに拂はねばならぬ犠牲と、その財物の消費に供つて受ける幸福と、二つの間の差額が大きければ大きい程、大きな価値が生まれるのである。將來我々は生産の苦痛なしに無限大の使用価値を作り出す事を理想としてゐる。それは科學の發達に依つて可能である。現に機械は労働を省きつゝある。人間には財物生産のために労働する事など依りもつと大切な生活がある。人類は出来る限り労働を省いてもつと深い生活に入らねばならぬ。人間が機械を使つて物を生産する時代から、機械が自動的に他の機械をつくつて物を生産する時代へと移つて來た。かうなれば手工業時代の社會に基礎を置いたマルクスの労働價值説は意味をなさない。

若し價值は労働に依つてのみ生まれるとするならば、餘剩價值も労働力の搾取のみから出てくると云ふ事になる。労働者の生活物資を生産するために、社會的に必要な労働時間以上に労働者を働かせることに依つてのみ餘剩價值は生まれると説いてゐる。手工業時代に於ては労働が主なる生産要素であつたから餘剩價值も労働力を搾取するより外出る處がない。機械とは云へない程度の幼

稚な道具で人夫を集めて仕事をする場合には、労働者を永い時間働らさせるより外に、生産物を多くつくる方法はなかつた。

今日我々の消費してゐる財物の大部分は機械の作つたものである。飛行機も自動車も大きな建物も皆機械の力に依つて出来てゐる。労働者を何萬人集めても之程の事は出来ない。科學の發達は、刻々として労働力を機械力に變へつゝある。かうして生産の大部分が機械力に變へられた時、資本は一體何を搾取して餘剩價值を得るのか。まさか五十人や百人の労働者の労働力を搾取する事に依つて、五百萬圓の大會社が何割の配當をなし得るとは云へまい。さればとて資本は機械力を搾取してゐるとも云へまい。労働價值説の論據はかくして眞の價值の分析にあらずして、資本主義社會に於ける商品價值即ち價格の構成を論證したにすぎず、それはどこまでも、唯物史觀に基づく資本主義社會の歴史的進化の必然を前提的假定としてもつて居る。この立場も、右に述べた様に、機械生産の發達に依つて、資本主義社會それ自身に於ける價值論としても成り立たない。即ち資本主義が機械生産に基づく金融資本の發展段階に到達した現在の經濟社會に於ては、その價值論は幾多の修正はありながらも、價值論として成立せず、従つて社會革命の原理たる批判力も實踐力も喪失してしま

## 七

自由主義的な價值論は、要するに人間の欲望の充足を以て價值ありとするのであるが、その場合に欲望は自由に放任せられた欲望であつて統制されたものではない。人間は腹が空けば物を欲する。如何に御馳走があつても満腹のときはその欲望は起らない。空腹時には粗末なものであつても、その價值は大である。此處に價值とはそのものに内在するものではなくて、そのものを求める人間の心理的性質に依つて決定される。故に社會の生産も人間の心理的要求に基づいて行はれる。

然るにこの事は抽象的なものであつて現實社會に於て、誰がどれだけ空腹であり満腹であるかを測定することは不可能である。恰度自由主義經濟に於て人間の自由な欲望の發現が生産を刺激して、社會に最も必要なるものが生産せられると云ひながら、現實に於てはかへつて不平等な生産即ち、必要なるものも生産されないのに、購買力を伴つた贅澤品が生産される様に、心理的に必要なるものを生産すると云つても、事實は何等かの購買力を有するものでなければ生産が行はれないこ

とになつてしまふ。故に従来の價值論即ち自由主義的價值論も結局に於て、貨幣價值を意味することになる。即ち之も價格論に歸着するマルクスは自由主義的價值論を本質的に覆へたのではなく、唯價格即ち交換價值の資本家に搾取されるのを攻撃したにすぎない。従つて勞働價值説も限界效用説も何れも商品としての物の價值を論じたにすぎない。

我々の云ふ價值とは、かくの如き商品價值ではない、資本主義社會の存在を前提とする商品の價格を論ずるのではない。従つて價格の象徴としての貨幣價值論ではない。資本主義的或は社會主義的經濟社會に於ける生産は何れも價格あるものを價值として行はれる。貨幣の取得が生産の目的である。何故ならば價格の本體は貨幣であるからである。貨幣を有するものは一切の經濟財を取得する事が出来ると云ふ金融資本主義の段階に於て、この傾向は愈々顯著である。價值とは、本章の冒頭に述べた様に國家の要求を満たし、國民の生活に必要な調整せられたる欲望を満足せしめるものである。それが貨幣價值を有しようが有しまいが問ふ處ではない。價值は生産物に内在する。購買力の有無に關係しない。價值は國民の欲望を充足せしめるものであるが、それは自然的欲望の充足ではない。國家の目的を意識した、即ち 天皇の赤子としての人格の要求する欲望である。道

徳を基とする欲望である。故に價値とは單なる物質ではない。例へば衣食住に對する欲望も動物的なものではなくて、必ず人格的な精神内容が織り込まれる。單に食はんがための欲望充足ではなく、國民として如何に生きるかと云ふ要求の一部分である。自分の職分以上の欲望は眞の欲望ではない。欲望は制限せられ、従つて價値も自然的價値ではない。此處に分限分度と云ふ觀念が生ずる。物もその處を得る事に依つて初めて價値となる。例へば一つの茶器を何も茶道の心得のないものが持てば、その茶器は價値を持たない。然し名匠が持てば千金に値するものとなる。故に價値は主觀的人格的な要素が加る。然し、如何に主觀的に價値があると考へるとしても、そのものに本來人間の欲望を満たし得る力がなかつたならば價値はない。金を如何に積んでも、之が直接に人間の食欲を充たし得ないから、この意味の價値物ではない。故に價値は單なる物質的のものでもなく、精神的だけのものでもない。精神物質兩面の統一した人間の欲望を満たし得るものが即ち價値である。この精神的欲求とは人格としての要求であり、それは國家の目的に依つて調整せられたる人間の欲求である。之價値を定義して、國家の目的即ち 天皇の大御心に依つて調整せられたる國民の欲望を満たす當體であるとした所以である。

又直接に國民の精神的物質的欲求を充足しないものでも、それが國家の生活に有用なるものは價値があるのである。武器の如きものが之である事は既に述べた通りである。同時に從來の價値觀念からすれば、それが商品としての價値を有するから價値があるとせられた贅澤品、奢侈品等は國家的見地からその價値を否定せられる。

右が我々の經濟價値觀念である。従つてこの價値を構成する要素は、其の中に含まれる貨幣價値ではない。かへつて從來貨幣に依つて評量せられた物或は力が價値の構成要素であつて、貨幣は單に價値を表す名目に過ぎない。だから我々の價値觀念に於ては貨幣は何等實質的構成要素ではない。價値の構成要素は、資源、努力、技術の三者である。即ちこの三者が相互に組み合はされて出來たものが、國家又は國民の欲求を充足する力を有するのである。この内努力技術の内には精神的勤勞が大きな要素であることは云ふまでもない。これを「資源努力及び技術を價値の根源とし」となす所以である。

然らばこの價値を測定する標準は何であるか。それは國家が或る特定の價値物例へば米の如きものを、當時の社會的政治的情勢より判斷して、何圓又は何十錢と決定し、之に基いて他の價値物の



貨幣價值を定めるのも一法である。この際標準價值物は、生産量の増減が少く、又國民の生活に必須缺くべからざるものを選定する必要がある。

貨幣は價值其のものではなく、單に價值物を交換する場合の表符にすぎない。名目貨幣これである。だから貨幣の多寡に依つては何等價值物の多少を測る事は出来ない。逆に價值物が多くあれば、之が表符たる名目貨幣も多くなり、價值物が少くなれば貨幣も減少する。故に貨幣の準備質は、資源努力技術に依つて生産せられる價值質量である。例へば米が六千萬石あるとして、一石三〇圓とすれば、これを引き當にして一八億圓の貨幣を發行する事が出来る。但し米は刻々として消費されて行くから、一年間を通じて各半期毎に實在する米の量が貨幣の準備質となるであらう。各半期の米の量が如何程であるか、又之に應じて發行せらるべき貨幣が如何程であるべきかは國家が之を測定し、又色々の社會經濟事情を考慮して其の量を決定し、國家之を發行するのである。既に金銀を準備としての貨幣制度は實際上廢止せられる勢にある。生産されるものの價值を貨幣の準備質とすると云ふ事は、驚天動地の變革の様に見えるかも知れないが、然しそれは人々が未だ黄金と云ふ偶像に非理性的な迷信を持つてゐるからである。今日の經濟に於ては、國內に於て

も又國際關係に於ても、物の價值を準備質として、事實上の貨幣を發行する事が一部に行はれて居る。例へば甲なる資本家が、倉庫の中の米も擔保として銀行から十萬圓借りたとする。誰も其の十萬圓を家に持つて歸るものはない。第一そんな大金を家に置くのは危険だし、日々の利子も損になる。其處で其の儘銀行に預金して置く。さうして支拂の必要があれば、其の額だけ小切手を書く。この小切手が貨幣と同じに流通して居る。甲が五千圓の小切手を乙に渡したとする。乙は銀行に行けば何時でも五千圓渡してもらへるのであるが、然しそれをすぐ現金に代へる様な事はしない。自分の預金帳の中に五千圓を記入して貰ふ。この場合銀行では現金五千圓と小切手の五千圓とを差別しない。銀行では小切手は現金と同じ様に流通するのである。唯帳簿の上で甲の預金額から五千圓減り、乙の預金額に五千圓増しただけで取引は終る。若し甲と乙との取引銀行が別ならば、手形交換所に於て交換される。つまり甲の取引銀行の持つてゐる中央銀行の預金から五千圓減少し、乙の取引銀行のもつてゐる預金が五千圓増加する。唯帳簿の記入だけで少しも現金の厄介にならず 交換は行はれるのである。

貨幣は交換の手段である。小切手は事實上の貨幣である。すべての手形は貨幣と同じに流通して

居る。現に約束手形の如きは、一度發行されてから、銀行の厄介にならずに、裏書に依つて經濟界を轉々し、立派に貨幣の代用をしてゐるのである。之は明に新しい貨幣制度を示唆するものである。金銀の上に立つ舊い貨幣制度は事實に於て既に破壊されて居る。そしてそれにかはるべき新しい制度は既に生まれてゐる。すみやかに迷信化し偶像化してゐる舊い制度を改廢して新しい貨幣制度を確立すべきである。

金銀を準備とする貨幣制度は長い間經濟界を支配した。それは色々の効果もあつたが今は有害無益となつて來た。今日の經濟の矛盾は之に原因する事が多い。手工業時代に於ては社會の生産力はほゞ一定して居た。機械を使用せず、主に人間の勞働力に依つて財物を作つてゐた時代には、今日働かすぎると、明日は疲れて平素より少ししか生産が出来ないから、社會生産總量は、ほゞ一年を通じて一定してゐた。従つて交換要具たる貨幣も一定量を保ち得るものでなくてはならなかつた。生産總量が一定して居るのに、貨幣が多くなつたり少くなつたりすると、交換が完全に行はれない。生産費が一定してゐるのに、貨幣がどん／＼増加しては、物價が無暗に高くなり、民衆の經濟生活を不安にする。逆に貨幣が餘りに減少しては、物價は廉くなるばかりで、生産がとまつてし

まふ。生産と消費との關係が圓滑に行はれない。従つて社會の生産總量がほゞ一定してゐた手工業時代に於ては、金銀のやうな生産額の増減の少いものが適當な貨幣であつた。

而るに今日の經濟は、機械の發明に依つて、社會の生産力は飛躍的に又急激に増加してこの様な事情に於ては、金銀は有害無益となる。即ち生産量が増加するのに、貨幣量が一定してゐては、物價は廉くなるばかりである。餘り廉くなれば生産は行はれない。生産設備を如何に増加しても、増加する程物價が下落しては、生産を中絶するより外はない。この故に生産者は生産制限を行ふ。紡績業者は操短を行ひ、ブラジル政府はコーヒーを焼き捨て、米國の農民は小麦を石炭の代りにストープに投げ入れるのである。今日の貨幣制度の下に於ては、生産を一定限度に制限する事は、生産者の打算からして、避け得られない。然しこの生産者の私利的打算は社會國家の利益と一致しない。一方には食ふに食なく、着るに衣なき大衆があるからである。故に國家は生産者の私利と國家の利益とが一致する様にせねばならない。勿論これは經濟機構全體の改革に待たねばならないが、少くとも貨幣制度の改革が極めて大きな役割をもつのである。即ちいくら生産を増加しても、それを買ふ貨幣がその生産増加に應じ得る様にせねばならぬ。さうすれば生産者は最早生産制限を行ふ必要

はなく、それこそよいものを廉く又數多く生産すればする程貨幣を取得する事が出来るから、財物は國家の必要とする最大限度迄豊富に生産される事になる。即ち財物がどん／＼増加すれば貨幣もそれに従つて増加し、反對に生産が減少すればそれだけ貨幣も減少すると云ふ伸縮自在の貨幣制度が必要となるのである。之が即ち我々の云ふ「資源勞力技術に依つて生産せられる價值質量を貨幣の準備質質たらしめ、國家之を發行し、單に公益的價值を有せしむ」と云ふ貨幣制度である。

今の日本は金を基礎にして貨幣を發行する立前になつてはゐるが、然し今日流通しつゝある貨幣が、既に名目貨幣となつてゐる事は何人も疑はない。それは國家の信用を基礎として發行せられてゐるのである。唯責任準備金を必要とする點に於て今だ黄金の桎梏から離脱する事が出来ない迄である。

今日の紙幣は金と引き換へられる事を條件として、他の財物と交換される様に見える。然しそれは金に對する迷信に過ぎない。既に日本の紙幣は金に引き換へられないではないか。それでも立派に流通してゐるのは國家が之を保障するからである。まして國家が嚴然たる價值物に基礎を置いて、財物と引き換へられる事を國家が保障するならば、それが圓滑に流通することは當然である。

經濟の目的は國家及び國民の生活に價值あるものを生産する事である。既に述べた様に、一切の經濟財は享有財であり、従つて私利私欲のために之を悪用する事は許されなければなりでなく、そのやうな經濟行爲は經濟自體の發展を阻害するものである。自由主義的營利主義經濟が之を示して居る。營利主義的に經濟財を利用する事が、我が國體上又は人間の社會生活上許されない事は既に述べた。何故ならば、財を私有し自己の營利に依つて之を使用するならば、必ず其處に貧富の懸隔、持てるものと持たざるものとの争鬭を惹き起し、國家の統一調和を亂すからである。

而も營利主義的經濟は經濟其ものの發展を阻害する事になる。元來自由主義經濟に於ては必ず營利主義となる。何故ならば、自分の家に必要なものは皆自分で作つた家族經濟であるならば、誰しも好んで、粗悪な品物や不用な物品に澤山の勞力を費して生産するものはない。すぐに自分が困るからである。而るに自由主義的商品經濟に於ては、放つて置けば社會に不必要なものが無暗

に生産されたり、或は粗悪な品物が高く生産されたりするかも知れない。其處で自由主義社會に於ては何等かの社會的 management が必要となる。此處に社會の生産を自動的に管理するために設定されたのが自由競争の原則である。この自由競争の原則は別に法律で定められたわけではないが、事實に於ては今日の法律や經濟は勿論道徳思想等の原則となつたのである。

即ち自由競争の原則は二つの目的のために設定された。第一には社會で一番必要なものを、先づ最初に、且最も多く生産さすと云ふ事である。第二は出来るだけ良いものを出来るだけ安く生産さすと云ふ事である。そして自由競争の原則は、この二つの目的を良く果して、社會の生産を自動的に管理して來たと云はれたのである。何故ならば、至すべての生産者を自由競争に委せて置けば、社會に最も必要なものを生産するものは最も多く報酬を受ける。即ち最高の値段で賣れる。然らざるものは最も少く報酬される。即ち最も廉い値段でしか賣れない。例へば制服は學生にとつては誰にでも必要なものである。處が一方では靴の紐に特殊の意匠をこらして、結ぶのに大層便利なのが發明されたが、その生産費は制服の生産費と同じだとする。この場合、學生に二つの内、一つを撰ばせるならば誰でも、服の方を撰ぶであらう。靴紐の方は一本五錢のでも間に合ふが、制服の方は

無くてはならぬものだからである。さうすると制服の生産はどしどし生産されるが、靴紐の方はうんと値段を下げない限り社會から要求されない。この様な自動的作用に依つて、自由競争の原則にさへまかせて置けば、社會の生産は社會の必要に應じて管理されて行くと云ふのである。然しそれが事實上に於ては全く破れ去つた事は、自由競争のもとに於ては、生産は社會の必要や要求に依つては決定されない。購買力を伴ふ需要に依つてのみ決定される。従つてどんな痛切な要求が社會に在つても、購買力の伴はないものは生産されず、たとへさほど社會的に必要なものでなくとも、購買力のある金持が要求するものであれば直に生産されるのである。この様にして自由競争の原則は、第一の役目を果たすことに完全に失敗した。

然らば第二の出来るだけ良いものを出来るだけ安く生産さすと云ふ役目はどうであるか。自由主義の原則に従へば、良いものを安く生産するものは榮え、悪いものを高く生産するものは減ると云ふ事になるのである。例へば此處に二人の生産者があつて、一人は良い鉛筆を一本一錢で生産し、他はそれより粗悪な鉛筆を二錢で生産するとする。この場合、誰もわざわざ粗悪な鉛筆に二錢も出して買ふものはないから、その生産者は、前の生産者に自由競争に敗けてその生産を中止するより

外はない。そして良い鉛筆を安く生産するものは、その分だけ生産を増加してますます榮える。かうして自由競争と云ふ原則に社會の生産を管理させて置けば、自動的に社會は良い品を安く供給される云ふのである。

自由競争の原則が、生産者對生産者との間に公平に行はれる事は事實である。而るに生産者對消費者の關係になると、事情は全く別になつてくる。消費者と云ふのは云ふまでもなく國民大衆である。今日の經濟組織に於ては、生産者の第一の目的は、社會に良い品物を安く供給することではなくて、自分が金を儲ける事であるから、良い品物を安く生産する事が自分の儲かる道である間は、通りにやるけれども、さうでないことをさつたが最後どんな事をするかわかつたものではない。この様な事實は至る處に現はれて居る。

我等は日本の人絹業者や、棉絲紡績業者が生産制限を行ふのを見て不思議に思ふ。ほろをまどつて而も新しい人絹や綿布を欲しがつてゐる人々は、日本全國に澤山あらう。何故もつと生産を増加して、これに充分に供給しないのであるか。その理由は簡單である。即ち生産を制限して値段を一定限度に留めた方が、會社の利益が多いからである。一定限度以上生産を増加すると國民の購買力

が之に伴はないため、所謂生産過剩を來して企業は引き合はなくなつて來る。之等は紡績會社の操短を非難してもためである。現在の經濟組織が改まらぬ限り、營利が生産の目的である限り、彼等をして生産を増加せしめる事が出来ない。若しや又コーヒーや小麦の様に、自由に生産を制限し得ない商品であると、ブラジル政府はコーヒーを焼き捨てたり、米國の農民が小麦を石炭の代りにストープに使つたりする様に、せつかく生産したものを破棄してまで値段を維持しようとする。コーヒーを飲みたい人がなくなつた譯ではない。小麦三合あれば、まだ一日餓死せずむ人も澤山ある。然し生産者にとつて、大衆がコーヒーに對する要求を或る程度以上満足せしめず、小麦を得られずに餓死する人々が残つてゐる方が、結局彼等の打算を満足せしめる事になるのである。故に自由競争の原則の第二「良い物を安く生産するものは榮え、悪いものを高く生産するものは滅ぶ」と云ふ原則は實際に於ては行はれては居らない。極言すれば儲ける事は良い物を安く生産することではなくて、社會の一定の人間を餓死線に在りて、その生産量を一定限度に生産する事である。かくして自由競争の原則はこの點に於ても社會の生産を管理する事に失敗した。

この様に我等の根本の問題は、結局購買力に在る事がわかる。大衆に購買力さへあれば、

彼等の必要とする物資をどし／＼生産させる事が出来る。大衆は購買力さへあればせつかく生産された小麦を石炭代りにストープにたかなくてもすむ。

それならば購買力は何處から生まれるか。農民の有する購買力は農業生産から得た利益から生まれるのであり、労働者の購買力は、工業に従事する事に依つて得た賃銀から生まれるのである。例へば自動車工業が盛になつて多数の労働者が之に傭はれ、高い賃銀を支拂はれたとする。この労働者はその得たる購買力を以て、人絹や綿布や小麦やコーヒーを需要するようになる。そして之は人絹紡績其の他農業等、凡ゆる生産を刺激して、その生産量を増し、それが又新に購買力を生み出すようになるのである。之に反して一旦生産が萎縮し初めると、それは直に購買力の萎縮となつて現はれ、更に又生産の萎縮を來すのである。それは果てしなき環であつて互に原因となり結果となりつゝ影響し合ふのである。

其處で結局、社會の購買力を増加するには、生産をもつと盛にして、大衆の所得を多くするより外はないのである。然らば一體どうしたらよいのであるか。それには一般の資本家以外に、營利にとらはれず、自由競争の埒外に超然たる何物か偉大なる力をかりる外はない。それは何であるか。

國家が之である。一方には生産力餘りあつて、物資を山と積みながら、賣れないで困つてゐる生産者がある。他方には生きんがために物資を命がけで要求しながら、買へないで困つてゐる大衆があるとすれば、その大きな矛盾を解決するには、社會生活の統制者たる國家が自ら立つてするより外はないのである。これ我々が「經濟は之を營利主義の桎梏より解放し、中略、國家之を統制管理す」と云ふ所以である。

九

皇業實費のために分掌分有せる財物を活用して、價値物を生産する方式を經營とよぶ。即ち皇産活用、經濟實費の方式が經營である。故に經營は營利主義的個人自由主義的經營ではなくて、國家の富強を増し、國民生活を極度に向上させる事を以て經營精神とする。即ち之が爲には資源と勞力と技術の許す限り、極度に増産を行ふのである。これには國家が國民生活の要求需要を測定し、國家が軍備を充實し、外交を振作するにはどれだけの資財を必要とするか。又國民の生活を維持發展するには、どれだけの物資が必要であるか等を、測定し、之に基いて、計劃的に生産を行ふのであ

或は云ふかも知れない。そんな事をしたら、國家はたちまち生産過剰に陥つてしまふではないかと。然しそれは舊い營利主義の經濟觀にとらはれた人の懐く錯覺にすぎない。前にも述べた様に、國家及び國民生活に、物資に對する要求がないのでは決してない。痛切にそれは要求せられてゐるのである。然るに營利主義の經濟に於ては、之等の切實な要求は、購買力を伴はないために無視せられ、従つて生産過剰とは、購買力の伴はない財物が多くなる事である。現代の戦時下の日本に於て、最も缺陷とする處は、軍需資材の不足と之を産み出す生産力の不備とである。例へば機械の生産並に之を生産するに要する資源工業例へば製鐵、製鋼事業等が、國家の必要とする所要量に満たない點である。その原因は、永い間の營利主義經濟時代に於て、それらの事業は、他の輕工業等に比して利潤が少いために無視せられ、放置せられてゐたからであつて、決して國家が不要としたものではない。又生活物資例へば米、衣類等が不足して居るに拘らず、贅澤品や奢侈品が氾濫して居るのも戦時下日本に於ける苦々しい風景であるが、これも皆生産財が營利主義に依つて運用せられたために、眞に國民生活に必要なものの生産が購買力を伴ふこと少く、利潤をあげる

事が少いために、生産が増大せず、現在の如くその矛盾を暴露したのである。

然るに此處に、國家に依つて統制されたる計劃經濟に於ては、國家は其の必要とする財物の量を測定し、計劃的に生産を行ふと共に、それに伴つて國民の購買力を國家自らが作り出すのである。國民生活を極度に向上せしめる大増産を行ふについては、驚くべき巨大の勞働力を必要とする。勿論失業者等はありません。さうして日本國民として恥しからぬ豊かな生活を営むに足る程の収入が保障せられ、賃銀が與へられるのであるから、此處に尤大なる購買力が生まれる。生産過剰等は絶對に起らなす。

斯くの如き根本的變革は、唯國家のみがなし得るのである。戦時下日本に於ても、經濟の計劃性の必要は充分に認められて來たが、未だに自由主義經濟の殘滓が執拗にこの飛躍的轉換を阻害して居る。此處に實際の飛躍的増産體制を整備されない處へ、官僚的統制が加はるために、その統制はむしろ生産の萎縮と社會的財の不均衡を來し、開相場の出現を必然とするに至る。

根本的改革を行はずして、唯形式的法律的に統制を強行せんとすれば、獨り統制經濟の破綻を來すのみでなく、生産其のものをも萎縮させてしまふ。いまや日本は戦争遂行のためにも、又飛躍的

經濟體制建設のためにも、思ひきつた國家の計劃經濟に進む時である。

これまでは生産の萎縮が購買力を萎縮せしめ、購買力の萎縮が又生産を萎縮せしめて、互に原因となり結果となりつゝ、無限の景氣不景氣の環をめぐりつゝあつた。

今度は思ひきつた計劃的増産が購買力を大規模に増大せしめ、又購買力の増大が又増産を要求して、永久繁榮の環を作るのである。これをなし得るものは、營利主義に超然たる國家にして初めてなし得る事は明である。

次にこの國家的に統制せられる經營の形態は如何なるものであるか。この形態を大別して統一的經營と、分化的經營とする事が出来よう。統一的經營には國營（國家管理）や公營がある。産業の性質上、生産の増大のためには、集中的統一的經營を行ふ方が適當である事業は、國家或は公共團體が經營の主體になるのである。この種類に屬する産業としては、資源工業（鑛山、化學工業、肥料工業、電力工業等）、軍需大工業、交通、電信、電話金融事業、それから獨占過程を取りつゝある。工業、例へば製糖業等の如きこれである。之等は何れもその生産設備に莫大なる費用を必要とするものであり、到底個人や會社等の企て及ばざるものであり、同時に小規模にやつたのではその

設備にくわれて、單價を高くせねば引き合はないから、増産の如きは思ひも及ばない。之に反して國家等が之を經營すれば、充分なる設備と完全なる科學の利用が出来、而も營利事業ではないから生産品も低廉且豊富に出来る。之等の重要な産業が私營に委かせられてゐる限りに於ては、營利主義の極格のために、一定限度以上に生産を増加し得ない事は前述の通りである。

然し凡ゆる生産を國營に移すと云ふのではない。即ち個人の創意を必要とする産業や、工場ややうに大經營の不適當なるものなどは分化的經營にする。例へば綿絲業を例にとると、綿絲綿布を生産する事は何等個人的創意は不必要であり、且大規模に生産した方が適當であるが、之を裁つて衣服を作る場合には、個人の創意が加はらねばならぬ。この洋服業はだから、個人或は小規模の工場に委かせる。我が國に於ける農業の如きも、土地を一家族の勞動力に應ずるやうに分配し、家族が經營の主體となる分化的經營を適當とする。その他藝術的工藝品の製造等も之に屬する。現在の中小商工業の内には、國家或は公共團體の仕事としてやつた方が能率があがるものが多い。之等は産業の再編成過程に於て、當然國家又は公共團體の事業の中に抱擁せらるべきものである。而も猶その中には分營を適當とするものも少くない。



何れにしても主要産業を國營公營とし、これをして飛躍的増産を行はしむれば、國家の經濟大綱は確立する。中小商工業にも、適當の統制を加へる必要はある。然し主要産業の國營公營とその大増産とに依つて、購買力が驚くべき増大を來す好影響は、中小商工業にも及んで、それらの活動範圍を擴大するに違ひない。現在のやうに主要産業を私營に委せて置いて中小商工業者にそれを競争せしめるのでは、中小商工業者が劣敗者となり、困窮没落するのは當然である。現在の我が國に於ては、主要産業は之を私營に委せてあるものが多く、その云ふ戰時統制も、徒に主要産業を擁護して、平和産業即ち中小商工業の大部分を壓迫する傾向を示して居る。我等は、營利主義を脱却せる國家企業及び産業の再編成を行はなければ、到底解決する事の出來ない重要な問題である。國家の計劃經濟従つて産業の再編成が行はれるならば、國家の企業は、寧ろ中小商工業及び農民の保護者であつて、斷じて競争者ではない。従つて彼等は社會の購買力の飛躍的増加から恩恵を受けるばかりでなく、今日蒙りつゝある私營大産業の脅威を除去さるゝことに依つて、二重の恩恵を受けるのである。

## 十

營利主義經濟に於ては、購買力を伴はない生産は抑制せられるために、飛躍的増産は出來ない。若し飛躍的増産を敢行するとすれば近代科學を極度に利用して、機械の善用をなすべきである。而るに營利主義に於ては、飛躍的増産は寧ろ之を抑制するために、科學の利用機械の活用は不充分且小規模にとゞめられる惧れが多い。換言すれば今日の經濟の有する矛盾は、近代科學の進歩の速度が餘りに急激であつたために、經濟機構の進化がそれに追いつくことが出來なかつた事から起つたものである。即ち、近代科學の發達のため、社會の生産力は飛躍的に増大せるに拘らず、それを容れる經濟機構が舊態依然たる自由主義經濟であつては、其處に矛盾が起り、缺陷が生ずるのは當然である。舊來の自由主義經濟に於て最も恐れる處は、生産過剩である。良いものをやすく澤山作る事が目的ではなく、利潤をあげる事が目的であるために、彼等は屢々生産制限を行ふ必要にせまられ、其の爲科學の利用が往々にして躊躇され、引いては科學の進歩迄阻止する形勢を招いた。我々の新しい經濟機構に於ては、勢力の能率を増進し、産業の飛躍的發展を期待するために、極端に科

學を利用すべきである。新しい機械が発明されたならば、直にそれを利用するがよい。そして勞力を省き、生産の能率を上げるがよい。我等は少しも生産過剰を恐れないのである。農民がいつまでも、朝から晩まで眞黒になつて働いて、而も食ふものも食へず、着るものも着られず、子女の教育も出來ずに居るのが決して日本の農村生活であつてはならない。色々の改革が必要であるが、農村に機械の利用をなさしめるならば、勞力の能率は直に増進して、農村の再建のためになることは明である。

然らば疑問は直に起るであらう。この様に新式機械を採用したならば、勞動力をそれだけ生産界から驅逐する事になる。その驅逐された勞働者は、失業者となつてそれだけ購買力を減殺し、計劃經濟の増産計劃を跛行的ならしはしないか。これは營利を目的とする自由主義經濟に於ては尤も疑問である。然し我々の經濟體制に於ては、この心配は絶無である。若し新式機械の採用に依つて、人間勞動力の一部分が不用になつたなら、これこそ我々の經濟の目的が、やうやく達せられ始めた時である。かりに、これ迄勞働者の八時間勞働を以て國民の生活の最小限度保障するに足る生産を行つてゐたものが、新式機械の採用に依つて、勞動力の八分の一を減少し得たとする。その時は八

分の一の勞働者を失業者とする代りに、勞働時間を七時間に短縮して同じ賃銀を支給するのである。この様にして、科學の發達に伴ひ、機械力を以て人間勞動力に代へる結果、國民の勞働時間を六時間とし、五時間とし、四時間とし、遂には零とする處まで行くのが我等の目標である。

この様に、一つの機械が発明される毎に、人類の勞働者が救はれると思ふときに、科學者も研究の仕甲斐があり、發明の苦心も意味があるのである。新しい機械が発明される毎に、勞働者が首切られるのでは、發明家も發明がいやになるだらう。それでも科學者は學問そのものの興味から研究に没頭する。ましてその發明に依つて、人類二十億の幸福が廣らされると知つた時、科學の發達は期して待つべきである。

第二の疑問は、機械力が餘り發達して、人間がちつとも働かずとも食へるようになったら、人間は皆懶者になつて、遂に滅亡してしまひはしないか。それこそ唯物思想にとらはれた考へ方である。今でこそ生活物資の量が限定されてゐるから、物質力(今日の經濟組織では資本力)の大きなもの程偉いとせられ、物資生産以外に働く仕事はないやうに思はれてゐるが、働くといふ意味は決してそんなに狭いものではない。人間の生活は廣汎である。物質生産の仕事から解放されたからと

云つて、人間は寝ころんでばかりはゐない。昔の武士は多く物資生産のために働く必要はなかつた。然し武士道はこの武士階級の内から起つたのである。科学や哲学や藝術や、それらの偉大なる創造は、人間が物資生産から解放された時初めて生まれるのである。我等の待望する理想の社会は、至すべての人がこのやうな高貴な生活を爲し得る如き世界である。

## 十一

國內が自由主義的營利主義經濟である限り、經濟の目的は國家又は國民の要求を満たすために行はれず、貨幣の取得を志すものであるから、外國との經濟關係に於ても、外國から凡ゆる手段に依つて財貨を獲得するのが主である。之即ち自由貿易主義であつて金本位の貨幣制度と共に、從來の國際經濟を支配したものである。而るに、我々の經濟體制が出現すれば經濟は貨幣の取得でなく、眞に國家國民の必要なる物を生産する事になり、同時に金銀本位の貨幣制度は廢止せられる。此處に貿易と云ふ觀念及びその意義も一新されるのも當然である。

一體貿易と云ふ事については妙な錯覺が行はれてゐる。今日何處の國でも、出超を喜び、入超を

憂ひて居る。出超は即ち富國策であつて、入超は直に貧國策を意味する如く考へてゐる。然し個人と個人が交換する場合に於ては自分の出すものが少く、相手から取る品物が多いとき、その交換は利益があると云ふのではないか。何故國家と國家との間に於てのみ、別の原則が支配するのであるか。他日大いに外國から品物を支入れんがために、出超すると云ふのなら意味がある。即ち入超のための出超ならば意味がある。出来る事なら永久に出超を續けたいと云ふのはおかしな話である。

然らば何故かゝる矛盾が平氣で考へられ、且國策の目標として採用されたかと云ふと、それは國內の購買力が制限されてゐたからである。國內に供給する物資の量は、一定限度に制限した方が生産者は利益がある。然し一方、そんな事では生産力を充分働かして、利益を最大限に得る事は出来ない。其處で購買力を國外に求める。さうすれば初めて、國內の動いてゐなかつた生産力が動いて來、生産者は國內と國外と兩方から利益をあげる事が出来るのである。即ち、出超は入超が目的ではなく、國內の購買力の不足を補ふ方法である。

従つて、出超の時は好景氣である。之が資本主義組織から出る對外經濟の原則である。そして各

國が皆出超の競争を行ふ結果は、所謂經濟的帝國主義となり、流血なき市場獲得競争が世界到處に行はれて居る。之が自由主義貿易即ち市場の獲得保持をめぐる、激烈な市場獲得競争が今世紀初頭に迄持ち越されてゐるのである。この國家の代表的なるものは英國であつて、彼は、數世紀に亘り、世界の四分の一を植民地又は半植民地とし、この大英帝國ブロックを基礎として、世界の市場權を把握し、ポンドの威力、無敵海軍の威容を楯として、世界に君臨してゐたのである。

然るにかくの如き自由貿易主義即ち出超を國策とするやり方は、次第に事實上崩壊し、又理論上からも否定せられる。何となれば、事實に於て、現在の世界は各國家或は國家聯合のブロック化し、各國は其のブロック内に於ける自給自足經濟體制の確立に狂奔し、又ブロック相互間に於ても、自由貿易主義は行はれず、有無相通、物と交換の體制を示唆するパーキンソンシステムが採用されつゝあり、又對立するブロック間に於ては、市場封鎖を行ひ、或は關稅の障壁を高く築いて居り、自由貿易體制は既に崩壊に近附いて居る。然るに我が國に於ては、自由主義制度が残存するため、未だに出超を以て貿易國策として居るものが多い。我々の經濟體制に於ては、何も外國の市場をあてにして生産をする必要もなく、又それは有害である。何故ならば我等は國內（自給自足の東

亞經濟ブロックを指す）に於て、いくらでも購買力を増加せしめ得るからである。一體國內に未だ飢ゆるものが多いのに、何のために國外に財物を運ぶ必要があるか。勿論我々は我が國獨り榮えれば、他の國々はどうでも良いと云ふ様な偏狹な國民ではない。絶えず他の國々の利益も考慮し、延いては世界二十億の人類に惠福を頒ちたいのが日本國民の態度である。然し順序から云へば、あくまで國內の民衆の衣食足り、軍備充實し、所謂富國強兵の實擧つて、初めて外國に施すべきである。營利主義的自由貿易主義の如きは、獨り順當なる經濟的發展を阻害するばかりでなく、世界の轉換期にあつて、我が國の發展を立ち遅らしめるものである。

貿易の意義は有無相通する事にある。日本でなくては出来ない品がある。又出来ても日本程安くても良い物が出来ない時もある。一方日本ではどうしても出来ない品がある。日本に資源が不足して居るものもある。かうした品を有無相通するのが貿易である。従つて原則として、我等の目標は貿易の平衡にある。今日の如く、徒に賣らんがために、海外にダンピングを行ひ、國內の資源勞力を消費損失する如きは、國民の餓死するのを顧みず、一部の財閥の利益を計り、又外國を利益する賣國奴と云はざるを得ない。

この意味に於て、我等は「貿易は國家之を管理し、輸出入共に國家的必要に應じ、量質共に制限統制する」となす所以である。

### 第七章 八紘一宇の顯現

一

世界は今や歴史的轉換期にある。即ち過去數世紀に亘つて世界秩序の基調をなした唯物自由主義文明が根柢から崩壊しはじめ、もはや如何なる方法を以てしても、舊秩序を維持する事が出来なくなつた。この文明の代表者は云ふまでもなくイギリス帝國であつて、二十年前の歐洲大戰以來、英國を中心とする歐米諸國家は、國際聯盟其他の凡ゆる外交的手段を盡くしたのは、皆この舊秩序の維持に外ならなかつたのである。それにも拘らず、歐洲第一次大戰以後今日に至る迄の事象は、新しき世界秩序の前奏曲としての、舊秩序崩壊の音響を告げないものはない。

今や第二次歐洲大戰の勃發に依つて、世界の各國は何れも舊國家生活姿態よりもがき出でんとし、て慘澹たる苦惱を體驗して居る。而も舊來の文化の殘滓を清算することは容易な事ではなく、世界は

今や果てしのない破壊の暗黒界を彷徨して居るやうである。

この有様は正に世界が生れかはらんとする前夜の形相であつて、おそらく大戦の進行と共に、一切の舊きものは滅び去つてしまふであらう。そして新しい指導原理と正しい力とを有するものが、來るべき世界の王者たるべきことも見易き事である。

我が國も、支那事變の遂行に依つて、世界を襲ひつゝある世界的轉換期の渦中に巻き込まれて居る。若しいつまでも舊い考でこの世紀の變革過程にある事象に對處して居るならば、必ず遅かれ早かれ、世界の落伍者となる外はない。よろしく世界の動向を達觀して、世界諸國より一步を先んじ、優秀なる國家體制を確立し、進んで世界新秩序の建設を指導する氣概を持つて、他に對處すべきものである。之即ち我が八紘一宇の國是の顯現であり、我が國の歴史的使命でもある。我が國の外政とはかゝる事を遂行する國民的行動である。外政の遂行は、我が國の將來を支配する重大事であつて、殊に現代、如く混亂せる世界の情勢下に於て、よく之を切り抜け國家永遠の隆昌を確保する事は容易の事ではない。我々の理想は世界的雄邦を建設し、積極的に世界秩序を建設するに在る。そして今や、今日の一日の苟安を貪る事は國家百年の長計を失ふ事である。雄大なる外政を必

要とする事今日より急なるはなし。

日本の日本より世界の日本へ。之は既に到達する事が出來た。明治維新は日本本來の姿に躍進した時であり、日本の日本が建設された時である。日露戦争は世界地圖の書き方を一變せしめた。即ち從來極東の支那の屬國の如き有様で世界地圖の東の端に記された日本列島であつたが、日露戦争以後堂々たる獨立國として認められ、又日本は世界地圖に於て西洋と東洋との中央に位置する様になつた。これ世界の日本となつたのである。今や一步を進めて、日本の世界たらしめねばならぬ。即ち我等の窮極の目標は日本民族の力と理想とを以て世界全體の儀表となり、中心となり、以て混亂の極にある世界の秩序を統一し再編成し、世界文化の再建に努力せねばならぬ。之即ち世界二十億の人類に對し、皇化を實體的に光被する事である。即ち我等は、日本の日本、世界の日本たる事に満足せず、日本の世界たる事を期さねばならない。

既に各處で述べて來た様に世界は今や、白人本位の世界秩序から急速に變革の道程に入つて來た。既に過去の歐洲大戰に於てこの傾向は顯著となつた。西洋が從來の世界地圖の中心になつて居り、日本は極東に位置して居た。これは即ち世界を動かし、世界の中心勢力たるものが歐米諸國で

あつた事を物語つてゐる。然るに最近は何意か無意か知らぬが、殆ど進んでの世界地圖の中心は太平洋となつて來てゐる。日本は既に極東の一國ではなく、世界の中心となつて來たのである。歐洲大戰後作られた國際聯盟は、表面上英佛が中心となつて、歐洲及び世界の平和の保障の如くははれて居つた。然し之はドイツを破つてその覇權を握つた英國が、かへつて植民地半植民地の動搖の深刻なるを懼れて、之を集團保障を以て抑へ、その覇權を維持しようとする企圖の下に作られた事は明である。國際聯盟は英佛を大株主とする植民地保全會社であつた。然しこの體制は最近に至つて、歩々崩落を開始した。日本の脱退を契機として、獨伊も續いて脱退し、植民地諸國の全體的反英抗英の機運も益々濃厚となつて來た。故に國際聯盟的世界秩序の最初の有力なる破壊の一石を投じたものは實に我が國であり、滿洲事變こそこれが烽火であつた。愈々これを擴大充實して東亞の新秩序の建設より進んで世界の再建を行ふ事が我が外政の眞面目である。

二

故に我が外政は決して現代の通念である國家相互間の機軸摩擦を調節する政治技術でもなく、又

帝國主義的な支配的外交技術でもなく、いはんや通商の補助促進の商賣技術でもなく、又外交家の專斷する特殊の技術でもない。その指導原理は、世界の轉換期に當つて、從來英米等の帝國主義的支配に依つて苦しめられて居つた諸民族を解放し、更に之を優秀卓越した文化をもつて向上的に再組織し、各民族の特質美點を充分に發揮せしめると共に、やがて世界文化の建設に赴かしめる事にある。故に外政とは偉大なる世界的新秩序建設運動であると云ふ事が出来る。この意味に於て滿洲事變に依つて眞の外政が生まれたものと云へよう。その第二步は支那をして眞に我が國に心服せしめる事に依つて日滿支一體の體制を樹立すべきであり、この意味に於て今次の支那事變は我が國外政の飛躍的發展を必然ならしめるものである。

現在迄の世界に於ては、白人が有色人種を支配搾取し、白人諸國は之に依つて得た財富を分け合つてその文明を享樂して來た。白人がアジアから奪つた財貨が如何に莫大なるものであつたか。元來資源に乏しいヨーロッパの諸國が現在保有して居る富の大部分は、殆ど直接又は間接にアジアの搾取物である事は明である。後に白人の世界搾取の實狀を述べるけれども、この反面にアジアの諸民族が殆ど搾取のために死に瀕して居る事實を彼等は無視して居るのである。又白人が或は銃殺に

依り、焚殺し、或は衣食を奪つて有色人種を殺戮した数は、概數四億に及ぶと云はれて居る。之を解放する事は獨りアジア民族の更生のためばかりでなく、かゝる不人道を敢てしながら世界の平和の使途、人類の幸福の保障者であるかの如く空嘯く白人の自惚と無理と非道義性の許すべからざる罪惡を世界から絶滅する意義が更に大きいのである。我が外政の中心は實に被壓迫民族の解放と、之が我が國を中心とする再編成にある所以である。

この外政の實行に對し、最も脅威を感じるのは英國である。之に對し如何なる方針を以て臨むかと云ふ事が外交方策として重要な意味をもつてくる。又同じ西洋國家でも英國に對し快からざるドイツ、イタリアに對し如何なる方策を以て臨むか等々の問題も當然考慮されるべきである。

我が外政は以上のやうな指導原理に立脚するのであるが、かゝる外政を日本が執らなければならぬ原因は、日本も又歐米諸國の壓迫を受けて居る被害國家であるからであつて、この點アジア諸民族と同様の立場に置かれて居る。我が國は偉大なる人口の増加力もち、而もそのはげ口は大部分英佛等の諸國に依つて閉塞せられて居る。かゝる状態の内に、我が民族の活躍發展の天地を求めると云ふせばつまつた要求が働いて居る事も事實である。この點に於ては獨伊の如く持たざる

國である。唯我が外政の獨伊等と異なる點は、單に持たざる國日本が持てる國のものを奪取しよとする事を以て全部としない點である。勿論持てる國と持たざる國とが餘りに懸絶してゐると云ふ事は、道理にも合はず、又何時までも持たざる國でなくてはならないならばその國は自滅するより外はないのであるから、この世界秩序を革正せねばならない。我が民族としては、大陸に又大洋に發展すべきであるが、それと同時に世界の不合理不正義を正して、眞に公正なる世界秩序を再建しようとする指導精神に貫かれてゐる。

この外政の指導精神は即ち天皇の大御心の發現せられたものである。凡ゆる民族を天皇の統治下に歸屬せしめ、天皇の德澤に浴せしめるのである。然らざる場合にはそれらの民族は永久に他の侵略者のために國力民力を搾取せられてしまふ。現在の世界に於て白人がこの恐るべき搾取者である事は前に述べた通りである。これは單に被壓迫民族の不幸であるばかりでなく、壓迫者自身も結局墮落して行くのは自然の理である。白人諸國家が搾取をつげながら物質的享樂にふけつてゐる内に、救ひがたき道義的頹廢と民族的腐朽の風が濃くなり、終には滅亡してしまふ。故にアジア被壓迫民族の解放は同時に壓迫者自身をも道義的に又民族生活力の上からも、之を救済する事



になるのである。

從來帝國主義諸國家が先住民族を支配せんとするや、威壓と殺戮と詐略とを以てする。劣弱なる民族を壓迫し易いのが普通である。かつ彼等は被壓迫民族が文化的に向上する事を好まず、どこまでも征服に次ぐに殺戮詐略を以てし、終に民族的生命力を枯渇せしめてしまふ。若し被壓迫民族が統治民族と同じ文化水準に迄向上する時は、抑壓に困難を感じるからである。この様にして、白人帝國主義の支配下に在る民族は、その支配征服を受ける事に依り、愈々民族的文化を衰亡せしめ、民族生命を破壊せざるを得ない。これは有色民族の征服支配を行へる西洋諸國家の避け難い特質が然らしめるのである。西洋諸國家は、國內に於ても皆、征服者と被征服者、支配者と被支配者と云ふ互に相容れない對立關係から出来てゐる。彼等の國家に於ける君主又は主權者は民衆の支配者であり、征服者である。近代國家に於ける資本家階級は國民大衆の征服者支配者である。故にこの兩者の對立争闘が絶えない。さうして強いものが少しでも力の衰へたものを打ち破つて覇權を握るのである。この方式は當然他民族に迄及ぶのである。彼等に在つては弱小民族に對する態度はあくまで残忍であり無慈悲でなければならぬ。所謂帝國主義的支配が之であつて、彼等のよく口にする人道

とか平和とか云ふものは鐵を蔽へる法衣にすぎない。我々は感傷的に被壓迫民族のために同情の涙をそぐのではない。然しこの不合理非道義を黙許する事は斷じて出来ない。我が民族の當然の發展を阻害し、又アジアの同胞をいつまでも殺戮と搾取のもとに戦慄せしめつゝある残忍無比の白人帝國主義の跋扈を、一日といへども放任する事は出来ないのである。故に我が外征の成功不成功は即ち人類將來の繁榮か衰亡かを決定するものである。

一度 天皇の統治下に入つて來た民族に對しては、之を育成し、充分にその活力を發揮させ、他の方法に依つては到底得る事の出来ない民族的幸福を與へるのである。勿論我が國に在つても武力を以て他を壓倒殲滅する事はある。然しこれは、卑怯にして弱いもの、自らたかぶれるもの、不正不義のものを打ち平げる事で、征服と云ふよりは平定である。平定して彼等を我が民族の腹中に抱擁する。之に依つて彼等民族は初めて民族生命を伸張する事が出来る。西洋の征服は被征服者を亡ぼしてしまふのであるが、我が平定は降参者を正しく生かすのである。之は皆我が國史に依つて作り上げられた民族的信念であつて、西洋諸國とは全く異なるものである。

世界の富や資源は如何に分配されてあるか。如何に白人が横暴であるかと云ふ事を事實に基いて明にして見よう。然らば我が國の主張が如何に當然であり、又正しいものであるかとはつきりとわかる。

世界人類の人口は約二十億と計算されて居る。その中我々が普通西洋人とよぶ處の所謂白色人種の總数が約六億から六億五千萬であつて、東部アジアに住む我々黄色人種はこれよりやゝ多數である。その外インド、西部アジア、エチプト等の諸民族は合計して約四億、黒人が約一億五千萬、マレー人種が約五千萬、南北米のインデアンが約三千万である。即ち概して云へば人類の約三分の一が白色人種、他の三分の一が黄色人種、そして残りの三分の一が各種の有色人種である。

然らば之等の人種の間地球上の陸地は如何に分配されてゐるか。白色人種の支配する陸地は、世界領土面積の八七パーセントであつて、所謂有色人種は十三パーセントを領有するにすぎない。僅に三分の一の人口を以て、世界領土の八割七分を占據する白色人種があるのに、一方では三分の

二に當る有色人種の領有する土地は、世界領土面積の一割三分にすぎない。而も其の中には、名目上は有色人種の自主國であつても、實際は白色人種が實權を握つてゐる處も少くない。かくして白色人種が世界領土の九割以上を支配し、名實共に有色人種の支配下にあるものは、一割にすら當らないのである。

この領土分配の不公平を我が國と他の諸國とに比較して見よう。即ち一平方杆の面積の内に住んでゐる人間の數を比較して見ると、ソ聯では八人、米國が十四人、英國が十三人、支那が五十八人であるに對して日本では百四十一人である。このあまりに狭い領土の中に、餘りに多數の人間が住んでゐると云ふ事實が、日本の經濟上の凡ゆる問題の根柢に横つて居る。この問題を解決しない限り、日本の經濟的苦難は、いつまでたつても解決しないのである。

この上に我が國のもう一つの困難は、國內の耕地の狭いと云ふ事である。今西洋諸國本國の總面積に對する耕地の比率を比較すると次の様である。日本、一五・六%、英國、二四・二%、佛國、三九・一%、獨逸、四三・七%、イタリ、四一・四%、ベルギー、四〇・二%、デンマーク、六一・二%である。これは日本内地が山嶽が多く、平地の少い事に起因する。又我が國の農民の一人當り

の耕地を諸外國に較べると、獨逸の五分の一、フランスの六分の一、米國の十分の一、カナダや瀋洲の六十分の一にしか當らぬ。即ち日本に於ては、同じ面積の耕地を以て、ドイツの五倍、フランスの六倍、米國の三十倍、カナダ瀋洲の六十倍の農民人口を養はねばならない。如何に日本の農民が勤勉であつても、領土の狭小から生ずる壓迫を骨身にこたえて體驗せずには居られない。土地の狭い處に多數の人が生活する事が我が國の凡ゆる問題の根柢に横はる問題であるが、この窮地に陥つて居つた日本を更に追窮して脅迫するものは、年々増加してやまぬ人口である。我が國の自然人口増加率は九十萬と云はれる。尤も日本内地の出生数は毎年約二百十萬人であるが、死亡率が極めて高いために、差引九十萬の増加となつてゐる。年に九十萬と云へば、和歌山縣の總人口に當る人數である。人口が増加するのに對してそれだけ領土が増加しないから、こゝに人口問題が起る。之に對して、一時産兒制限論を云ふものすら出て來たが、人口は國力の淵源である。如何なる障礙があつても、國策としてその自由なる天地を開拓すべきは當然である。我が國の大陸發展の一つの原動力はこの増加する人口のはげぐちを開拓しようとするせつばまつた要求から出て居る。處が人口のはげぐちは大陸か又は南方にしかない。そしてこれらの地方は英佛等の繩張りである。

ために、此處に當然我が大陸及び進出國策と英佛等の國策との衝突となるのは當然である。この人口問題の解決策は如何。之に對しては三つの對策ほかない。一つは海外移民である。二は商品進出である。三は領土擴張である。海外移民は早くから行はれて居る。その行くさきは、米國のハワイとカリフォルニア州であつた。最初は米國は土地開拓のために大いに之を歓迎した。カリフォルニアやハワイの原野は之等日本人移民に依つて開拓せられて、豐饒なる沃野と化した。處が北米大陸の原野が見事に開發されると、今度は米國が掌を返すやうに移民排斥に騒ぎ出した。その理由は日本人のやうに勤勉で農業が上手な人間が、こんなに廉價賃銀で働かれたのでは、米國人は結局負けてしまふ。しまひにはハワイもカリフォルニア州も、果はワシントン州もオレゴン州も、太平洋沿岸は悉く日本人を以て充滿するであらうといふのである。日本の移民が怠者で農業が下手で、その上賃銀が高いから入國禁止といふのなら話はわかる。然てそれが全く逆であつたから、日本國民は非常に憤慨した。この結果有名な「紳士協定」に依つて日本は自發的に移民を制限する事になり、一時問題は解決したやうであつたが、續いて大正十三年七月米國議會を通過した移民法が發布され、それに依れば米國は一人の日本移民をも拒絶すると制定したのである。

又カナダも早くから日本人の入國を禁止して居る。更に日本の南方にはオーストラリアがある。その面積は七百七十萬平方千米で、その上に住んでゐる人間は僅に六百六十萬人、殊に北部の如きは百八十萬平方千米即ち日本内地の五倍に近い面積の内にたつた三千六百人しかゐないのである。故にその大部分は殆ど未開拓のまゝに放棄してある。殊に三百萬平方千米を占める熱帯圏内には、白人の住民は僅十八萬五千人にすぎず、事實棄てられてゐる。而もオーストラリアは早くから白人濠洲主義を固くとして動かず、一切の有色人種の移住を嚴禁してゐる。濠洲の人口増加数は一年僅に八萬人であるから、二千五百萬の人口になるまでに二百年を要する。毎年十五萬人づゝ移民しても四十年もかゝる。かかる不自然不合理が公々然として白人の手に依つて行はれてゐる。かくして日本人にとつて解放されて居る土地は南米のブラジルだけであるが、これすら昭和九年五月の憲法改正に依つて日本人の移民を制限する事になつた。ブラジルの面積は八百五十二萬五千平方千米で、今の處全土の三分の二は殆ど人間の足跡がなく、もし悉く開拓されたならば、將來十億の人口を抱擁するに足ると云はれて居る。現在の人口は四千四百萬人にすぎず、而も猶日本人移民を制限して居る有様である。

滿洲移民も最近獎勵されて居るが、現在の滿洲は相當の人口密度を有して居り、北滿地方に若干の移民の餘地もあるが、これとて内地の人口問題の解決には餘りに多くの期待を持ち得ない。勿論無理にでも入植させれば出来ない事もないであらうが、さうすれば必ず先住滿人との摩擦を惹き起し、面倒な民族問題を惹き起す惧がある。この様な危険を冒してまでも滿洲移民を強行すべきか否か慎重なる考慮を要する。濠洲、ニューギランド等に將來の移民の進出を企てた方が適當である。まして日本の滿洲移民の狙ひ處は、滿洲國防の充實並に滿洲農民の指導と云ふ處に重點が置かれるべきであらう。この様にして我が國の移民國策は從來までの處、完全なる効果を擧げ得なかつた。

此處に我が國は、人間を海外に出す代りに、商品を世界に進出せしめてこの困窮を救はうと云ふ國策に出たのである。これを國內的に以へば、我が國に工業を興して此處に過剩人口を吸収し、人口問題を幾分でも緩和しようとする政策である。斯くの如くして日本の商品は堤防をきつた洪水の様世界に流れ出で初めたのである。世界一に良い商品を世界一に廉い値段で賣り出したのである。これ迄よりも良い品をこれ迄より廉い値段で賣るのであるから、これを買ふ方の側から見れば

それだけ生活が向上するわけである。誠に日本の商品の進出こそは人類の幸福をすゝめ、文明の進歩を促すものである。

然るに彼等は日本の商品を排斥し初めた。特に驚いたのは英國人であつた。即ち昭和四年度には日本の綿布は印度が輸入する綿布の三割即ち五六一・八四六(單位千碼)比率三〇%、英國は、一・二三五・〇八三、比率六六%、であつたものが昭和七年度に至ると日英の比率が反対になつた。即ち日本品五三八・七七〇、比率五〇%、英國五二五・五三一、比率四八%となつた。かくして英國の紡績が敗退するや、日本品はソシアルダンピングをなして、市場を侵略するものであるとなし、例へば印度政廳の如きは昭和八年四月、日印通商條約を破棄するの非常手段に出た。日印の通商交渉は、漸く日本が印棉百五十萬俵を買ふ代りに、印度は日本綿布四億碼を買ふ事に協定が成立したが、之を數字的に見れば日本は多大の讓歩を餘儀なくされ、加ふるに雜貨には高率の關稅が賦加されて、輸出は制壓されてしまつた。次に問題となつたのは蘭領印度との關係であつた。蘭領印度への我が輸出額は昭和六年には僅に六千三百萬圓であつたのが、八年には一躍して一億五千七百萬圓のほり、蘭領印度は對日一億圓の入超となつた。然るに蘭領印度は一億圓の日本品を買ふ代りに、

一億圓の砂糖を買つて呉れと云ひ出した。砂糖は臺灣に産するので充分である。我々の蘭領印度に求める處は石油であり、ゴムである。然るに彼は砂糖を以て之に代へようとした。此處に於て、日蘭交渉は沙汰止みとなつた。さうして蘭領印度では、昭和八年九月に輸入許可制度を確立し、九年一月には五割附加税、人絹制限、三月には晒木綿制限と矢繼早に日本品の輸入防止に熱中した。蘭領印度を守る實力が英國の海軍力である事を想起すればこの間の事情は明である。

其の他同様の問題は、英國の自治領である濠洲及び保護國であるエチプトとも起つた。從來日本の濠洲に對する輸出額は六千五百萬圓、濠洲からの輸入は二億圓以上であつて、日本は濠洲にとつて、一番よい羊毛の顧客であるのに、濠洲は日本品を排斥しようとしたので、日本も濠洲の羊毛を買はないと云ふ事になり、一時日濠交渉は斷絶した。尤も、その後日濠交渉は日本の屈辱的讓歩に依つて妥協が成立した。日埃交渉は纏らなかつた。

この様にして第二の解決策も英佛等の露骨な敵意に依つて失敗に終らうとしてゐる。我が國に不足して居るものは土地と資源である。即ち米麥等の主要食料品はどうやら自給自足出来る事になつたが、肥料は現在でも平時に於て六七千萬圓だけ輸入して居る。棉花や羊毛は殆どない。棉花は米

國や印度やエチオプトから七億三千万圓も輸入して居る。羊毛も二億圓程、木材も一億圓程、鹽も日本で使ふ六割を輸入に仰いでゐる。礦物は更に貧弱である。石炭は年産額二億圓、我が國礦産額の半分である。而も一人當りの消費高は〇・三噸であつて、之を米國の五噸に較べれば問題にならない。而も日本の石炭埋藏量は、一人當り〇・六噸づゝ使ふとすれば七十年位しかもたない。鐵礦は朝鮮を合せて百萬噸餘りで、一方年に三百萬噸餘りの鐵を必要とするから、需要高の六割七分は支那や海峽植民地から輸入する。殊に石油は日本の原油産額が三百萬バレルで必要量の僅に八%を充すにすぎず、あとの九十二%は悉く輸入にまたねばならない。その内原油が三十四%、製品が五十八%であつて、その輸入額は昭和九年に既に一億二千萬圓の巨額に達した。

この不足資源を充足するには、日本で出来る生糸とか人絹とか、綿布とか雜貨とかを海外に輸出して、必要品を買入れる外はない。而もこの政策は關稅障壁を高くし、或は通商條約の破棄と云ふ政策のために不可能に近い。

海外移民も商品進出も不可能とすれば殘されたる方法は唯一つである。之が滿洲事變以後我が國の萬難を排して敢行しつゝある大陸發展南方進出の國策である。

要とする事今日より急なるはなし。

日本の日本より世界の日本へ。之は既に到達する事が出来た。明治維新は日本本來の姿に躍進した時であり、日本の日本が建設された時である。日露戦争は世界地圖の書き方を一變せしめた。即ち従來極東の支那の屬國の如き有様で世界地圖の東の端に記された日本列島であつたが、日露戦争以後堂々たる獨立國として認められ、又日本は世界地圖に於て西洋と東洋との中央に位置する様になつた。これ世界の日本となつたのである。今や一步を進めて、日本の世界たらしめねばならぬ。即ち我等の窮極の目標は日本民族の力と理想とを以て世界全體の儀表となり、中心となり、以て混亂の極にある世界の秩序を統一し再編成し、世界文化の再建に努力せねばならぬ。之即ち世界二十億の人類に對し、皇化を實體的に光被する事である。即ち我等は、日本の日本、世界の日本たる事に満足せず、日本の世界たる事を期さねばならない。

既に各處で述べて來た様に世界は今や、白人本位の世界秩序から急速に變革の道程に入つて來た。既に過去の歐洲大戰に於てこの傾向は顯著となつた。西洋が從來の世界地圖の中心になつて居り、日本は極東に位置して居た。これは即ち世界を動かす、世界の中心勢力たるものが歐米諸國で

あつた事を物語つてゐる。然るに最近には有意か無意か知らぬが、殆ど至すべての世界地圖の中心は太平洋となつて來てゐる。日本は既に極東の一國ではなく、世界の中心となつて來たのである。歐洲大戰後作られた國際聯盟は、表面上英佛が中心となつて、歐洲及び世界の平和の保障の如く云はれて居つた。然し之はドイツを破つてその覇權を握つた英國が、かへつて植民地半植民地の動搖の深刻なものを捩れて、之を集團保障を以て抑へ、その覇權を維持しようとする企圖の下に作られた事は明である。國際聯盟は英佛を大株主とする植民地保全會社であつた。然しこの體制は最近に至つて、歩々崩落を開始した。日本の脱退を契機として、獨伊も續いて脱退し、植民地諸國の全體的反英抗英の機運も益々濃厚となつて來た。故に國際聯盟的世界秩序の最初の有力なる破壊の一石を投じたものは實に我が國であり、滿洲事變こそこれが烽火であつた。愈々これを擴大充實して東亞の新秩序の建設より進んで世界の再建を行ふ事が我が外政の眞面目である。

## 二

故に我が外政は決して現代の通念である國家相互間の機軸摩擦を調節する政治技術でもなく、又

帝國主義的な支配的外交技術でもなく、いはんや通商の補助促進の商賣技術でもなく、又外交家の專斷する特殊の技術でもない。その指導原理は、世界の轉換期に當つて、從來英米等の帝國主義的支配に依つて苦しめられて居つた諸民族を解放し、更に之を優秀卓越した文化をもつて向上的に再組織し、各民族の特質美點を充分に發揮せしめると共に、やがて世界文化の建設に赴かしめる事にある。故に外政とは偉大なる世界的新秩序建設運動であると云ふ事が出来る。この意味に於て滿洲事變に依つて眞の外政が生まれたものと云へよう。その第二步は支那をして眞に我が國に心服せしめる事に依つて日滿支一體の體制を樹立すべきであり、この意味に於て今次の支那事變は我が國外政の飛躍的發展を必然ならしめるものである。

現在迄の世界に於ては、白人が有色人種を支配搾取し、白人諸國は之に依つて得た財富を分け合つてその文明を享樂して來た。白人がアジアから奪つた財貨が如何に莫大なものであつたか。元來資源に乏しいヨーロッパの諸國が現在保有して居る富の大部分は、殆ど直接又は間接にアジアの搾取物である事は明である。後に白人の世界搾取の實狀を述べるけれども、この反面にアジアの諸民族が殆ど搾取のために死に瀕して居る事實を彼等は無視して居るのである。又白人が或は銃殺に

依り、焚殺し、或は衣食を奪つて有色人種を殺戮した數は、概數四億に及ぶと云はれて居る。之を解放する事は獨リアジア民族の更生のためはかりでなく、かゝる不人道を敢てしながら世界の平和の使途、人類の幸福の保障者であるかの如く空嘯く白人の自惚と無理と非道義性の許すべからざる罪惡を世界から絶滅する意義が更に大きいのである。我が外政の中心は實に被壓迫民族の解放と、之が我が國を中心とする再編成にある所以である。

この外政の實行に對し、最も脅威を感じるのは英國である。之に對し如何なる方針を以て臨むかと云ふ事が外交方策として重要な意味をもつてくる。又同じ西洋國家でも英國に對し快からざるドイツ、イタリヤに對し如何なる方策を以て臨むか等々の問題も當然考慮されるべきである。

我が外政は以上のやうな指導原理に立脚するのであるが、かゝる外政を日本が執らなければならぬ原因は、日本も又歐米諸國の壓迫を受けて居る被害國家であるからであつて、この點アジヤ諸民族と同様の立場に置かれて居る。我が國は偉大なる人口の増加力を持ち、而もそのはけ口は大部分英佛等の諸國に依つて閉塞せられて居る。かゝる状態の内に、我が民族の活躍發展の天地を求めると云ふせばつまつた要求が働いて居る事も事實である。この點に於ては獨伊の如く持たざる

國である。唯我が外政の獨伊等と異なる點は、單に持たざる國日本が持てる國のものを奪取しよとする事を以て全部としない點である。勿論持てる國と持たざる國とが餘りに懸絶してゐると云ふ事は、道理にも合はず、又何時までも持たざる國でゐなくてはならないならばその國は自滅するより外はないのであるから、この世界秩序を革正せねはならない。我が民族としては、大陸に又大洋に發展すべきであるが、それと同時に世界の不合理不正義を正して、眞に公正なる世界秩序を再建しよとする指導精神に貫かれてゐる。

この外政の指導精神は即ち 天皇の大御心の發現せられたものである。凡ゆる民族を 天皇の統治下に歸屬せしめ、天皇の徳澤に浴せしめるのである。然らざる場合にはそれらの民族は永久に他の侵略者のために國力民力を搾取せられてしまふ。現在の世界に於て白人がこの恐るべき搾取者である事は前に述べた通りである。これは單に被壓迫民族の不幸であるばかりでなく、壓迫者自身も結局墮落して行くのは自然の理である。白人諸國家が搾取をつゞけながら物質的享樂にふけてゐる内に、救ひがたき道義的頹廢と民族的老朽の風が濃くなり、終には滅亡してしまふ。故にアジヤ被壓迫民族の解放は同時に壓迫者自身をも道義的に又民族生活力の上からも、之を救済する事



になるのである。

從來帝國主義諸國家が先住民族を支配せんとするや、威壓と殺戮と詐略とを以てする。劣弱なる民族を壓迫し易いのが普通である。かつ彼等は被壓迫民族が文化的に向上する事を好まず、どこまでも征服に次ぐに殺戮詐略を以てし、終に民族的生命力を枯渇せしめてしまふ。若し被壓迫民族が統治民族と同じ文化水準に迄向上する時は、抑壓に困難を感じるからである。この様に於て、白人帝國主義の支配下に在る民族は、その支配征服を受ける事に依り、愈々民族的文化を衰亡せしめ、民族生命を破壊せざるを得ない。これは有色民族の征服支配を行へる西洋諸國家の避け難い特質が然らしめるのである。西洋諸國家は、國內に於ても皆、征服者と被征服者、支配者と被支配者と云ふ互に相容れない對立關係から出來てゐる。彼等の國家に於ける君主又は主權者は民衆の支配者であり、征服者である。近代國家に於ける資本家階級は國民大衆の征服者支配者である。故にこの兩者の對立争闘が絶えない。さうして強いのが少しでも力の衰へたものを打ち破つて覇權を握るのである。この方式は當然他民族に迄及ぶのである。彼等に在つては弱小民族に對する態度はあくまで殘忍であり無慈悲でなければならぬ。所謂帝國主義的支配が之であつて、彼等のよく口にする人道

とか平和とか云ふものは鎧を蔽へる法衣にすぎない。我々は感傷的に被壓迫民族のために同情の涙をそぐのではない。然しこの不合理非道義を默許する事は斷じて出來ない。我が民族の當然の發展を阻害し、又アジアの同胞をいつまでも殺戮と搾取のもとに戰慄せしめつゝある殘忍無比の白人帝國主義の跋扈を、一日といへども放任する事は出來ないのである。故に我が外征の成功不成功は即ち人類將來の繁榮か衰亡かを決定するものである。

一度 天皇の統治下に入つて來た民族に對しては、之を育成し、充分にその活力を發揮させ、他の方法に依つては到底得る事の出來ない民族的幸福を與へるのである。勿論我が國に在つても武力を以て他を壓倒殲滅する事はある。然しこれは、卑怯にして弱いもの、自らたかぶれるもの、不正不義のものを打ち平げる事で、征服と云ふよりは平定である。平定して彼等を我が民族の腹中に抱擁する。之に依つて彼等民族は初めて民族生命を伸張する事が出來る。西洋の征服は被征服者を亡ぼしてしまふのであるが、我が平定は降参者を正しく生かすのである。之は皆我が國史に依つて作り上げられた民族的信念であつて、西洋諸國とは全く異なるものである。

世界の富や資源は如何に分配されてあるか。如何に白人が横暴であるかと云ふ事を事實に基いて明にして見よう。然らば我が國の主張が如何に當然であり、又正しいものであるかとはつきりとわかる。

世界人類の人口は約二十億と計算されて居る。その中我々が普通西洋人とよぶ處の所謂白色人種の總数が約六億から六億五千萬であつて、東部アジアに住む我々黄色人種はこれよりやや多數である。その外インド、西部アジア、エチオプト等の諸民族は合計して約四億、黒人が約一億五千萬、マレー人種が約五千萬、南北米のインデアンが約三千萬である。即ち概して云へば人類の約三分の一が白色人種、他の三分の一が黄色人種、そして残りの三分の一が各種の有色人種である。

然らば之等の人種の間地球上の陸地は如何に分配されてあるか。白色人種の支配する陸地は、世界領土面積の八七パーセントであつて、所謂有色人種は十三パーセントを領有するにすぎない。僅に三分の一の人口を以て、世界領土の八割七分を占據する白色人種があるのに、一方では三分

二に當る有色人種の領有する土地は、世界領土面積の一割三分にすぎない。而も其の中には、名目上は有色人種の自主國であつても、實際は白色人種が實權を握つてある處も少なくない。かくして白色人種が世界領土の九割以上を支配し、名實共に有色人種の支配下にあるものは、一割にすら當らないのである。

この領土分配の不公平を我が國と他の諸國とに比較して見よう。即ち一平方呎の面積の内に住んでゐる人間の數を比較して見ると、ソ聯では八人、米國が十四人、英國が十三人、支那が五十八人であるに對して日本では百四十一人である。このあまりに狭い領土の中に、餘りに多數の人間が住んでゐると云ふ事實が、日本の經濟上の凡ゆる問題の根柢に横つて居る。この問題を解決しない限り、日本の經濟的苦難は、いつまでたつても解決しないのである。

この上に我が國のもう一つの困難は、國內の耕地の狭いと云ふ事である。今西洋諸國本國の總面積に對する耕地の比率を比較すると次の様である。日本、一五・六%、英國、二四・二%、佛國、三九・一%、獨逸、四三・七%、イタリ、四一・四%、ベルギー、四〇・二%、デンマーク、六一・二%である。これは日本内地が山嶽が多く、平地の少い事に起因する。又我が國の農民の一人當り

の耕地を諸外國に較べると、獨逸の五分の一、フランスの六分の一、米國の三十分の一、カナダや濠洲の六十分の一にしか當らぬ。即ち日本に於ては、同じ面積の耕地を以て、ドイツの五倍、フランスの六倍、米國の三十倍、カナダ濠洲の六十倍の農民人口を養はねばならない。如何に日本の農民が勤勉であつても、領土の狭小から生ずる壓迫を骨身にこたえて體驗せずには居られない。

土地の狭い處に多數の人が生活する事が我が國の凡ゆる問題の根柢に横はる問題であるが、この窮地に陥つて居つた日本を更に追窮して脅迫するものは、年々増加してやまぬ人口である。我が國の自然人口増加率は九十萬と云はれる。尤も日本内地の出生数は毎年約二百十萬人であるが、死亡率が極めて高いために、差引九十萬の増加となつてゐる。年に九十萬と云へば、和歌山縣の總人口に當る人數である。人口が増加するのに對してそれだけ領土が増加しないから、こゝに人口問題が起る。之に對して、一時産兒制限論を云ふものすら出て來たが、人口は國力の淵源である。如何なる障礙があつても、國策としてその自由なる天地を開拓すべきは當然である。我が國の大陸發展の一つの原動力はこの増加する人口のはげぐちを開拓しようとするせつばまつた要求から出て居る。處が人口のはげぐちは大陸か又は南方にしかない。そしてこれらの地方は英佛等の繩張りである。

ために、此處に當然我が大陸及び南方進出國策と英佛等の國策との衝突となるのは當然である。

この人口問題の解決策は如何。之に對しては三つの對策ほかない。一つは海外移民である。二は商品進出である。三は領土擴張である。海外移民は早くから行はれて居る。その行くさきは、米國のハワイとカリフォルニア州であつた。最初は米國は土地開拓のために大いに之を歓迎した。カリフォルニアやハワイの原野は之等日本人移民に依つて開拓せられて、豊饒なる沃野と化した。處が北米大陸の原野が見事に開發されると、今度は米國が掌を返すやうに移民排斥に騒ぎ出した。その理由は日本人のやうに勤勉で農業が上手な人間が、こんなに廉い賃銀で働かれたのでは、米國人は結局負けてしまふ。しまひにはハワイもカリフォルニア州も、果はワシントン州もオレゴン州も、太平洋沿岸は悉く日本人を以て充滿するであらうといふのである。日本の移民が怠者で農業が下手で、その上賃銀が高いから入國禁止といふのなら話はわかる。然てそれが全く逆であつたから、日本國民は非常に憤慨した。この結果有名な「紳士協定」に依つて日本は自發的に移民を制限する事になり、一時問題は解決したやうであつたが、續いて大正十三年七月米國議會を通した移民法が發布され、それに依れば米國は一人の日本移民をも拒絶すると制定したのである。

又カナダも早くから日本人の入國を禁止して居る。更に日本の南方にはオーストラリアがある。その面積は七百七十萬平方呎で、その上に住んでゐる人間は僅に六百六十萬人、殊に北部の如きは百八十萬平方呎即ち日本内地の五倍に近い面積の内にたつた三千六百人しかゐないのである。故にその大部分は殆ど未開拓のまゝに放棄してある。殊に三百萬平方呎を占める熱帯圏内には、白人の住民は僅十八萬五千人にすぎず、事實棄てられてゐる。而もオーストラリアは早くから白人濠洲主義を固くとして動かさず、一切の有色人種の移住を嚴禁してゐる。濠洲の人口増加数は一年僅に八萬人であるから、二千五百萬の人口になるまでに二百年を要する。毎年十五萬人づゝ移民しても四十年もかゝる。かかる不自然不合理が公々然として白人の手に依つて行はれてゐる。かくして日本人にとつて解放されて居る土地は南米のブラジルだけであるが、これすら昭和九年五月の憲法改正に依つて日本人の移民を制限する事になつた。ブラジルの面積は八百五十二萬五千平方呎で、今の處全土の三分の二は殆ど人間の足跡がなく、もし悉く開拓されたならば、將來十億の人口を抱擁するに足ると云はれて居る。現在の人口は四千四百萬人にすぎず、而も猶日本人移民を制限して居る有様である。

滿洲移民も最近獎勵されて居るが、現在の滿洲は相當の人口密度を有して居り、北滿地方に若干の移民の餘地もあるが、これとて内地の人口問題の解決には餘りに多くの期待を持ち得ない。勿論無理にでも入植させれば出来ない事もないであらうが、さうすれば必ず先住滿人との摩擦を惹き起し、面倒な民族問題を惹き起す惧がある。この様な危険を冒してまでも滿洲移民を強行すべきか否か慎重なる考慮を要する。濠洲、ニュージールランド等に將來の移民の進出を企てた方が適當である。まして日本の滿洲移民の狙ひ處は、滿洲國防の充實並に滿洲農民の指導と云ふ處に重點が置かれるべきであらう。この様にして我が國の移民國策は從來までの處、完全なる効果を擧げ得なかつた。

此處に我が國は、人間を海外に出す代りに、商品を世界に進出せしめてこの困窮を救はうと云ふ國策に出たのである。これを國內的に以へば、我が國に工業を興して此處に過剩人口を吸収し、人口問題を幾分でも緩和しようとする政策である。斯くの如くして日本の商品は堤防をきつた洪水の様世界に流れ出で初めたのである。世界一に良い商品を世界一に廉い値段で賣り出したのである。これ迄よりも良い品をこれ迄より廉い値段で賣るのであるから、これを買ふ方の側から見れば

それだけ生活が向上するわけである。誠に日本の商品の進出こそは人類の幸福をすゝめ、文明の進歩を促すものである。

然るに彼等は日本の商品を排斥し初めた。特に驚いたのは英國人であつた。即ち昭和四年度には日本の綿布は印度が輸入する綿布の三割即ち五六一・八四六（單位千碼）比率三〇%、英國は、一・二三五・〇八三、比率六六%、であつたものが昭和七年度に至ると日英の比率が反對になつた。即ち日本品五三八・七七〇、比率五〇%、英國五二五・五三一、比率四八%となつた。かくして英國の紡績が敗退するや、日本品はソシアアルダンピングをなして、市場を侵略するものであるとなし、例へば印度政廳の如きは昭和八年四月、日印通商條約を破棄するの非常手段に出た。日印の通商交渉は、漸く日本が印棉百五十萬俵を買ふ代りに、印度は日本綿布四億碼を買ふ事に協定が成立したが、之を數字的に見れば日本は多大の讓歩を餘儀なくされ、加ふるに雜貨には高率の關稅が賦加されて、輸出は制壓されてしまつた。次に問題となつたのは蘭領印度との關係であつた。蘭領印度への我が輸出額は昭和六年には僅に六千三百萬圓であつたのが、八年には一躍して一億五千七百萬圓のほり、蘭領印度は對日一億圓の入超となつた。然るに蘭領印度は一億圓の日本品を買ふ代りに、

一億圓の砂糖を買つて呉れと云ひ出した。砂糖は臺灣に産するので充分である。我々の蘭領印度に求める處は石油であり、ゴムである。然るに彼は砂糖を以て之に代へようとした。此處に於て、日蘭交渉は沙汰止みとなつた。さうして蘭領印度では、昭和八年九月に輸入許可制度を確立し、九年一月には五割附加税、人絹制限、三月には晒木綿制限と矢繼早に日本品の輸入防止に熱中した。蘭領印度を守る實力が英國の海軍力である事を想起すればこの間の事情は明である。

其の他同様の問題は、英國の自治領である濠洲及び保護國であるエヂプトとも起つた。從來日本の濠洲に對する輸出額は六千五百萬圓、濠洲からの輸入は二億圓以上であつて、日本は濠洲にとつて、一番よい羊毛の顧客であるのに、濠洲は日本品を排斥しようとしたので、日本も濠洲の羊毛を買はないと云ふ事になり、一時日濠交渉は斷絶した。尤も、その後日濠交渉は日本の屈辱的讓歩に依つて妥協が成立した。日埃交渉は纏らなかつた。

この様にして第二の解決策も英佛等の露骨な敵意に依つて失敗に終らうとしてゐる。我が國に不足して居るものは土地と資源である。即ち米麥等の主要食料品はどうやら自給自足出来る事になつたが、肥料は現在でも平時に於て六七千萬圓だけ輸入して居る。棉花や羊毛は殆どない。棉花は米

國や印度やエチオプトから七億三千萬圓も輸入して居る。羊毛も二億圓程、木材も一億圓程、鹽も日本で使ふ六割を輸入に仰いで居る。鐵物は更に貧弱である。石炭は年産額二億圓、我が國鐵産額の半分である。而も一人當りの消費高は〇・三噸であつて、之を米國の五噸に較べれば問題にならない。而も日本の石炭埋藏量は、一人當り〇・六噸づゝ使ふとすれば七十年位しかもたない。鐵鑛は朝鮮を合せて百萬噸餘りで、一方年に三百萬噸餘りの鐵を必要とするから、需要高の六割七分は支那や海峽植民地から輸入する。殊に石油は日本の原油産額が三百萬バレルで必要量の僅に八%を充すにすぎず、あとの九十二%は悉く輸入にまたねばならない。その内原油が三十四%、製品が五十八%であつて、その輸入額は昭和九年に既に一億二千萬圓の巨額に達した。

この不足資源を充足するには、日本で出来る生糸とか人絹とか、綿布とか雜貨とかを海外に輸出して、必要品を買入れる外はない。而もこの政策は關稅障壁を高くし、或は通商條約の破棄と云ふ政策のために不可能に近い。

海外移民も商品進出も不可能とすれば残されたる方法は唯一つである。之が滿洲事變以後我が國の萬難を排して敢行しつゝある大陸發展南方進出の國策である。

な共が居るのに對しては、その時代認識のない事をとがめるよりも、何者にかありつかふとして國家も戰爭の現實も體驗出来ない非國民として擊滅せねばならないと考へる。

世界の強硬外交の親玉と云はれたビスマークがドイツ帝國を建設せんがために、先づオーストリーと一戦を交へるべく餘儀なくされた時に、彼のなしたる第一の事は、ロシアと提携し、フランスと握手する事であつた。さうしてこのヨーロッパ大陸の二大強國としつかりと手を握つた上でオーストリーと對戦したのである。次でフランスと戦ふの必要が起つた時、ビスマークは巧妙なる外交術を揮つて、前の敵たりしオーストリーを自國の味方に引き入れたばかりでなく、英露の二大強國をすら、彼の後援者たらしめた。この用意があつたればこそ、ビスマークは獨り戰爭に未曾有の大勝利を博したのみならず、外交に於ても、驚くべき大成功を収めて、遂に偉大なるドイツ帝國を建設したのである。

即ち前門の虎と力強く對抗せんとするものは、先づ後門の狼と暫く握手する事もやむを得ない。これが強硬外交の定石である。例を遠くビスマークにとるまでもない。我等が日清戰爭を遂行するに當つて、如何に英米其の他の列強の好意を得るために努力したか。又日露戰爭の前に日英

同盟なる外交工作が行はれたのもこの一例である。

此處に我々は現下の我が外交方策の概要を述べる必要を感じる。外交方策は世界の現勢に照し、我が國の終極の目的を實現するの適當なる時務策である。外交は我が國の獨り相撲ではなく、相手の出方如何に依つて、臨機應變の神謀鬼算を藏せねばならず、従つて今日定めたる事を變更せねばならぬ場合もある。その根本方針に於ては變らないとしても、世界の現勢は刻々として變化し、事は時を追ふて轉じ、機は瞬息の内に決する。さうして世の中の人々は目前の事象にとらはれて大體を忘れるか、或は又容易に到達する事の出来ない理想案を以て大體に通ずるとなし、具體的な卑近な方策を輕蔑する。それで大體を擧げて之を主張すると、それが實狀に離れて居ると非難し、又刻々として轉移する時務に處する方策を論ずると、今日云ふ處は明日既に必ずしも行ふ事が出来ない。然し乍ら、現在の我が國の情勢を見れば、速に事を決しなければ、將來の我が國がどうなるかわからぬ。そこで我が國の外交方策の最も急を要するものを決定してかゝらねばならない。

外交方策は、支那事變解決を以て愈々本筋に入つた東亞統合體の結成を中軸として、諸外國に對する方策である。故に外交方策は支那事變解決の線に沿ひ、而も世界の情勢に順應するものでなく

てはならぬ。

支那事變は決して極東に於ける部分的日支の争ではない。これは現状打破國としての日本が、現状維持國の中心である英國に對する闘である。支那大陸は唯その舞臺を貸してゐるのに過ぎない。従つて我が外交方策の當面の敵手は英國にある事は明瞭である。故に外交の主力は對英方策を根軸とするのである。この事は何も今に始つた事ではない。英國の抗日戦線は日露戦争に於ける日本勝利と共に始つたと云ふ事が出来よう。日英同盟については、我々は永い間英國の非常なる日本に對する好意であると考へてゐた。然し乍らそれは決して英國の親日の結果ではなくて、當時の帝政ロシアが印度を衝かうとするのに狼狽した英國が日露を戦はしめ、一方ロシアに打撃を與へ、他方印度進出の鋒先を緩和しようとする意圖に出たものである。英國は傳統的に自分の敵として有力なる國を噛み合せてその間に自國の優越を保持する政策をもつてゐる。例へばフランスにナポレオンが現れて、ヨーロッパの大部分を席捲して、フランスの國威が正に英國の壘を摩さんとするや、ドイツ、ロシアをしてフランスに反撃せしめ、フランスを破る事に依つて、露獨をも疲弊せしめ、そこに自國の優越を確保した。又獨逸がカイザーの手に依つて隆々として興り、英國を凌駕せ

んとするや、露佛をして之に戦はしめ、その機會に英國の優越を保持した如きこの一例であつて、日英同盟も明にロシアに對する英國の謀略に乗せられたものである事は、日本が強力となり、寧ろ英國の敵となる惧れがあるとするや、日英同盟を弊履の如く棄て去つて、今度は逆にアメリカ、ロシア等を誦らつて抗日包圍陣の結成に向つた露骨な政策に鑑みるも明白である。今次の支那事變は、疑もなく英國の抗日態勢の前哨である。外交方策の中心が排英更に進んでは討英に進行く事は當然である。日英兩國は近い將來に於て、武力的にも決戦すべき運命にある。然し乍ら、武力を用ひずして英國を屈服せしめる事が外交方策であるから、そのためには、先づ支那に於ける英國の勢力を排除一掃し、更に進んで遂次東亞統合體地區より、民衆の排英的壓力に依つて英國を追放するを最も妥當なる方策とする。

新支那建設も、英國の持つてゐる政治的權利即ち租界權、租借權益及び香港の英領を完全に返還回收せねばならない。又中支南支に於ける鐵山、鐵道等や、貨幣の獨占等の一切の經濟的利權を回收する必要がある。これがために、速に排英を主張とし、又之を實行し得る實力を備へる新中央政權を支那に樹立し、之をして政治的經濟的英國制權の返還を強要せしめると共に、澎湃たる排英

國民運動を支那に組織展開するを要する。若し英國が之に反對するならば、我が國は英國に對して宣戰布告をなす決心を固めるべきである。宣戰布告の大義名分はアジア民族の解放と白人帝國主義の打倒を以て、支那を始めアジア諸民族を結集し、一舉して英國のアジアに於ける霸權を覆へす事が出来る。英國はもし日英開戦となれば、軍事的にも我が國の敵でなく、諸民族も一齊に蜂起して獨立を行ひ、その結果英國の總敗北總退却に終る事をよく知つて居るから、内心の爪牙をかくして、親日的態度を粧ふ事は當然であり、日本をちらして居いて、一方ソ聯を煽動して日本に挑戦せしめ、又アメリカを操縱して對日經濟封鎖陣に導くなどの手段に出るであらう。現在は、歐洲第二次大戰の渦中にあるために、極力日本の御機嫌を害はない様に努めて居るが、一度歐洲の形勢落着せんか、鋒を新にして抗日態勢の強化に出るであらう。之に反して、我が國としては、英國打倒の絶好の機會は今である。又英國としても、今日日本に強く出られる事が最も恐ろしく感じて居り、その場合には全く手をあげる外はない。故に英國打倒は支那事變解決の唯一つの鍵であり、アジア解放の手段の唯一のものである。

英國は獨り東亞特に日本の最大の敵であるばかりでなく、ヨーロッパに於ても、獨伊等の現狀打



破國の敵であつて、この意味に於て日本獨逸イタリは英國を共同の敵とする。世界は英國を中心とする自由主義現狀維持國家群と、日獨伊を樞軸とする全體主義現狀打破國家群との二大陣營にはつきりと分れて居る。其處で日獨伊は當然結合すべき運命にあり、又この樞軸を強化し、世界新秩序の建設に向ふ事が世界歴史の動向に適應する所以である。勿論獨伊には獨伊の事情があり、一から十まで日本と打ち合せたり、又日本の都合のよいことばかりをするとは限らない。昭和十四年初頭より交渉のあつた日獨伊軍事同盟の意味する動向は、たとへそれが獨逸とソ聯との不可侵條約の締結に依つて、一時中絶したけれども、これが決して三國の分離をなしたのではなく、必ず將來に於て、新しき出發點から新しい形式に依つて再建されるであらう。獨伊に對する我が外交方策はかくして將來愈々緊密に結ばれて行くであらう。

外交も要點集中、各個擊破の戰略をよしとする。今我が國の外交の敵手は英國であるから、凡ゆる外交的方策を討英に集中するべきで、ソ聯に對する方策を専らこの觀點から決定すべきである。ソ聯は化物のやうな國であつて、何處迄信じてよいか解らないけれども、さればと云つて無暗に之を敵に廻すのは策の得たるものではない。ましてソ聯の東亞に有する權益と我が國のそれとは、日

英間に於る程激烈ではない。シベリヤに於る軍備の擴張も、必ずしも我が國と戦はんがためのもではない。支那に進出しようとする背後の力であり、日本を牽制せんとするものである。且ソ聯と雖も、日本と眞剣に戦つたならば、スターリン政權が轉覆せられる程の打撃を受け、ロシアにとつて何の得る處もなく、唯善ぶのは英國である事を熟知して居るから、いくらかの利益を得又從來の極東に於る權益がひどく損傷されないならば、日本と國交調整を行ふぐらゐの腹はあるものと考へられる。我が國としては、ソ聯の思想的な又軍事的な挑戦を斷乎擊破する思想的軍事的準備を固めて、來り侵さは即刻之を破るに足る力を養つて置く事は、ロシアと云ふ得體の知れない國に對する當然の處置である。赤化を恐れるのは我が國內に赤化の餘地があるからであつて、こちらが健全なる生命であれば、パチルス如きに犯される憂はない。日ソの國交調整をすると、共產主義が日本に入つて來ると云ふ様な考は、自ら自國の思想的不健全さを告白するものであらう。そんな女々しい弱々しい態度では、世紀の荒波の中に在つて、一たまりもなく降参して了ふであらう。不敗の思想的軍事的國防を固めると共に、一方ソ聯をして英國に向はしめる底の經綸が出来ないものであらうか。蓋し理論的に見て、コムミニズムの打ち倒さうとする相手はキャピタリズムであり、

キヤピタリズムの本案は英國であるから、ソ聯が英國に向ふと云ふ事は決して道理に合ない事ではない。その上に、ソ聯は老大なる英國の領土資源を英國より奪取する事も出来る。理論的にも實際的にも、ソ聯の英國進政は自然の筋道と云へる。何を好んで貧弱國日本に命かけの戦争を仕かける馬鹿があらう。たとへ勝つても、ソ聯の得る處は失ふ處より遙に少い。元來赤化と云ふ事は、世紀の生んだ悪戯であり、ソ聯の道樂仕事である。道樂はしたいが命がけで道樂をするものは先づあるまい。日蘇が戦へば、いづれも勝敗は別として、深刻な傷手を蒙ることは間違ひない。これこそ、英國又は米國の最も希望するところである。日本が從來蘇聯を撃つことを目標として政戰兩略をすゝめて来たことは、一步深く考へると、英國の謀略に乗つたものと思はれぬでもない。英國がソ聯に對し對日戰意を煽り、又日本を刺戟して對ソ戰意を助長せしめ、これに依つて我が國力を消耗させようとする謀略がなかつたとは云へない。これらは表面上はつきりした證據があるわけではないが、支那事變に於る英ソの妥協の如き事から考へても、英國がソ聯をさそつて日本に向はせようとする腹は見えすいてゐる。英國の恐れる處は日本とソ聯が國交調整を行ひ、永年に亘る保争を中絶し、英國に向つて來る事である。これがために英國は、日本國內に於てソ聯排撃の聲が高くな

り、親英的空氣が増大する事を期待して居る。ましてやドイツがソ聯と結んだ事に依つて、日本人がソ聯のみならずドイツとも離れる如き事になつたならば、恐らく最も喜ぶ事であらう。獨ソと日本との分離は、即ち全體主義的陣營を寸断した事であつて、英國は各個擊破の戦法をとる事が出来る。それだけ日本とソ聯が國交調整をなす事は英國にとりては致命傷である。兵法に、敵の最も好まざる處に攻撃を加へるのが戦勝の道であると書いてあるが、討英外交戦に於て、英國の死命を制するものは、日ソの國交調整に依り、日ソの銳鋒を英國の勢力範圍に向ける事である。その方法は或は被壓迫民族の英國よりの獨立を助け、或は排英民族運動を指導する等色々な手段があらう。次に問題となるのは、日ソ國交調整の場合に、我が國として如何なる條件を主張し、又どれだけソ聯の言ひ分を容れるかと云ふ事である。この具體的條件の決定は、最も困難であるが、我が國の要求すべき最小限度の條件は、支那本部より赤化の手を引く事、蔣介石政權の援助を打ち切る事、ソ滿國境線を劃定する事、樺太の石油、及び沿海州の漁業權、サガレンの木材採取權を正當なる條約に基いて認容する事等であらう。然し乍らこれらの事務的條件は、ソ聯が日本と國交を調整して英國に進攻すると云ふ大局的政治的協定が結ばれれば自ら解決するであらう。

米國に對しては、なるべく親善政策をとり、文化的通商的外交工作を行ふ。親善と云つても決して拜米ではない。我が國の東亞に於る立場を正當に彼等に了解せしめるならば、目下支那及び東亞に死活的權益を有しない米國は、究極的に親日と迄は行かないとしても、或は抗日にならない可能性もあらう。且我が國は、アジア大陸に於て、政治的色彩を伴はない純經濟的投資を許し、又その利益に對して保障を與へる。そして我が國の支那再建進んでは東亞統合體の結成に依つて、太平洋西岸一帯の秩序が確立し、且日本の保障に依つて、米國の極東に對する經濟的投資及びその利益がかへつて、安全且確實になる事を、徹底的に覺らしめる。但し米國に依つて日本の大陸政策が妨害されぬために、海軍を充實して、米國海軍を制壓し得る準備をととのへる必要がある。

## 八

我が外政は一方對列強工作を確實に進めつゝ、全力を支那の再建より東亞統合體の結成に傾注するのである。統合體にして結成せらるゝ時は、我が國の實力は嶄然として比較を絶するに到るであらう。かうなれば英國もソ聯も物の數ではない。かくしてアジア大陸を抱き、太平洋の制海權を把

握すれば、世界指導國家としての飛躍大日本がこの世に實現するのである。

日本の世界より世界の日本へ、世界の日本より日本の世界へと我等の理想は次第に實現されて行くのである。日本は何より先に國體の主義に眼覺めて、眞に日本らしき日本を建設しなければならぬ。そして世界第一の完全なる模範國最大強國とならねばならぬ。そして世界の凡ゆる民族、國家を指導して所謂平天下の理想を地上に結實させねばならぬ。これが日本の世界を再建する唯一の道程である。

今や世界の舊秩序、舊國家體制が分解の過程にある事は既に述べた通りである。現代世界の或る民族は、白人帝國主義の支配下にあつて、その壓力のために窒息しようとして居る。又或る國家は自ら世界の覇者と勝ち奢つてゐるが、その實狀を見れば、既に他民族支配の拘束力が弛緩して、統治策に苦惱してゐる。その代表者は英國で、印度やパレスチナ地方の統治には全く手を焼いてゐるこの様にして、この現狀が続くならば、世界の各民族各國家は、徒に鬭争反噬して勝者も共に苦しむ、やがてはその文化も民族生命も悉く滅盡するの外はないであらう。我々は、世界の舊秩序が分解瓦崩する驕然たる物音をきく。世界第二の大戦は正に舊秩序の終焉を告ぐるうめき聲であ

る。  
この危急の場合に當つて、これを救ふために、比較を絶せる國力と人類の光明たるべき國體の精華を掲げて、暗黒を破る朝暉の如くに現れるが、新しき國家體制を完備せる日本であらねばならぬ。日本は世界の再建の望である。我等は勇しく「日本の世界」へと進軍する。我が外政の伸張する所、我が國體の光被の及ぶ所、世界の凡ゆる民族は遠近を問はず、人種を論ぜず、山野を踰え、河沼を涉り、沙漠を横り、海溝を凌ぎ、群星の北斗に集るが如く、翕然として皇風に浴するに至るであらう。さうして遂に新しい世界が誕生するのである。

## 第八章 無敵軍備の完成

### 一

我が國是の實現に於て文の働きは外政であり、その武の働きは即ち軍備である。外政と軍備とは本來分つ事が出来ない一體の國民活動である。殊に現代のやうに、民族間國家間に於ける關係が尖鋭化し、國家間の交渉が單なる條約や約束に依つては結末がつかず、力と力の決戦を必至とする時代に在つては、武力の發動が外政の重要な部分を占める事になつて來た。世は正に戰爭時代である。一つの戰爭が終ると、各國は更に次の戰爭の準備に入る。如何に外交や條約が巧妙に行はれても、又正しい言分があつても、その背後に強力な軍備がなかつたならば誰も相手にして呉れない。この意味に於て、外政は軍備の強弱に依つてその効果を増減するのである。勿論兵は國の大業であり濫りに之を用ふべきものではない。常に外政の背後にあつてその護持力となり、正しき主

張國策を遂行せしめるを以て本則とする。

然し乍ら現代は正しさが通らず、たとへば邪な主張國策であつても軍備が強ければ通る世の中である。弱者の叫ぶ正義は何にもならない。軍備の増強は今や世界に生存せんとする國家の如何なる犠牲を拂つてもやらねばならない事である。それは既に道徳や理論や感情を超越した現實である。如何に我が國が正しい要求を出しても、若し軍備が他に比較して劣つてゐたならば、一も二もなく否認せられてしまふ。如何なる大外交家が出てても軍備に對する自信がなければ、巨腕を振ふよしもない。滿洲建國の際愚圖々々云ひ乍らも、結局日本の主張を通したのは米國の海軍力が我が國より劣弱であつたと云ふ一事に起因する。我が國が肇國以來の國是の實現に當らうとする以上、雄大なる軍備の充實は緊急の要務である。

## 二

無敵の軍備充實を行ふに當り、我々は我が建軍の本旨、軍備の根本義を考察しなければならぬ。それには先づ軍備に對する色々の考へを一應批判する必要がある。即ち軍備の目的を明にせねば

ならぬ。同じ軍備と云つてもそれ々の國家の個性に應じて差別が生ずる。その立國の精神が異なるに従つて、軍備の目的も多種多様である。例へば個人主義國家に於ては國の指導精神は利益を得る事にある。従つて軍備もこの國家的利益を、敵國の犠牲に於て獲得せんとするのは當然であつて、飽くまで軍備の發動即ち戦争は皆利害の打算を以て始り、利害の打算に依つて歸結する。之等は近世歐米流の自由主義國家資本主義國家に通有するものである。だからかゝる國家間の戦争は相手を壓倒殲滅して、その利權又は領土を獲得する事が目的である。近世戦争論の大家クラウゼヴィツツの戦争の定義に依れば、「戦争とは敵を屈服せしめて、自己の意志を相手に強要實現せんがために用ひられる暴力行為である」と云ふのは、明に自由主義國家の軍備的性格を現して居る。

最も特異性のある軍備の目的を説いてゐるのはマルキシズムである。それに依れば軍備の目的は要するに世界の被壓迫階級の解放であり、相手國內の被壓迫階級と結んで、相手國の國家を崩壊せしめ、之に依つて階級的革命を遂行する事にあるのである。

ファシズム又はナチズム國家の軍備の目的は、國民乃至民族を他國に依る被壓迫搾取状態から解放し、世界に於ける帝國主義勢力の桎梏から自國を救出し、又他方に於ては、自國の内部に魔手を

差しのべてその階級分裂を助成し、その階級闘争を煽動するマルクス陣營からの攻撃を撃破する事にある。

要するにその國の立國の精神が自由主義であるか、マルキシズムであるか或はフアシズム乃至ナチズムであるかに依つて、軍備の目的を異にするのである。

我が國の軍備は、かくの如き利己主義或は階級主義とは根本的に異なる事は申す迄もない。我が軍備は眞正なる調和の世界を實現せんための武力である。道義の光に依つて導かれる軍備である。即ち、利己主義に依つて社會を混亂せしめる敵を打ち平げ、彼等をして、自己の邪惡より眼覺めて、日本の皇道にまつろはせるための力である。即ち軍備の目的は地球上より國家闘争や民族闘争を除き去して、眞正なる平和を招來し、以て八紘一宇の平和郷を實現するために備へられるものである。一言にして云へば皇道を世界に宣布する神威である。軍人への勅諭にも仰せられて居る様に、我が軍備の目的は、まつろはぬものどもをまつろはせるにある。「まつろふ」とは祭り合ふ、或は政り合ふ事であつて、八紘一宇の天意を同じく信仰し、相共に奉仕するの意である。即ち對立抗争の立場に在るものを、經濟的にも思想的にも政治的にも一體的に統合し、天照大神を共同の神として齊

き祭り合ひ、天皇を現人神として歸一し奉らしむるにある。若しこの大御心に反して、不正不義を以て世の中を亂すものがあれば、皇軍は直に發動して之を討伐するのである。

皇軍の意志は即ち、天皇の御意志であり、天皇は御自ら軍を統帥され、邪惡の討伐に親征せられる。神武天皇が御東征の目的は、精銳なる皇軍を率ゐさせ給ふて、さばえなす國內の賊を打ち平げられ、大和の橿原に靈時を立て、天照大神を祭られて、此處に天皇に祭り合ふ國家體制を確立されたのである。

長髓彦の討伐に當り、兩軍勢力相伯仲し勝敗容易に決しないときに、一羽の金鷄が飛び來つて、天皇の弓弾に留り、その放つ金色の光に賊は眼眩きて遂に鉾を投じて歸順したと云ふ史實は、眞によく皇軍の本義を示したものである。金鷄の放つ光とは天皇の大御心である道義の表れであり、賊が眼眩きて歸順したと云ふ事は、この道義の光に照されて従來の一切の邪心を捨て、天皇に歸服した事を示すものである。軍備は故に單なる機械力ではない。機械力も大きな要素ではあるが、それだけでは皇軍にならない。寧ろ道義的精神力と機械力が合一したものである。物心一如であり、機械は精神が宿つて、一つの生命力となる。従つて軍備とは、天皇の大御心の具體化した

ものである。天皇の世界観の實力である。故に我が軍備は單に消極的に外敵を防ぐための手段ではない。外敵がなければ軍備も撤廃すると云ふ様な考は、我が軍備の目的を知らないものである。又民族的利己心の手段として他の民族國民を征服するための帝國主義的政治の手段でもない。敵國民を強要して我が意志に従はせるための暴力行爲なりと云ふものは、これ又我が軍備の精神を汚すものである。即ち我が軍備は世界を邪惡より救つて眞正なる調和の世界を建設せんとする積極的國家威力である。故に世界に邪惡の存する限り軍備は絶對的に存在し、隨時邪惡を一掃するため無敵の威力を備へなければならぬ。

三

現代の軍備は唯單なる武力のみではない。軍備を構成する要素は武力の他に政治、經濟、思想、宗教、藝術、教育、科學等を含み、その綜合力が軍備である。これは現代の戦争が單なる武力戦で解決しない國家總力戦の形態を執る様になつたからである。

戦争の形態は單一武力戦争形態から國家總動員戦争形態となり、更に總力戦的形態に變化して

來たが、之に應じて軍備の内容も變化した。單一武力戦形態に於ては武力と武力との角逐が勝敗を決した。即ち國家間の戦に於て、軍隊が一國を代表して勝敗を決する。従つて強國とは武器が精練され訓練が行きとよいた軍隊を持つ事である。國民は直接に戦争に参加せず、唯軍隊の勝敗を心配して居るだけである。軍隊が敗ればその國は戦敗國となる。かゝる戦争形態に於ては、軍備の要素は軍隊だけである。處が第一次歐洲大戦を境として、戦争は決して軍隊だけのものではなく、戦争の勝敗は、直に國民の生活に深刻なる影響を及ぼすばかりでなく、國民が舉つて軍隊を援助するものでなければ勝てないと云ふ事になつた。即ち一國の政治も經濟もその他一切の文化を含む國力を集中して、武力の増強を計らんとする事になり、戦争は全國民の参加に依つて行はれる事になつた。之が國家總動員戦争形態である。こゝでは軍備の内容は、政治經濟等の國家の背景がなければ充分でなく、政治も經濟も武力増強の重要な要素となつた。

然るに最近に於ては戦争は單なる武力の部面に於てのみ行はれるのではなく、政治も經濟も武力もそれ／＼が皆戦争を行ふのであつて、武力は戦争の一部面に過ぎないと云ふ國家總力戦の體制をとる事になつた。即ち國家總動員戦争形態に於ては、主として武力戦のために、國家の全力を集中

統合發揮しようとするのに對して、國家總力戰體制に於ては、武力戰を最後の止むなき決戦手段として重要視するけれども、それと平行して政治經濟思想等も武力と結合して戰爭をなすのである。故に近代戰に於ては、武力戰と共に經濟戰外交戰思想戰が行はれ、その綜合的國力が敵國を壓倒する時に初めて勝利が得られる。だから、例へば如何に武力戰に於て他國に勝つても、經濟戰や思想戰に敗れたならば、切角の武力的勝利も水泡に歸して了ふ。第一次歐洲大戰の末期から既に總力戰の形態が生れて居る。ドイツは戰爭には敗れなかつたが、經濟と思想とのために倒れたと云はれる。故に極端なる戰爭論者は、軍隊の決戦戰闘をして一般的に武力戰は、戰爭決定要素としての從來の特有の意義を失つた。それらはもはや戰爭の勝敗を決定する第一の要素である事は出来ぬ。その代りに經濟戰思想戰が勝敗決定の第一の要素となつた」とさへ主張する。勿論これは極端論であつて、武力戰が結局は勝敗決定の主要素である。但しこの場合の武力戰とは、單に敵の武力を打ち負かすだけでなく、敵の經濟的根柢を覆滅し、又敵の國民を恐怖戰慄せしめ、戰爭遂行の意志を失はしめる所のものである。これと呼應して、或は宣傳戰に依つて敵國民の思想的壞亂をなし、或は經濟封鎖に依つて敵の經濟力を消耗せしめる事が出来れば、此處に完全に勝利を收める事が出来るのである。

である。

總力戰的形態に於る軍備の内容はかくして、武力はもとより、經濟政治思想等が戰時體制を執り、相合して國家總力が、斷然他國に優越すべきである。だから勝敗を決するものは國家總力の強弱であつて、國家體制其のものが戰爭目的に基いて編成せられ、この總力が即ち軍備である。この體制を戰時體制と云ひ、國防國家體制と稱する。故に自由主義的國家體制では眞の軍備は出来ない。これ戰時體制をとつたドイツが自由主義の中に低迷しつゝある英國を壓倒せんとする所以である。

既に述べた様にこれからの時代は戰爭時代である。一つの戰爭が終つたからと云つて所謂平和は來ない。自由主義者が期待するやうに、早く戰爭を片付けて平和を求めてもそれは不可能である。戰爭状態が常時状態となつて來た。唯激烈に戰ふ時期はそれ程永くない、その後には小康が來る。之を平和來と考へて油斷をすれば、次の時代にひどい目に逢ふ。小康時に於て大いに國防國家體制を充實する國が初めて世界に雄飛する事が出来るのである。我々の主張する飛躍的大日本國家體制とは、即ち戰爭時代に處し、よく他國を制壓して國家の發展を確保せんとする國防國家體制に外な



らず、これは正に國家總力戰形態に應ずる無敵軍備の建設を目的とするものである。

## 四

國家總力戰的軍備の内容の内、思想的經濟的的政治的形態が如何にあるべきかは他章に於て述べた通りである。而もこの形態に於ても武力の勝敗決定要素たる事は少しも變らない。否却て武力の持つ意義は廣汎となり深刻となつた。即ち戰爭論者の言を借りて云へば、「戰爭は武装兵力に對してのみ妥當する戰場に於てのみ闘はれるものに非ず。それは他の目的即ち政治戰線及び經濟戰線に對し同時に激烈なる戰闘を實行すべき目的を有す。敵の頑強たる抵抗に際しては、勝利は豫め三戰線に於る武力を蠲滅するに非ざれば獲得するを得ざるべし」とある。即ち武力は武装戰線に於て敵を蠲滅するばかりでなく、思想戰線、政治戰線、經濟戰線をも蠲滅して敵の綜合國力を破砕する任務をもつのである。

この綜合國力こそ前述の如く吾人の云ふ飛躍的國家體制である。此の飛躍的國家體制に伴ふべき神武たり、威武と考へられたのは日本刀であるが、現今に於ては此日本刀に比すべきは飛行機である。何故に飛行機であるかと云ふ事は説明よりも日本人の性格より考へて飛行機が最も日本刀に代用し得る日本人的氣持が起すからである。此の氣持が起る處に何とも説明の出來兼ねる日本人的性格があるからである。尙心理的説明を加ふれば日本人的勇武の性格を遺憾なく發揮し得らるゝものが恰も日本刀の如き飛行機であると云ふ事になる。猶軍事學的に説明する事になれば次の様である。

第一は廣義國防の見地からである。將來の戰爭は、戰場に於る攻防や、戰線に於る戰闘に依つてのみ決せられるものではない。即ち國家の總力を擧げて、敵の國力を壓倒する事に依つて決するものであつて、獨り軍隊のみならず國民も悉く戰闘に従事するのである。即ち戰爭の死命を制するものは、戰場だけではない。國力の中樞である政治經濟戰線の要地を剽滅し、敵の國力を蠲滅するにあるのである。これをなすのにも又これを防ぐのにも航空機が最も適當して居る。そればかりでなく、航空機が敵の背後地帯深く侵攻すれば、唯に敵の物質力を破壊するに止まらず、精神的に敵國民を恐怖戰慄せしめ、戰闘の意志を喪失せしめる事が出来る。これは思想戰の遂行と相俟つて絶大な戰果を収める事が出来るのである。

第二は緒戦戦勝の見地からである。将来の戦争は、或は宣戦布告と共に、或は國交斷絶と共に、間髪を入れずに開始せられる。この戦機をつかみ、一步敵に先んじて攻勢を執り、緒戦に勝つものは、戦局全般に甚大なる好影響を及ぼすのである。この點に於て、航空機はその偉大なる機動力と集中力とに依り、この緒戦的戦果を獲得するために絶好の武器である。

第三は戦争形式變化の歴史の見地からである。即ちこれまでの戦争は、陸戦に於ても又海戦に於ても、皆平面的戦争であつたものが、今では航空機の發達に依つて、立體的に擴大せられ、航空機の参加なくしては戦闘が行へなくなつた事である。これは戦争形式の劃期的變化である。而も航空機はその偉大なる機動力と卓越した戦闘力とに依つて、隨時隨處に要點集中の攻撃を、敵の意表外に加へる事が出来るから、戦闘の範圍は著しく擴大し、又時間的にも戦場の進展を速くした。之が航空機の將來戦に於て決定的要素となつた所以である。

第四は航空機發達の見地からである。一體銃砲とか軍艦とかよどの軍器は今では徹底的に研究し盡された、殆ど人智の最極限にまで到達したかの觀がある。何かしら意表外の軍事科學の發見でもない限り、現在以上の優秀な武器の出現は期待する事が出来ない。處が航空機は今や發達の過程に

在つて、日に月に改良進歩を加へるべき餘地が最も多い。この際殆ど世界無比とも云ふべき優れた科學的能力を有する我が國民が、智能を盡くし、工夫を重ねたならば、嶄然他に優越せる航空機を作る事が出来るであらう。今の航空機は、其の他の軍器の進歩せる状態に較べると、未だくも發達である。これに飛躍的改良進歩を加へて大躍の如き威力を具有せしめたならば、以て大軍の行動を阻止し、戦艦を覆へし、大都を烏有に歸せしめる事恰も鷹の雀に當ると等しきものがあるだらう。之が航空機に將來を期待する所以である。

以上の四點が、軍事的に見て航空機を以て無敵軍備の主力となすべしと云ふ理論的根據である。而も航空機は獨り純戰術的戰略の見地からばかりでなく、國家總力戰的軍備として他の諸軍器と性能を異にする事も將來の軍備に於る航空機重點主義の有力なる理由である。即ち航空機は、戰場に於て最も卓越せる軍器たると同時に、銃後に於ても又直に運輸交通通信等に活用せられて、國民の生産的利器となる。軍の航空機であると云ふよりも、國民の航空機であると云ふ事になり、之は國家總力戰態勢下の軍備の主體たるに相應しいものである。

又日本人は天性が機敏勇敢であつて、而も鍊錢のやうな強靱銳利なる性能をもつてゐる。即ち航

空機の操縦活用こそは、日本人の性能に最も適合したものである。世界中に日本人程この優れた性能をもつて居るものは少い。古來我々は日本刀を以て單なる武器として見ず國民的威力の表現したものと見、腰の朱鞘は自信の表れとして堅持して來たのである。これは日本刀が一番良く日本人の性格に適合したものであつたからである。航空機は恰も古來の日本刀のやうに、國民的護國の力として、又國民的威力信念の表現として、軍備の精神的物質的本體とならねばならぬ。

由來我が國民は日本刀を大和魂の凝固した物心一如の生命力の結晶であると信じ、神武威徳の表徴と爲して居る。航空機は現代に於る日本刀である。我が國の軍備は皇道宣布の威力である。道義世界建設の劍である。故に其の主體たる航空機こそは、疑も無く、降魔の利劍であり、破邪顯正の神劍である。我等はその精魂を日本刀にたゞき込んだ如く、我が大和魂を航空機に打込まねばならぬ。かくして初めて無敵軍備は完備し、世界平和の建設も實現するのである。

## 第九章 舉國一黨の翼賛政治體制

我等は今、世界歴史初つて以來の重大時期に直面してゐる。それは國家の興亡と云ふ様な小さな問題ではない。地球上に於て、或る一國が興隆し、或る一國が衰亡する如きは、これまで世界史上、幾度か繰り返された事實に過ぎない。今日は世界其物が土崩瓦壊しようとしてゐるのだ。今や世界國家機構は支離滅裂に壊滅しようとしてゐる放つて置けば世界二十億の人類は、煉獄の焰の中に投ぜられて、死滅に勝る苦しみに喘がねばならない。世界に起りつゝある事象は破壊か建設かの關頭に立つて居る事を示さぬものはない。而もその闘争は終りのない悪無限であつて、終に没落の深淵に通じて居るのだ。我が國もこの世紀の暴風時代の真中に在つて、絶えず激動を續けて居る。而も我が國を外にして、世界的戰國時代を統一して、新しき建設への曙光を與へ得るものは斷じてな

い。これは天意である。かゝる信念を我々が持ち得る事は既に人爲ではない。而もこの使命を遂行するに足る實力を我が國は持ち得るのである。故に我が國力の發展と世界の再建とは、疑もなく一體不可分の事實である。世界二十億の人類を救済すると云ふ使命感を持ち、又之を遂行するに足る實力を有するものが我が國を外にして世界の何處にあるか。皆自己民族の利益を得るに狂奔して、他民族の滅亡の如きは敢て意に介しないのが現代列強の態度である。これこそ世界をして混亂に陥入れた元兇である。彼等に世界の眞の平和を求めるときは本末顛倒である。

この故に我等が民族の使命を省み、世界文化の將來を考へる時に、我々の責任の重大なる事を深く感ぜざるを得ない。我々は凡ゆる精神力と物質力とを一點に集結し、世界に比なき優秀強力なる國家體制を建設し、この實力信念を以て世界を指導し、世紀の開闢の主力男尊たらねばならぬ。之我々の祖先の志を大成する偉業である。

然らば斯くの如き偉業は如何にして達成さるゝであらうか。此處に我々が政治革新の如何なるものであるかを自覺せねばならぬ。

偉大なる使命をもち、且つ歴史あつて以來未曾有の重大時期に直面せる我が國の政治は果して如

何なる状態にあるか。我々は遺憾乍ら、政治の無力不統一今日より甚だしい時はないと考へる。從來政治の擔當者であつた既成政黨は勿論官僚も軍部も、時代の躍進世界的轉換期の場面に直面して、何等時流を指導して輝かしい明白の日本及び世界を建設するに足る指導力も政策も信念も持ち合せて居らぬ。唯右往左往して、眼まぐるしく轉移する内外の時局の奔流に漂揺し押し流されて居る仕末である。國民に力がないのではない。皇軍は支那大陸に歴戦して神武以來未曾有の戦果を確保して居り、銃後の國民も驚くべき精神的經濟的強靱さを示して居る。唯肝腎要めの政治が無力不統一であるために、之等國民の總力を一點に集中動員組織して、國策遂行に向ける事が出来ない。今にして國策を確立し、充分且完全に之を運営し、内に在つては必勝國防國家體制を確立し、外に對しては支那大陸を内包する東亞自給自足統合體制を建設し、更に英國等の勢力を東亞より徹底的に驅逐する政治を行はなければ、聖戰目的の貫徹も中道にして挫折するはもとより、日本の世界に負へる使命の貫徹の如きは思ひもよらない事である。我が國が眞の強力なる政治を確立し、又之を貫徹し得る政治勢力を結成する事は、最早希望ではなく、國家本能の要請である。

而もかゝる政治は、舊い自由主義思想に立ち、而も最も反動的な腐敗した政治意志乃至地盤を基

にし、且又道德的に國民の不信を買つた既成政黨の如きが擔任し得べきものではない。又一時擡頭の機運にあつた左翼政黨も、其の世界觀國家觀の謬りのために我が民族の本然の要求に副ふ事が出来ず、徒つて支那事變をめぐる世界歴史の必然性を把握し得ず、事態の急激、意外なる變化に適切なる理解を失ひ、木に竹を繼いだ様な轉向を聲明して、呆然として瞠目虚脱の有様である。政治指導力を日一日と失ひつゝある有様である。

時代の要求と、我が國政治の實状とは、この様にかげ離れてゐる。これでよいのか。此處に我々は思ひを新にし、我が國政治の本然の姿を内省し、一日も早く之を實現しなければならぬ。

二

我が國に於る政治の大權は 天皇の總攬されることである。即ち統治權の出所及び歸一する處は天皇である。これは我が口の國體に依れば當然の事である。民主主義國體に於ては、統治權(主權)

は民衆の總意に在り、所謂主權者は、統治權の一要素である行政權を民衆から委任された政治上の一機關である。我が國の政治に於ては統治權は絶対の統治意志の主體である。天皇に歸屬し、天皇はその統治權の行使に於て國民に責を負はず、唯、皇祖皇宗に責を負ふのである。憲法第四條「天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ」即ち憲法講解に「恭シク按ズルニ統治ノ大權ハ 天皇之ヲ祖宗ニ承ケ 之ヲ子孫ニ傳フ 立法行政百揆ノ事凡ソ以テ國家ニ臨御シ 臣民ヲ綏撫スル所ノ者一ニ皆之ヲ至尊ニ總ベテ 一ノ綱領ヲ攬ラザル事ナシ云々」とある如く又五個條の御誓文と同時に渙發せられた維新の勅語とも申し奉るべき御宸翰にも「前略、今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其ノ處ヲ得ザルトキハ皆朕カ罪ナレバ今日ノ事朕自ラ身骨ヲ勞シ心志ヲ苦シメ艱難ノ先ニ立チ古列祖ノ盡サセ給ヒシ蹟ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始メテ天職ヲ奉ジテ億兆ノ君タル所ニ背カザルヘシ」と仰せられた如く、我が國に於る政治は 天皇御自ら 皇祖皇宗の御心に從ひ、其の結果の責を負はれて行使せられる所である。統治權が 天皇に淵源し、又之を出所とする事は我が國體の當然の歸結である。

國民は 天皇の赤子として歸一し、天皇の行はせ給ふ統治權の發動に御助力申しあげるのであつ

て、それ／＼の政治職分に應じて、翼賛し奉るのである。これが即ち大御心に随順して家を治め、郷を治め、國を治める事であり、これが國民の政治本分である。故に國民の行ふ政治とは國家を治めるために、天皇の御意志を體して之を實現して行く翼賛行爲である。儒教の云ふ政治は、修身齊家治國平天下であつて、先づ身を修める事が出發點であり、家を治める原理がそのまゝ國を治める原理である。然るに我が國では、大御心に歸一し、天皇の統御(すめらぎ)に隨順する事が政治の出發點で、而る後に一家一身は始めて治まるのである。儒教では故に孝が百行の本であつて、忠は孝の延長擴大であるが、我が國では、忠即ち天皇に忠義を盡くす事が百行の本である。忠なる事に依つて始めて孝たり得る。この相違は支那の國柄と我が國體との根本的差異から出たもので、儒教に於ては未だ國家に歸一體となれる生命體的實在なく、國家社會は家族の集合に過ぎない事を示し、我が國體との差別は明瞭である。謂んや個人主義的民主主義國家に於ては、政治はすべて個人の集合意志に基くものであるから、その政治觀念が我が國のと相去ること天地も唯ならざるものである。

我が國の政治體制は、立法機構も行政機構も司法機構も皆、天皇の統治權の發動實現するための

ものであつて、國民からすれば、皇業翼賛の行動の組織であり機構である。故にこの政治體制の基本を定めたる憲法は、天皇の欽定せられ給ふものである。即ち我が政治體制は、すめらみくに體制である。

然らば何が故に日本に於ては、統治權は天皇に歸屬し、大政は天皇より出づるものであるか。それは我が國體の源泉から出る政治であるからである。國體については前にも述べた通りであつて、我が國民は、天皇の御生命の一部を享け、天皇の大御心に歸一する事に依つて初めて存在し得るのである。即ち日本民族の全一的生命は即ち、天皇の御生命であり、我々は日本民族の一人として存在し得るのであるから、これは我が生命が、天皇の御生命の一部分を享有することである。而して民族生命の中樞的統一力は大御心であり、その實在化せるものは、天皇陛下の御位(寶祚)である。卑近な比譬を以てすれば、今「我」と云ふ生命體を考へて見る。「我」とは無数の細胞から成り、それ／＼の器官に依る體制から出來て居る。そして頭腦中樞の統御のもとに、各細胞各器官は、それ／＼の分擔任務を果しながら、「我」なる生命體を維持發展して行く。各細胞や各器官は、それだけでは單獨に存在することは出來ないので、必ず「我」なる生命體の一部分として

のみ始めて實在し、又必ず頭腦中樞の統御を受ける。この關係を我が民族に適合して見ると、我と云ふ生命體は日本民族生命であり、同時に 天皇の御生命であり、「我」の頭腦中樞の働きは、天皇の大御心即ち統治作用であり、頭腦中樞の所在は、即ち御位にあり、「我」の細胞は即ち國民であり、「我」の器官は諸々の國家體制に當る。故に最初に 天照大神あり、日本民族あり、天皇陛下下しまして、こゝに始めて國民が實在するのである。これ國民は 天皇の生み給ひしものである所以である。 天皇が國民の大御親であり、國民は 天皇の赤子である所以である。

大御心が發現する道を皇道と云ふ。故に我々は皇道に従ひ、奉行する事に依つて、民族としての我が生命を正しく開展する事が出来るのである。皇道は天地の大道理法であり、又我が國民の必ず履み行ふ入道である。天道であり同時に人道である。故に中外に施して停らず、古今に通じて謬らず、之を以て世界に弘布するや、世界皆之に歸一すべき事は屢々述べた所である。

この様な國體に於て、我が國家を統御する統治權即ち政治大權が 天皇に歸屬し、又 天皇より出づる事は當然であり、國民が悉くこの統治の發現を實贊する事が、國民の政治本分である事は申すまでもない所である。皇業實贊こそ、國民として自らを治め、向上し、國家を隆昌ならしめる

唯一の道である。

この様な政治が西洋の諸國家に於る政治に比して卓越して居る事は多くを云はずして明白である。西洋の諸國家はそれが征服國家の形を取らうと、契約國家の形を取らうと、將又階級國家の形を取らうとその何れの場合にも、個人自由主義國家であるから、主權者と國民との關係は常に對立關係であるか、又は雇傭關係であるだから、主權が強くなればなる程國民の自由は失はれる。又反對に國民の力が強くなればなる程、主權は制限され弱くなる。西洋の政治史は常に主權者と國民、主權と自由權との對立相剋を經緯として織りなされて來た。即ち政治の根源たる主權者の意志と、被治者たる國民の意志とが常に對立拮抗する。これが最も露骨に表れて居るのは、征服國家の場合である。一つの民族或は階級が他の民族或は階級を征服抑壓する手段として政府が出来、主權が生ずる事は西洋諸國家の發生を研究するものに到達した定論である。西洋の諸國家は、それが如何なる國家形體を取つてゐても、その中に必ず征服國家的性質を内包して居る。例へば契約國家に於て行はれる議會政治の如きは、之を發生論的に見るときは、抑壓階級と被抑壓階級との衝突對立を妥協するための一手段であつて、之を多數決と云ふ手段を以て解決の標準とした點に、一方ならぬ苦心が存さ

るけれども、それは何處迄も妥協であつて解決ではない。西洋諸國家は本質的に階級の對立を内包し、勝てる階級が權力を握つて、負けた者を壓迫搾取するを當然とする。ソヴェトロシアに於ける労働階級の獨裁の背後には、壓迫搾取を受けて居る農民其の他の國民大衆がある事を無視する事は出來ない。此處にソ聯國家の不安定性が絶えず暴露し、之を抑へるためには、警察力、軍隊の存在を必至とする。又ナチスドイツ、フアツシヨイタリーに於ける指導者政治は、民主主義的階級の對立を解消して、全體の優越と個人の服従とをその原則とするもので、この點に於て舊來の政治から脱却しようとする足掻きと考へられる。然し乍ら其處には指導者と國民との間に、血肉的生命體的一體性がない。やゝもすると全體國家の表現としての最高指導者ヒットラー、ムツソリニと國民との對立の生ずる危険が多分にある。英國は今次の歐洲大戰に於る思想謀略に於て、流石にドイツの根本的弱點を見逃さなかつた。即ち英國は、「英國の敵はドイツ國民ではない。指導者の名を借稱するヒットラーの獨裁政權である。」と宣傳して、ナチス政權とドイツ國民との分離を圖つて居る。かゝる弱點が縫ひ合されて、名實共に生命體的國家が生まれ、對立のない政治が建設せらるゝかどろかは我々がヒットラー、ムツソリニに對し、好意ある期待を持つものであるが、これがためには國

家及び政治の根本的飛躍を必要とする事を指摘しよう。

三

我が國に於る政治とは、天皇の大御心を奉じ、その統治權の發動に従ひ、國民がそれ々の分擔任務を果しながら、皇業を翼賛し奉る事である。即ち天皇の示さるゝ訓又は法に従つて、我が身、我が家、我が國を治めて行く事である。大御心は國民の翼賛行爲に依つて、國民の一人々々に實現し、國家の隅々にまで行き亘るのである。換言すれば、天皇に歸一集中せる全國民の總力を以て、天皇統御のもと、國家を統制運営する活動である。故に我が政治の要素は、一つには、國民が自ら行ふ自治活動である事、二つには、それは常に大御心に歸一し之を翼賛する事、三つには、この總力を充分に發揮する組織力であることである。

自ら治めるとは、個人に在つては、個人の生活を一定の目標のもとに統べ治める事である。家に在つては、家族員がその家の繁榮のために、家族の活動を統治する事である。又町村に在つては町村民が町村の向上發展のために町村を統治する事であり、工場では、工場員が國家生産の増大を目



指して工場を経営統治する事であり、又更に國家に於ても、之を構成する國民が、國策の遂行を指し、各持場々々を固めつゝ、國家全體の發展を目標として國家を統治する事である。

故に政治は我々の生活と遊離し、或は外的權力として國民を支配するものでもない。政治は國民の生活の中にあり、而して國民自ら統治して行く作用である。だから政治と云ふものをやる特定職業人に委せられるべきものではない。既成政黨の如きは恰も、國民から政治を請負つた様なものである。官僚も國民と一殘違つた立場から國民を治めるやうな臭味が多く、官民一致の掛け聲が官僚に依つて唱へられても、國民は却つて官民の懸隔があると云ふ事を今更乍ら氣がつくのが落である。官僚や既成政黨が政治を握つてゐる間は、眞の政治は行はれる見込はない。

國民の生活の場面に即して政治がある。國民がその生活を一定の目標に向つて統治して行く。而も國民自らが政治の創造者であり、運営者である。國民は自ら政治運営の主體者である。我々は眞の強力なる又正しい政治をするために先づ、既成政黨或は官僚から政治を國民の手に取り返さねばならない。これは即ち政治を完全に 天皇に歸一せしめる事である。我々は政治をそれ／＼の立場能力に應じて分擔責任として有して居るのである。故にこの責任を果し得ないものは、國民として

の責務に不忠實であることになる。正に政治は軍務と同じく、國民が 天皇に責を負ふ神聖なる義務である。

政治は必ず革新の活動を行ふものである。個人でもさうであるが、絶えず舊い殻を破つて生長して行く。之が革新である。革新は國家が絶えず行つて行く活動であり、之に依つて日に新なる國家の成長がある。革新の行はない國家は停滞腐敗し、民族は衰亡する。

故に政治は常に革新である。革新と云ふと何か特別な人が特別な考でやるもので、國民には何等關する所ではないと云ふ様な考が未だ大分行はれてゐる。これは從來政治が一部の特定の團體や閣に獨占せられ、且政治に携るものが多く私利私欲の追求に走り、人格的にも庸劣なために、著しく國民の不信を招いたから政治を何か汚いものと考へ、これと關係しない事を以て清いと思ふに至つたからである。これらは皆既成政治勢力の流した害悪であるが、さりとして正しい政治迄も無視しようとするのは、藥に懲りて膽を吹くの類で、國民の神聖なる義務としての政治を果さないものである。革新と云ふと、これ又自稱革新を標榜するものが、革新を賣り物にして私欲の資に供したために、我關せずと云ふ氣持も無理からぬのであるが、それは我國民として又自治體の構成員として

なさればならぬ事であるときとらねばならぬ。政治即ち革新は我々の國民としての生命のやむにやまれぬ要求であるのだ。我々の生命の統一發展の必然的營爲であるのだ。即ち至國民は一人のこらず政治家であり、革新の行者であらねばならぬ。

次に政治の指導精神が確立されねばならぬ。云ふ迄もなく政治は 天皇の大御心の發現であつて、それは絶対不二である。國民はこの大御心を翼賛奉行するのであるから、政治の指導精神は 天皇の示される所のものである。指導精神の出づる處は 天皇である。天皇に出づる指導精神は故に唯一つである。これを以て國民生活建設の大綱とし、指導精神を生活の上に實現する方策が國策であり、政策である。

然らば 天皇の示さるゝ政治の指導精神をどのやうにして發動し、どのやうな内容を持つものであるか。天皇の行せられる政治は皇祖皇宗の神々の御心が 天皇の大御心として現はれるのである。即ち 天皇は大政を行はせられる時には、必ず 皇祖皇宗の御生命と合一觀感せられる。その御儀式は即ち宮中に取り行はせられる祭祀である。天皇は祭祀を行はせられる事に依つて、御自身と神々との一體感を新にせられ、その神人合一の御境地に於て、政令を仰せ出され、統治權を

發動行使せられるのである。これ祭政一致と云ふ事が如實に我が政治の形式である所以である。

又政治を行はせられる時には、必ず國民の向ふ所、従ふ所を指し示され、教へ導ま給ふのである。即ち國民をして自ら翼賛の道を知らしめるよう教へ給ふのである。これは西洋諸國の主權者が自らの意志（それは多く利欲を満さんとする權力意志に基づく）で勝手に出すのや、又無理矢理に國民をして服従せしめるものとは異なる。我が國の政令法令は本來決して法治國家や專制國家に於るやうな一方的命令ではない。この政令を遵奉し、又遵奉する道を知る事に依つて、眞に國民として向上し、豊かな生活が出来、又國家の隆昌に貢献する事が出来るのである。故に政治には必ず教が伴ふ。憲法と共に教育勅語が我が政治の大本である。政治の第二の形式は、この意味に於て政教合一である。

従つて、この大御心に從ひ、皇業を翼賛する國民の政治本分も、祭に依つて大御心に歸一し、我が國民の歩むべき不變の道を體得し、これに基いて國家を治めて行くのである。即ち翼賛の道も祭政一致に依つて行はれる。故に私意恣意で政治を行ふのでない。皇道即ち大御心に歸一し、まつらひて自らを治めて行くのである。即ち自我を捨て、犠牲して大御心のまゝに身を治め國を治めて行

くのである。天皇の大前にひれ伏して、教へ給ふ所示し給ふ所に基き、家國を治める方策を立て更に天皇の御裁可を願ひ奉るのである。これが國策であり、法律であつて、大御心を畏み、國策を立案検討する場所が本來の議會である。即ち國策は翼贊の方法であり、最高最高の國策は唯一つあるのみである。個人或は團體の利益中心の動機から國策を立てると、利害の衝突があるので、政策も對立する。二つ以上の對立した政策をどれに決めるかは、所謂多數決原理に依る外はないのは當然である。然し翼贊政治にあつては、全國民が絶對不二の大御心に副ふための方策を立てようとするのであるから、その國策も一あつて二なきものである。指導精神を一つにするから、その具體化としての國策も一つである。かくして我々の政治は翼贊行爲である。

## 四

右のやうな國民の翼贊意志並に行動の組織が政治組織である。即ち全國民が一定の指導精神に基き、その總力を擧げて國策を遂行し、國家を向上發展せしめるための強力なる指導者の組織が我々の主張する政治組織であつて、之を一國一黨とよぶのである。又この組織は、國民の凡ゆる生活場

面に滲透して行くから、その作用は單に立法行政だけの部面に限られず、學校にも工場にも農村にも組織が行はれる。これは即ち我々の云ふ政治は單なる狭い意味の政治だけを行ふのではなく、教化作用も經濟の運営もその内容である。だから政治組織としての一國一黨は、教化組織でもあり、又經濟の統治組織でもある。

又我々の政治組織は一つの特徴を備へてゐる。それは、國民の生活の場面に即應し、同時に國民生活を指導し編成する事である。それは例へば、工場は組織の苗床であり、此處を離れて我々の組織はないと同時に、この組織は工場の經營を指導して、全力を經濟翼贊に向けるやうにする。組織は工場と云ふ職場を離れてないが、又工場もこの組織の指導がなければ、正しい又豊富な生産が行はれない。その他農村でも都市でも、會社でも又官廳でも、その形態は違ふかも知れないが、國民行動の凡ゆる場面に於て之を指導統制する政治組織が一國一黨である。一國一黨の組織が國民生活の至すべての場面に組織せられる時に始めて國家の總力は一點集中の最大能力を發揮する事が出来るのである。故に我が國の政治組織は、第一に指導精神を一つにすること、そしてそれは大御心に歸一して始めて體得せられるものである。そしてこれを具體化する政策は唯一つの最高最善

のものたるべきことである。第二はこの指導精神及びその具體化たる政策を立案し、御裁可を得て決定する政治組織は、一國一組織である事である。之即ち一國一黨であり、我が國に唯一つの實黨であるべきである。第三はこの一國一黨の作用は、國民生活の凡ゆる部に滲透し、従つて教化、經濟及び狹義の政治に亘つてをる事である。第四にこの組織の基礎は國民の生活の場面に即し乍ら、又之を指導編成する力を有する事である。従つてこの政治組織を構成するものは、職場々々に働く國民の中から選ばれた人々である。その選定の標準は、指導精神を他人よりも強く體得する事及びこれを具體的に現實の生活に實現する熱意と能力とを有する事等である。尤も原則としては、一定の年齢に達し、又職分を持つて働いてゐる國民はすべてこの政治組織の構成員たる資格を有するわけであり、かうなれば全國民が悉く黨員となるべきである。然し乍らこれは理想であつて、現實は強力なる一國一黨が、精銳なる黨員に依つて確立せられ、果敢なる職を行ふ事に依つて、一全國民を指導し、國家總力の發揮と國民の再編成とが實現せられるものと思ふ。

自由主義國家に於ては、階級又は利害相反する團體の存在するために、政治の意志が多元的であつて、統一せられた意志ではない。従つてこれを執行し具體化する政治組織も二つ以上であるの

が、理論上又實際上當然である。その最も典型的なのは、所謂憲政の常道であると稱せられる議會主義である。自由主義的議會政治に於ては、國民の意志は二個以上に分裂し、従つて政治組織も二個以上の政黨に分裂する。そして政權を擔當する政黨の他に、之に反對する政黨があつて、それと異つた國策を掲げて相争ひ、この争の中からは政治が生れるものと考へてゐる。我々から見れば之程滑らかな悲惨事はない。假りに政局に立つ政黨が皇室を翼賛する政治組織であるとするならば、在野の政黨は、皇室に戮力協心の實を盡くさない不逞漢の寄り集りであり、従つて之に協力する國民は逆賊と化するわけである。天下斯くの如き不合理が許さるべきであらうか。我等は斷じて國民の半數近くを逆賊とするやうな多數政黨主義を許す事は出来ない。而も之等の政黨の主張を判決するには、多數決の便宜手段が用ひられてゐるが、これは所謂人衆くして天に勝つものであつて、眞正なる國民の意志が樹立される筈もなく、又國民としての政治本分も果す事が出来ない。其のために、國策は分裂氾濫して、遂に拾收する事が出来ず、甚だしい徒勞怠慢に陥つて、所謂政治は偉大なる浪費と化するのである。

この故に我等は斷乎として舊い多數政黨主義を排する。又國民と遊離せる官僚の獨善主義をも排

する。かくして全國民中の精銳を一定の指導精神に依つて、鐵血の如き強靱強力なる組織とせる一國一黨が來るべき時代の唯一の政治組織たるべき事を主張する。而してこの指導精神は從來の腐敗せる國家體制を革新すべき飛躍的 天皇歸一主義であらねばならぬ。又其の黨員は舊時代の空氣に染まなない純眞潑刺たる新しき時代層に屬するものであるべきである。斯くしてこの一國一黨が實現せられ、天皇に對し奉り、忠誠以て責任を受くるとき、始めて純正日本の政治は確立されるのである。

## 五

昔ギリシヤの哲學者アリストートルは政治循環論なるものを説いた。それに依ると政治は先づ君主政治から始まる。そして眞の君主政治は君主が其の國家全體の利益を代表するものであつて、つまり全體主義の原理に依つて、政治を行ふものであるが、この君主政治が時として行き詰りに陥る。その行き詰りは君主の利己主義から來る。即ち君主が人民を自己の利有財産と心得て、人民を搾取したり、無用な戰爭をしたりして、人民を塗炭の苦しみに陥れる。之を暴君政治と云ふ。こ

の暴君政治の結果は、その國に於る最も理性に長じたる人物の出現を促し、その國家の運命に關して、憂慮する數名の人物が現れて政治を執るやうになる。これを貴族政治と云ふ。そして眞の貴族政治は、國家全體の利益を目的として行はれるものであつて、即ち暴君政治の利己主義が貴族政治の全體主義に依つて、打開せられるのである。處がこの貴族政治も數人の惡貴族の利己主義に依つて行き詰り、彼等は國家の利益を第二として私服を肥すやうになる。これを稱して寡頭政治と云ふ。

この寡頭政治の利己主義に對して、民衆の怒りが爆發し、之を倒して出來るのが民主政治である。眞の民主政治は、常に國家國民の利益を目的として行はれるから、やはり全體主義である。然しこの民主政治も遂に行き詰る時が來る。それは多數者の横暴多數者の利己主義であつて、その結果として現れる政治を亂民政治と云ふ。さうするとこの混迷した亂民政治を討伐するために、必ず一人の偉大なる人傑が現れて政治の行き詰りを打開する。此處に新しい君主政治が起つて、亂民政治を退治する。この様に國家の政體は常に循環して、君主政治から暴君政治、それから貴族政治、寡頭政治、民主政治、亂民政治、そして又も君主政治と始から遣りなほす事になると云ふのである。

る。

この學説は一種の易姓革命論であつて、たとへ諸外國の政治の變動を説明するに便利であつても、そのまゝにては我が國體に當てはまらぬ事は勿論である。然しこの學説は我々に一つの暗示を與へる。それは至る政治の行き詰りは利己主義から起り、之を打開するものは全體主義であると云ふ事である。

今日の日本の立憲政治が恐るべき弊風を生じ來つて、その根本的革新を必要とするに至つたのは、多くは政黨の利己主義から起つたものである。即ち彼等が政治を權力争奪の具に供して、皇業を翼賛すると云ふ國家本位の考を忘れたからである。彼等は憲法の條章を楯にとつて、恰も憲政の番人であるかの如き言辭を弄するけれども、それは結局低劣な形式論にすぎない。立憲政治の根本的内容が所謂萬機公論に決するに在る事は云ふ迄もない。公論とは衆論とは違ふ。公は天下を以て一にするると云ふ事であるから、公論に決するとは、全國の智能を總動員して、最高最善の翼賛の方法に基づいて、國策を決めると云ふ事である。帝國議會は之を實際化するための一つの形式にすぎない。若し議會と云ふ形式は備つてゐても、各政黨が其の内に盤居して、政黨の私利追求に没頭

し、翼賛案の検討樹立と云ふ内容が失はれたならば、我が憲政は魂のない佛と化し去るのである。今日の政黨者流は利己主義に依る政權争奪のために、政治を醜斷し、萬機公論の府を醜惡なる利害の取引所にしてしまつた。平和の時ならば或は國民をごまかして居れるかも知れない。然し時代が緊張し、國力の充分なる發揮が切實な要求となつて來ると、從來の政黨の遣り方が如何に國家のために有害であつたかと云ふ事が白日のもとに暴露して來た。我が國目下の色々の困難は、平和なりし時代に於て、既成政黨が國家の百年の計を考へず、目前の利害にあくせくしてゐた缺陷に起因する處が甚だ多い。未曾有の難局を突破する爲には、政黨政治は、國力の綜合的發揮と云ふ事に對して、その性質上機能を有しない。まして、道德的に國民の指彈を受けるに至つては、我々は寧ろ一日も早く既成政黨を解散するのが適當であると信する。猶彼等が今や政治上に於て何等の力を有せず、既に政治的腐敗考朽機構と化し去つたのは、云はば彼等の自業自得であつて、眞に彼等に羞恥心があるならば、自らが在來の罪を天下に謝して、政黨を解散し、個人は懺悔の生活を取るの至當ではあるまいか。彼等がなほ憲政の擁護とかを云ひ軍部や官僚の政治を攻撃するが如きは盜人猛々しいと云はねばならぬ。

凡そ國民を外にして國家なく、國民を離れた政治はない。世にはイタリアやドイツに強力なる全體主義の政治が行はれてゐるのを見て、日本にもムツソリニヤヒットラーのやうな人傑が現れたならば、強力なる政治が行はれるであらうと考へる人が多い。然し彼等の所謂獨裁政治が單に其の統率者が出たから出来るものと考へたならば、其れは見當違ひの甚だしきものである。國民大衆を離れて眞に強力なる政治はあり得ない。ムツソリニヤヒットラーがあれ程強い政治を行へるのは、全く國民的支持を得てゐるからである。即ちムツソリニの背後には、三十萬のフアツシヨ建兒が完全なる組織と統制とを以て、立つてゐたのである。ヒットラーは其の麾下に五十萬のナチス黨員を動員してゐたのである。三十萬、五十萬と云へば、イタリアやドイツの總人口に比べると百分の一にも足りない小人數にすぎない。然し彼等は、すべて一騎當千の士である。國家國民のためならば、自命を投つても惜しくないと言ふ敢死の士である。彼等が一體となつて、偉大なる指導者のもとに團結し、イタリアやドイツの國民に働きかけ、國民の迷夢を叩きさまして、彼等の全體主義

に攻宗せしめたのである。さうしてフアシストやナチス黨員の活動に依つて、國民の動員が出来あがつたとき、初めてムツソリニヤヒットラーの強力政治が實現したのである。この故に、偉大なる民衆政治家にして初めて強力なる獨裁政治家となり得ると云ふ事も出来る。すべて強力なる政治は國民的基礎なくしてはあり得ない。その一つの例證を擧げて見よう。

ヒットラーの前にドイツの獨裁政權を握つたシュライヘル將軍の場合である。將軍は其の當時軍部の頭目であつて、五十萬の國防軍が彼の指一本で動くと言はれた。其の上に「社會將軍」と言はれたシュライヘルは、財界とも關係深く、即ち右手には財閥、左手には官僚と固く握手してゐた。其の上に彼は政權をとつて軍隊につく強力なる警察をも其の掌中に握つてゐた。軍部と警察力と、官僚と財閥と、これだけ完全に諸勢力を一身に集めたものは、ドイツの政治初つて以來最初であると言はれた。この故にシュライヘル將軍が獨裁政權を握つたとき、世は何と之を評したか。將軍一度黒頭巾を脱いで政局に立つた以上、最早ヒンデンブルグ大統領はロボットにすぎない。ヒットラーの如きは野に吠ゆる瘦犬である。ドイツは永久にシュライヘルの銃剣内閣の支配を受けらるであらうと獨りドイツばかりでなく全世界もかく信じてゐた。而るに彼の獨裁政權はどうなつた

か。永久に続くべく期待されたシュライヘル内閣は組閣僅に二ヶ月半にして倒壊し去つた。そしてその次に立つた「野に吠ゆる瘦犬」ヒットラー政権が遂にナチス政治を完成して、今日に到るも小搖ぎもしないのである。

何故であるか。シュライヘル將軍は、殆どすべての勢力を握つてゐた。唯一つ彼の持たぬものがあつた。それが國民大衆である。ヒットラーは殆どすべての勢力を缺いてゐた。唯一つ彼が雙手に確かりと握つてゐたものがあつた。それが國民大衆である。彼が十有幾年に亘る惡戰苦闘の結果、ナチス黨員の決死的活動に依つて、ドイツの國民大衆の壓倒的支持を獲得してゐたと云ふ事、それだけがヒットラー政権の大きな土臺石となつたのである。かくして我等は再び云ふ、國民を外にして國家なく、國を離れて政治なしと。

我等は何も、フアシシヨを學び、ナチスを眞似る必要はない。然し國民の壓倒的支持なくして、一本當に強力なる一國一黨政治の不可能なる事は、ドイツたるとイタリヤたると日本たるとに依つて違はない。謂んや我が國は、全國民が天皇の赤子として、一體となり、皇業實績の強力なる政治組織の出来るべき基礎は昔から存在してゐる。まして現下の非常時局に當つては、眞に愛國の

心に燃え、適切なる時艱克服の國策を掲げ、決死の覺悟を以て國民に呼び掛ける政治勢力が現れるならば、國民は必ず響の音に應ずるが如く、全國擧つて之に呼應するであらう。唯從來は、客觀的情勢はかゝる國民的基礎の上に打ち立てられ、國民の總意總力を強烈に指導組織し、發揮するに足る政治勢力がなかつたために、みす／＼政黨や官僚に政治を委かせて、唯憂慮し憤慨してゐたに留まる。大日本青年黨は、正にこの時代に即應する指導精神と國策と國民的組織とを掲げて、世紀の疾風怒濤の眞只中に、政治の新しい又強き建設を目指して立ち上つたのである。即ち大日本青年黨は深く國體に眼覺め、公平無私、盡忠至誠而も純真敢爲なる同志の組織せる中核的國民指導の政治組織である。それは最も強靱なる組織と嚴格なる訓練とを以て、新時代の建設に挺身すべき責務を持つて居るのである。かくして一國一黨を本質とする大日本青年黨が實績の主體勢力たるに到る日は何の日か。然らば實績方法の立案、即ち政策案の討議決定は、黨が主となつて之を行ひ、公論の確立、國策の決定に當り、其の實施は全黨を擧げて其の指導を擔當し、任務を遂行するのである。大日本青年黨はかくして、黨を擧げて皇親の實現に献身し、實績の實を盡くし、天皇に對し奉り、忠誠以て責任を受けるのである。



大日本青年黨は實にかくの如くにして生まれ、かくの如くにして活動を開始したのである。我等は何人よりも深く國體の尊嚴を體得すべく努力精進する。何人よりも深く日本の民族精神を我が生命の内に體得鼓動せしめて居る。この故に我等にして一度、白日赤旗の大旗を掲げて立てば、日本全國の山河は歡呼して我等を迎へ、國民の至ては我等の旗の下に呼應すべき事を深く信するものである。

さらば盡忠至誠に燃ゆる國民大衆よ！

さらば純真なる愛國の血に燃ゆる青年よ！

飛躍大日本は我等の力で！

附 錄 飛躍的大日本國家體制

現下世界に於ける諸國家は、各種各様の體制を有し、其勢力相伯仲し相抗爭するも、皆唯物的自由主義文化の老衰行詰りに依り、著しく國家的活力を消耗し、嶄然卓越せる國家體制を確立し、世界に光被するに足る雄邦なし。歴史は活物、天地生成の氣の發現にして、暫くも滯滞するは理法に非ず。是に於て乎、世界人心を襲へる深刻なる苦惱呻吟の絶叫は、舊世界國家體制終滅を告ぐる儼然なるも、混亂荒廢の極まる所、既に新文化は受命の國民の躍々たる生命の中に胎生鼓動す。今や世界歴史必然の要請に應へ人類至高の使命を自覺せる我大和民族は、即時太陽國家大日本の眞姿を顯現し、光輝燦然たる飛躍的國家體制を確立して、全世界に光被すべし。世界第二の開闢茲に現前せんとす。實に吾人が雄飛一番舊來の通念より脱却し、飛躍的大日本國家體制を以て、汎く内外の革新的生命を相結び人類未曾有の偉業に拮据せんとするもの、盡く天命の至嚴絶對なると、民族的衷心の熱求止め難きに出づ。同志協心戮力、天命奉行の大道を邁進せんとするもの、吾人不變の念願なり。

(一)「世界ハ今ヤ唯物的自由主義制度ノ行詰リニ依リ、茲ニ大更新ヲ必要トスル歴史的轉換期ニ直面セリ。然ルニ世界各國ハ何レモ舊國家生活姿態ヨリ完全ニ更生シ得ス、其實力相伯仲

シ、嶄然他ニ光被スルニ足ル體制ヲ有スル國家ナシ。

現代世界諸國家の陥没しつゝある止め難き擾亂の根源は、過去幾世紀に亙りて支配せる唯物的自由主義文化が既に其任務を果して行詰り、而も之に換りて國家生活を維持發展せしむべき新文化體系の發生未だ無きに依る。根本的價值觀念に於て、萬般の生活姿態に於て、既に舊世界機構は行詰り、歴史的一大更新を爲すに非ずんば、人類生命の開展不可能なる一大轉換期に直面せり。蓋し、唯物自由主義に立脚せる世界國家體制行詰り、破綻を白日の下に暴露したるは歐洲大戰なり。大戰參加國は猶舊來の優越を盲信し、此の大戰を以て諸他の紛争を解決し、舊來の世界支配機構の強化再編成を企圖せるも、事實は却て、其有する根本的矛盾が、到底從來の價值觀念に立つ計算標準にては解決不可能なることを示し、自己矛盾は即ち自己否定なることを立證せり。唯物的自由主義的舊世界國家機構は、自己の體制維持の爲に二つの培養素を必要不可欠とす。民族的搾取、階級的搾取是なり。彼等の哲學も政治も經濟も、盡く此の前提を容認し、其永遠の繁榮を信じ、之を神學化し更に科學化せんと努めたり。然るに歴史の審判は、餘りにも嚴肅にして、此舊體制の矛盾と罪惡とを判決せり。即ち歐洲大戰勃發の原因が、世界政策の名の下に行はれたる各國の帝國主義的植

民地争奪と、資本主義諸國家體制間の争覇に在りたる事は紛れもなき事實にして其世界平和と稱し、社會正義を唱ふるものは、各國間に於ける植民地支配關係の妥協的均衡と、資本主義的營利經濟上に於ける諸國家間の苟合を意味するものに過ぎず、彼等交戰國が其勝者たると敗者たるとを問はず、高價なる財力と血肉とを以て購へる代價は、彼等の豫期せる所とは正反對の所産のみ。即ち帝國主義的支配搾取より脱逸せんとする純正民族主義の勃興、資本主義的國家機構に反逆せんとする無産階級の舊機構よりの脱離並に舊世界支配國家間に於ける抗争對立の激化を來せるのみ。是れ即ち、唯物的自由主義世界國家機構の分解瓦解にして、統一を失へる諸國家は互に孤立し争闘して歸一する所を知らず、英米佛等資本主義的自由主義的國家は、既に植民地支配と階級的搾取の二増要素を喪失せんとして國力枯渴し、國際聯盟、國際均衡保持政策或は植民地再分割等の政治的技術を盡すと雖も、到底其頹勢を挽回するに難く、彼此相争ひ、國內亦不安動搖を極む。又自由主義を脱却せんとするナチス、フアツシヨは、國內を集中結束して國民的團結を鞏固ならしめつゝあるも其期する所は、堪へ難き外壓に自己を防禦し反撥せんとするに過ぎず、何等明日に光明を期待し得るものなく、唯だ盲目的猪突を事とするのみ。而して亦ソヴェート・ロシヤも、既に階級的第三

インターナショナルの理念を離れ、寧ろ一國社會主義的自己結束、自己防衛を主とするに至る。斯くて是等一國の諸國家は唯物主義の境内に於て夫々自己國家の優越を獲得せんと徒らに焦慮闘争を重ねつゝあり。即ち英米佛等は沈み行く夕陽、既に昔日の盛威なく、ナチス、フアツシヨは蒼空に懸る弦月、徒らに鋭く、蘇聯は宵の明星、光芒長しと雖も残夜を照すのみ、何れも太陽大日本の曙光に浴して、初めて蘇生し得べし。今や、舊世界國家體制の行詰り崩壊は、世界史再建前夜の暗黒にも似て、暗澹たる戦雲播曳し、世界第二の大戦の禍機を孕めり。歴史は轉換せんとす。舊來の文化による世界機構は驟然として分解し、新しき再編成を必然ならしむ。之を統一し、世界秩序を再建する所以のもの、實に世界第二の開闢に非ずして何ぞや。

(二)「此ノ時代ニ於テ一歩ヲ先ンジ、優秀ナル國家體制ヲ確立スルモノハ、正ニ世界ニ光被スルヲ得ベシ。」

世界の秩序士崩瓦解せんとし、各國互に支離滅裂相抗争し、而も舊來の諸國家に於て、速かに蟬脱し、歴史轉換の潮頭に棹し、世界の再建を行ふものなしとせば、明日の世界は唯暗黒争闘墮落滅亡あるのみ。荒涼無限の曠野に黨風を待つが如く、黎明に朝暉の赫灼たるを期するが如く、

世界は今や更生の希求止み難く、世界國家機構の飛躍的更新を仰望しつゝあり、此の時代に於て、一歩を先んじ、優秀なる國家體制を確立するものあらば、世界は盡く之に歸一すること、百川の大海に赴くが如くなるべし。然らば舊來國家も、新興諸民族も、何れも新しき國家體制の一部分として活潑なる生命力を再現し來るべし。之正に世界に光被する所以なり。

(三)「惟ノニ八弦ノ一字ノ顯現ヲ國是トスル我國ハ、即時其ノ本然ノ發揮ニ依リ。」

大和民族の歴史は、天地宇宙生命力の本源本體を神靈とし、天皇を現人神と拜して、民族生命を是に歸一し、天皇の大御心なる萬物育成の皇道即我民族の踏むべき大道と觀じ、無限永遠に其生命を發展擴充し行く道程なり。故に民族的大理想は、天皇の大御心のまゝに表現せらる。神武天皇即位の大詔に「上ハ即チ乾靈國ヲ授クルノ徳ニ答ヘ、下ハ即チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ、然ル後六合ヲ兼テ以テ都ヲ開キ、八弦ヲ掩ヒテ宇ト爲サン」と仰せられ、近くは明治天皇の教育勅語に「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と宣はせられたる。皆我民族の建國以來相承寶貴し來れる道義的世界建設の大宣言なり。誠に、我民族建國より三千年、萬世不易の連綿たる皇統を仰

き、國民盡く之に歸一し、皇基愈々無窮、國運益々隆昌なるは世界無比の歴史的莊嚴なり。理想は萬古を貫き、抱負は八紘を蔽ふ。而も況んや波瀾と精彩に富む歴史的修練を経て、民族的操持愈々固く、外來諸文化を消化吸収し盡して醇乎として醇なる國民的抱擁益々潤澤を加ふ。茲に進一歩して飛躍的國家體制を確立し、之を提げて世界道義國家建設に邁進するもの、正に皇風を四海に洽洩せしめ、天壤無窮の皇運を扶翼する所以にして、我建國以來久遠にして變ることなき八紘一宇の國是の顯現なり。

我大和民族は、建國の理想に基き、儒教佛教唯物文化を統一消化せる精神力物質力を天皇統帥の下に集中凝結し、嶄然として全世界を蔽へる暗黒の扉を開闢して、光輝赫々たる新世界國家體制樹立の歴史的使命を負ふ。既に滿洲事變を以て、我民族は驟然眞面目を露呈し、道義的世界國家建設の偉業に拮抗するに至り、皇國建國精神茲に具現し、三千年の歴史其歸結に赴く。實に滿洲事變は、我民族が八紘一宇の大理想を中外に宣揚し、之を遂行するに足る實力を具備し、國運の飛躍的前進を開始せる端緒にして、我民族第二の紀元節たるの意義是に於て乎在り。今や進んで我國本然の姿を飛躍的大日本國家體制に統一實現し、以て世界史必然の要請、天人共に歡喜する偉業を完

成すべきなり。

(四)「國民ノ全能力ヲ擧ゲ

天皇ニ歸一シ奉リ、物心一如ノ飛躍的國家體制ヲ確立シ、光輝アル世界ノ道義的指導者タルヲ要ス。」

我國目下の急務は、大理想遂行の本源たる日本國家體制の飛躍的統一整備に在り。即ち我國絶大の憂患は、既に物質的精神的諸力の充實伸張せるに拘らず、是等諸力が、血脈的統一に迄組織せられず、亂離混沌たる實狀に存す。而して我國に於ては、國民的諸能力の歸一朝宗する處、天皇にして我歴史、之を實證す。即ち國體本然の最も完全に具現せる時は、我民族生命の高潮充實し、天皇歸一體制亂れたる時は國民活力の萎靡を來すこと、昭々たる歴史的事實なり。今や我民族が、蓄積し來れる生命力を發現せしめて、乾坤一擲の歴史的偉業を遂行せんとするに當り、宜しく全能力を擧げて、天皇に歸一し奉り、國民的全力を統一集中して何等の徒勞なく最大限に發揮すべし。我民族生命開展の諸様相たる宗教、道德、思想、政治、經濟、軍事、科學等の諸力を散漫ならしめず、天皇統帥の下、物心一如の飛躍的國家體制として具現せしむ。是に於て整然として統一

せられたる諸力は遺憾なく發揮せられ、全國家が一糸紊れざる統一的偉力として現前するに至るべし。

飛躍的大日本國家體制に統合組織せられたる國民の全能力は、天皇の大御心のまゝに發現するを以て、道義によつて一貫せられ、八紘一宇の世界光被を目的とする理想的活動力として具現す。故に本體制は、其有機的脈的諸能力の統一に於て嶄然他に卓越するのみならず、世界の道義的統一を必然に實現せしむ。今や我民族は、本體制の實現を圖ることに依り、他の諸國家の儀表となり、最優勝者となり、此の偉力を以て、克く他を指導して道義的世界再建の先覺たる天命を享く。

(五)「此ノ意味ニ於テ次ノ國家體制ヲ提唱ス。」

翻つて我國の現状を見るに、未だ國民中には、我民族の世界史的大使命を理解自覺するもの少く、國運の飛躍的前進に非ずんば、終に世界の落伍者たるべき非常の時機に在るを知らず、或は退嬰因循舊習に戀着して苟安是事とし、或は曲學阿世、輕佻浮華の徒巷に充ち、或は形式的理論の末に拘泥して事物の活機を知らざるもの日々皆然り。又克く、國體の本義に目覺め、皇國日本の本然の

顯現を庶幾する一團の革新勢力ありて、國家の綱紀脈を爲すと雖も、眞の愛國が、練成積聚し來れる優秀無比の我民族の精神力、物質力を建設的飛躍的國家體制に統一編成して、我國未曾有の世界的大業を達成するに在る所以を認識せざるに於ては、却て國運の雄大なる歴史的開展を阻害するに至るべし。之を要するに、我民族有形無形の全力を、天皇に歸一し奉り、之を更に飛躍的國家體制に具現し、全國民盡く一團となり、世界國家機構再編成の偉業を遂行すべく、本體制を提唱するもの、吾人同志の熱血至熱の進る所、諸神亦來りて照覽あらんとす。

### 一、精神的飛躍

現代諸國家が、其民族生命の開展に於て、一貫性を缺き且動搖常なきは皆、精神的不動の中心確立せざるに依る。人類の集團生活に於て不拔の人性に根柢せるものは民族及之が統合體たる國家なり。而して民族生命を無限に開展し、國家生活を完成し得るものは、精神的中心不變不動なる我大和民族あるのみ。人類世界に於ける指導者たり得る所以なり。

(一)「我國體ノ尊嚴ハ無上絕對、普遍的眞理ノ顯現ナル事ヲ國民ニ感得徹底セシムルト共ニ、本

體制ヲ以テスレバ、當然世界ノ道義的統一ヲ爲シ得ベキ確信ヲ信仰的ナラシメ。」  
 國民生命を維持開展せしむる爲には、其精神的中心確乎不動たるを要す。而して我大和民族の精神の中心は 天皇にして萬古不變なり。天皇は無上絕對普遍的眞理の顯現させ給ふ所にして、我國民は 天皇の具現させ給ふ眞理を夫々分亨し、常に本源に歸一報謝しつゝ民族生命を開展す。是我國體なり。天皇の大御心は皇道として具現、皇道は天地の大道理法、我國民の等しく踏み行ふ人道なり。皇道は即ち日本國民の 運天地の大道。何れも中外に應じて悖らず、古今に亘じて離らず。之を以て現代世界に於て弘布するや、四海萬國皆之に歸一すべきこと明らかなり。我國民たるもの、皇基の千萬世に亘りて自若たる所以、皇道の相對を絶し、無上絕對なる所以、之に歸一する國民生命の永遠不動なる所以、是等即ち我國體の萬邦に冠絶し、更に世界盡く之に歸一すべき理法なることを衷心より確信信仰すべし。從つて飛躍的精神體制に組織せられたる宗教、道德思想は以て新世界國家體制的精神的體制たるべき事を感得徹底せしむべし。是等は既に批判理論の領域に非ず。天命を受けて躍動しつゝある我民族が 歴史的省察を深刻にし、自覺を練磨鍛錬し行くに於て、信仰的に把握し得べきもの。之恰も富嶽の纒、櫻花の秀麗、日本刀の銳利、我民族の境致を

表明して餘す所なきと同様なり。

(二)「且現唯物的自由主義機構ノ下ニ、萎靡シツ、アル我民族ノ純正明朗ニシテ不偏中庸、叡智的・武勇的・仁義的ナル高級特質ヲ進歩的形態ニ於テ再生堅持セシムルハ勿論、益々之方助長發達ヲ策シ、精神文化ノ中樞トス。」

我大和民族の高級特質は之を歴史に照して明白、且自覺を深化し行くに於て、將又他民族と比較考量するに於て最も鮮明なり。我民族は常に太陽を崇拜し、自ら日本と稱し、國旗は太陽を象り、日本を以て太陽の出づる所、陽氣の發する所と云ひ、上下盡く純陽光明の域たるを信愛す。純正明朗の氣、我民族に透徹普遍するもの偶然に非ず、又其性たるや排他固陋に非ず、偏狹自屈に非ず、公明無我よく外物を容れ、之を融化する獨得の性格に至つてはその比を見ず。即ち宇宙的大我によりて自他共に生くる境致に自我を確立する大乘の性格を有し、我本來の純正を以て、他文化の本質を洞察し、更に統一駕御し、自己を愈々充實擴大すると共に、他に眞の價値を賦與し、自他共に高度の精神生活に向ふ。之不偏にして中庸、よく萬物を育成する高級特質なり。其叡智武勇仁義的性格に至りては蓋し天性に基くものと云ふべく、智を鏡に比し、勇を劍に比し、仁を玉に比し

智はよく天地の至理、人生の眞義に觸れ、勇は唯跡猛匹夫に非ず。必ず忠愛の至情に發したる剛武となり、仁は父子の親情を以て他に及ぼし融然肅然、流風薫るが如く、餘情掃すべきものあり。是等は皆我民族の天性に根ざし、練磨を重ねて我民族精神生活の基調を爲すもの、誠に政教の出づる所、道義の根源する所、皆之に基く。愈々之を振作し更張すべき國家大本なり。

然も時勢の變ありて、是等眞の姿は、唯物的自由主義の惡風を受け、著しく萎靡沈滞し、狂瀆に非ずんば退嬰、混沌に非ずんば盲動、純正明朗不偏中庸、天地の活氣に參せんとする雄渾なる氣魄道念の見るべきものなく、明鏡止水、鏡の如き叡智は曇りて片々たる理論に拘泥し、至人武斷、日本刀の如き大勇亦隠れ、活人の活機を知らずして自他共に相争ひ、霸然融然たる仁愛情誼の風塵れて利害相競ひ殺伐無味の社會相を現出す。何處に我民族精神の高風清節、千古に卓絶するものあるを見んとするや。然りと雖も是皆時勢の一變のみ、躍々たる民族生命は幾多先覺の士の行藏に具現せられて、懦夫亦起ち、匹夫も義に勇む。吾人の念する所は、速かに惡風を蟬脱して我民族の高級特質が、世界的規模、進歩的形態に於て再生堅持せらるゝ事にして、此の精神を飛躍的體制に組織編成し、最大限に活用發揮するは、世界道義化の根本要義なり。一國の綱紀を維持し、國民精神

を振作するは一に文教に在り。文教の要は本精神的飛躍體制の具現擴充を眼目とすべきこと今や多言を用ひずして明らかなり。誠に諸多民族の求めて得べからざるもの。而も人類生活の根本要素たる道念は、盡く我民族の魂の中に内在す。世界更新の秋、大和民族の世界に光被すべき最大の寶玉を琢磨して曠古の大業の光明となすこと、吾民族の本懐信念なり。

### 二、經濟的飛躍

經濟は 天皇の世界光被具現の物質的基礎にして、本經濟的飛躍體制に編成せらるゝに及び、其眞價値を發揮す。故に世界光被の根源たる大日本國家の經濟を、本飛躍體制に移すことを以て、世界經濟皇化の發足とす。而して本經濟的飛躍體制は、即ち 天皇歸一經濟なり。天皇歸一經濟は神聖崇高なる理想の下に現在人類の到達したる生産手段、生産設備、並に勞力等一切の經濟要素を天皇に歸一再編成するに及び、眞に人類福祉の増進、世界文化建設の爲に、其最大限の能力を發揮し得べし。

然るに現下の經濟社會に於ては個人自由主義に放任せられ、物質的生產、機械科學等、皆國家發



達の爲に活用せられず、只個人の利益追求の爲にのみ利用せられ、人間が物質の爲に驅使せられるに至れり。實に現下世界經濟の行詰り矛盾は此の一點に因由す。かくして國家社會生活を個人に還元し、甚だしき國家を以て個人の利益追求の具に供する不逞の徒輩を生ずるに至る。國家の危機茲に於てか過る。一方に於て資本主義の止揚を主張するものに社會主義あり、生産手段の國有社會化を主張する點に於て資本主義に勝るも、其根本精神たるや、唯物主義個人主義の變形たる階級闘争主義にして、徒らに人類社會を階級闘争の禍亂に導入せんとするものなり。我等大日本人の理想は、前二者と全く異なる世界觀に出發す。我等は我國體の本然たる八紘一宇四海同胞の理想に基き、個人主義的營利機構を止揚し、全體主義的國家計畫經濟を樹立し、國家生活の完成と世界文化建設に貢献せんことを期す。我大日本人たるもの、古人の歌へる「海行かばみづくかばね、山行かば草むすかばね、大君のへにこそ死なめかへりみはせじ」てふ覺悟を全的經濟生活に於て亦堅持せざるべからず。是正に大日本國民の經濟基本方針なり。

(一)「經濟ハ之ヲ營利主義ノ桎梏ヨリ解放シ、資源勞力及技術ヲ價值ノ根源トシ、國家之ヲ統制管理ス。」

營利主義は自由主義經濟當然の歸結にして、遂には弱肉強食の餓鬼道に發展す。従つて大日本國家經濟の目的に反す。加之、今や、營利主義經濟は國家經濟順當の發達を阻害しつゝあり。故に經濟自體の進歩發展の爲にも、其の桎梏たり。

營利主義の桎梏を除去したる經濟に於ては、資源、勞力及技術が、實に價値の根源なり。我大日本國家に資源、勞力及技術の存する限り、國家國民の必要に應じて最大限に活用すべし。その爲には、無秩序、無統制なる自由主義經濟に放任することなく、國家之を統制し、調整管理すべし。

(二)「生産ニ於テハ勞力、資源ノ存スル限り、調整シタル國家企業ヲ最大限ニ擴張シ、國民生活ヲ極度ニ向上セシムルヲ第一義トシ、飛躍的増産ヲ敢行ス。」

資源に勞力を作作用せしむれば物資の生産あり、其幾回轉、再編成生産、再々編成生産は凡る物資を供給す。故に國家國民生活に必要な物資を、その生産量を國家的に調整しつゝ、最大限に生産すべし、生産量を調整する所以は、國民の需要に生産を適正せしむるに在り。

而して其生産は、國家國民の生活を可能の極度迄向上せしむる目的を以て、資源、勞力の存する

限り、飛躍的増産を行ふべし。

想ふに、我國現在の生産機關は、一旦緩急の場合、如何に戰時統制を加ふるも限度ありて、貧弱劣悪其任に堪へず。故に可能なる最短期間に於て飛躍的増産設備に改編整備増設するを要す。即ち本經濟體制は平時に於ては文化の向上に資し、戰時に於ては直ちに豊富なる經濟力の下に戰時經濟體制に轉換するを得べく、平戰兩時何れにも適正せしむべし。之近代國家が國防國家たる特質を有し來れる自然の歸結なり。

〔三〕「勞力ノ能率ヲ最大限ニ發揮スル爲近代科學ヲ極度ニ利用ス。」

科學の進歩は急速にして止るなし。然るに生産過剩を極度に恐怖する現經濟機構に於ては、其利用屢々躊躇せられ、延いては科學の進歩迄阻止する形勢を馴致す。之經濟本來の目的を阻害するものにして、勞力の能率を増進せしむるが爲には科學利用を極端ならしむべし。抑も過去四・五十年の神速なる科學の進歩に經濟姿態の供はざるは現在の跛行的現象なり。然るに飛躍的國家體制に於ては何等増産を躊躇する理由なく、生産は調整され、國民の正當なる要求に對しては能ふ限り不足なく供給し生活を可能なる極度に向上せしむ。斯くて、科學は飛躍的に進歩し、勞力の能率は飛躍

的に増大すべし。

〔四〕「貨幣ハ資源、勞力、技術ニヨリ生産セラル、價值質量ヲ其準備實質タラシメ國家之ヲ發行

シ、單ニ交易的價值ヲ有セシム。」

貨幣の發行は金銀等の金屬を其準備實質たらしめず、資源、勞力、技術によりて生産せらるゝ生産物の價值を其準備實質たらしめ、國家之を發行す。従つて單に交易の便宜にのみ資せらるゝものにして、名目貨幣なり。現今流通しつゝある我國の紙幣も亦、名目貨幣たる點に於ては本體制に於ける貨幣に同じ。然れ共現行の貨幣は國家の信用を唯一の基礎として發行せらるゝに對し、本體制に於ては生産せらるゝ價值質量を準備實質とする點相違あり。簡單に言へば、生産物の消費は即ち貨幣數量の縮小にして、生産物の増産は即ち貨幣數量の増大を意味す。従つて、國內物資の量と國內貨幣發行數量は正比例に増減せしむるものなり。

〔五〕「貿易ハ國家之ヲ管理シ、原則上國家的必要範圍ニ制限ス。」

自由貿易主義經濟體制に於ては、貿易は、輸出に於ては徒らに賣らんが爲に海外にダンピングを行ひ、國內の資源勞力を消費損失し、輸入に於ては不必要なるもの、例へば贅澤品の如きが輸入せ

られて國民經濟を窮迫せしむ。これ自由主義的貿易の避くべからざる歸結なり。新體制に於ては、從來の貿易觀念より脱却し、貿易は國家之を管理し、輸出入共に國家的必要に應じて量質共に制限統制す。

### 三、外政的飛躍

外政の根本方針は、分解の過程にある世界國家體制を、飛躍的大日本國家體制に依りて再編成し各民族各國民盡く其特質を發揮せしめつゝ道義本然の發現たる大日本國家に歸一朝宗せしむるに在り。外政は現世界の通念たる國家相互間の摩擦軋轢を調節する政治技術に非ず、又帝國主義の搾取的支配的外交技術にも非ず、更に一步を進めて、各民族本然の欲求を、唯物自由主義的桎梏壓迫より解放して自由に發現せしめ、更に之等を優秀卓越せる文化を以て向上的に再組織し、道義に立脚せる搾取なき新世界國家體制の建設を企圖するを以て眼目と爲す。之に依りて各民族は初めて、自己の文化的特性を堅持發揮しつゝ、民族生命の開展を期し得べく、然らずんば、弱肉強食同胞相刻の極、民族生命の枯渴衰亡を招來するに至る。故に、本體制の光被如何は即ち世界人類の將來

の繁榮か衰亡かを決する絶對道なり。我外政の伸張する所、本體制の光被の及ぶ所、各民族は、遠近を問はず、民族の如何を論せず、山野を踏へ、河沼を涉り、沙漠を横ぎり、海濤を凌ぎ、群星の北斗に集るが如く翕然として皇風に浴するに至るべし。

(一)「我版圖内ニ於テハ、緊密ナル有機的體制ノ下ニ、各民族ノ特質ヲ發揮シツ、制限的自治ヲ行ハシメ。」

本飛躍的大日本國家體制に編入せられし各民族は、皆天皇の德輝を仰ぎ、其惠澤を受く。天皇は普遍絶對道の顯現、各民族皆亦子として本體制下の諸域に照臨し給ふ。天皇の照臨し、其德輝を光被し給ふ所是我版圖なり。我版圖内に於ては、各民族をして緊密なる有機的體制を取らしめ、各々充分其特質を發揮せしめつゝ、更に大日本國家に統一せしむ。自治を行はしむると同時に是を制限する所以にして、各民族は可能の範圍に於て自治せしむるも、其軍事外交の如きは國家之を掌り、又統治の主權者は天皇にして、各民族は相協力相自治して全體的國家主權の統治下に立つ。此の關係は恰も有機體に於て、各器官は其特質を充分發揮しつゝ、常に頭腦の統制下に在り、又頭腦の統制も、各器官をして

最大限に機能を發揮せしむるに於て活動の完全を期し得らるゝと同様なり。自治は恣意に非ず。より大なる統一に向ひて、自己を練磨し充實し行くことなり。こゝに整然たる統合と分化との調和せる國家體制の出現を見るを得べし。

(二)「全國的ニ民族文化ノ向上ヲ圖リ、皇化ノ實體化ヲ行フ。」

我版圖内に於ける各民族は、本國家體制内に於て、充分其特質を發揮し、文化の向上充實を圖ることを得べし。而して各民族は其文化の向上に於て前後優劣なく、所謂機會均等の原則に立ち、全體的に民族文化を向上し得べし。而して各民族は、本體制に入ることにより、之を外にしては期待し得べからざる慶福を享受するを得るに至る。例へば帝國主義的國家の支配下に在る諸民族の如きは、其支配を受くることに依り、愈々民族文化を衰頹せしめ、民族生命を枯渴せしめ、本體制に於ける各民族の際立つて文化の量質共に増進するに會へば、直ちに之に参加せんことを希ふに至るべし。是他各民族をしてわが皇風を仰慕し、我國民たるを庶幾するに至らしむるものにして、外政の眞諦が皇化の實體化に在る所以なり。我外政が、皇化の實體化により、世界人類をして盡く其恩澤を蒙らしむるを目的とする民族的インターナショナルとなすもの、實に道義的紐帶を以て分解

乖離の世界各民族を再編成せんとするの謂なり。

(三)「此ノ方式ヲ以テ逐次世界ニ及ボス。」

現代世界の諸民族は、或は帝國主義的支配下に在りて、その壓力に依り窒息せんとし、或は自ら帝國主義を以て他民族を支配せんとするも、既にその拘束力弛緩し、現世界國家機構分解互崩の機運強化すると共に、強者も弱者も共に苦しみ、民族は徒に鬭争反噬して、其生命と文化とを擧げて滅盡せずんば止まざらんとす。茲に吾人が、各民族に新しき生命を與へ、相協力して全體的文化の向上に遺憾なからしむべき國家體制を提唱し、之を外政の根本方針と爲し、近きより遠きに及ぼし、終に全世界をして、飛躍的大日本國家體制下に編成せんとする所以なり。

四、軍備的飛躍

大日本の軍備は、皇道を世界に宣布する神威なり。即ち八紘を一字と爲し、地球上より國家鬭争民族鬭争を除去し、眞正なる平和を招來せんか爲に、天皇親率の下、天軍として鍛鍊せられたるもの、之實に我軍備なり。

我軍備は此信念に基き、此理想を堅持して行はるべし。之我建軍の本義なり。

(一)「本體制ノ實行ニ對シ、主義ヲ異ニスル諸國家妨害ヲ爲ス場合、隨時之ヲ克服シ得ルノ絕對的軍備ヲ完成ス。」

我軍備の目的は軍人への勸諭に於て仰せられたる如く、まつろはぬものどもをまつろはしむるに在り。まつろふとは祭り合ふ或は政り合ふにして、八紘一宇の天意を同じく信仰し、相共に奉仕するの意なり。即ち對立抗争の立場に在るものを經濟的にも、政治的にも、更に思想精神的にも一體的に統合し、天照大神を共同の神として齋き祭り合ひ、天皇を現人神として歸一し奉るに至らしむるを云ふ。もし、此の大御心に反し、道義世界の建設を妨害するものあれば、そは人類の敵大道を害ふ邪惡なるが故に、隨時之を討伐し、邪惡不義を地上より一掃し、眞正なる平和を招來せざるへからず。これ我神武にして、まつろはぬものどもを討ち平げるとは即ち是なり。故に我軍の向ふ所、邪惡不正掃滅せられ、萬民皇風に浴し、簞食並樂して皇師を迎ふるに至る。

本體制は皇道を以て世界に光被するもの、道義世界を建設せんとするものなり。此の皇化の實體化を獲得し、萬國をしてまつろはしめ、世界平和を招來すると共に主義を異にし本體制の進展を阻

害するものを討滅する國民的威力即ち我軍備なり。故に我軍備は單に外敵を防ぐ爲の國防の手段に非ず、又外國を侵略し、他民族國民を殲滅降伏せしむるを以て足れりとする帝國主義的政策にも非ず、遙に是を越えて世界を邪惡より救ひ、眞正なる調和の世界を建設するを以て目的とする建設的國家威力なり。軍備は現人神、天皇の大御心の發現なるが故に、國家生命の開展する限り天壤と共に窮りなく、世界に邪惡の存する限り絕對に實在し、隨時其威力を發揮す。

(二)「軍備ノ主體ハ無敵空軍トシ、軍ノ航空機タルノ觀念ヨリ脱却シ、國家國民ノ航空機タルノ觀念ニ至ラシムルコト、恰モ古來我國民ノ日本刀ニ對スル信賴ト同様ナラシム。」

皇軍の使命は世界平和の確立より重きはなく、軍備の威力は此の重大使命に相應じて、比類を絶する偉大強力なるより必要なるはなし。故に軍備は最も強力にして將來性ある空軍を主體とし之を以て無敵の偉容を整へ、更に國防の手段たる軍備の觀念より脱却して、國家的使命遂行に献身する至國家國民の堅持すべき神聖なる威力たるの觀念に至らしむ。而して航空機は、凡ゆる觀點よりして國家國民の軍備として又無敵の威力を發揮するに最も適合せる特質を具有す。無敵軍備建設に航空機の最も有利且優秀なる理由を列舉すれば、大約左の如し。

### 一 廣義國防の見地

將來戰は、戰場に於ける攻防、戦線に於ける戦闘に依つてのみ決するものに非ず。實に國家の總力を擧げて敵國力を壓倒殲滅するに依つて決し、軍隊のみならず國民盡く戦闘に従事するにあり是廣義國防にして、此見地よりして戦争の死命を制するものは、戰場のみに止まらず、國力の中核たる政治的經濟的要地を勦滅し、敵國の民力を破砕撃滅するにあり。之に敵するもの航空機より他なし。加之、航空機による背後地帯侵攻は、獨り物質力、組織力の破壊に止らず、敵國民をして恐怖戰慄戰闘意志を喪失せしめ、思想戦と相俟ちて絶大の効果を收め得べし。

### 二 緒戦戦勝の見地

戦争の開始は、或は宣戰布告と共に、或は國交斷絶と共に間髪を容れざるを要す。故に此の戦機を掴み、一步敵に先んじて攻勢を取り、緒戦に勝つものは、戦局全般に甚大なる好影響を及ぼす。航空機は其偉大なる機動力と集中力とに鑑み、此緒戦的戦果を獲得するに最も有利なる武器なり。

### 三 戦争形式變化の歴史の見地

航空機の發達は、從來の戦争形式に劃期的變化を招來せり。從來に於ては陸戰に於ても海戰に於ても平面的戦闘なりしが、今や航空機の發達と共に立體的に擴大せられ、航空機の參加なくしては到底戦闘を行ふを得ざるに至れり。加之、航空機は其偉大なる機動力と卓絶せる戦闘威力とを有し、隨時隨所に要點集中の攻撃を、敵の意表外に加へ得るを以て、戦闘部面を立體化するのみならず、著しく廣範圍化し、又時間的に戦機の進展を急速ならしむ。將來戰の決定的要素たる所以なり。

### 四 飛行機發達の見地

銃砲軍艦等の軍器は、徹底的に研究し盡され、殆んど人智の最極限に到達し、何等かの飛躍的軍事科學の發見あるに非ずんば、現在以上の優秀武器の出現を期待し得べからず。然るに航空機は今や發達の過程に在りて、之が改良進歩を加ふべき部分最も大なり。茲に智能を盡し、工夫を重ねる

不況は、我國民の科學的能力より見て、當然他に超越せる航空機を得べし。而して現在の航空機は其威力に於て舊來の如き小規模の範圍を出でず。然るに之に飛躍的改良を加へ、其の如き威力を具備せしむるに於ては、群島集島を論ずるに足らず、以て大軍を阻止し、以て戦艦を覆し、以て大都市を烏有に歸せしむべし。之航空機に將來を期待する所以なり。

以上は航空機が將來軍備の主體となり、本飛躍的大日本國家體制を構成するに至るべきことの可能なる所以なり。而して航空機は戰略戰術的見地のみより軍備の主體たるに止らず、國家國民の維持すべき信託的威力たり得る點に於ても、他の諸軍器と性能を異にするものなり。即ち、航空機は、戰時に於て最も卓越せる軍器たると共に、平時に於ても、直ちに運輸交通通信等に活用せられ得べく、偉大なる軍器たると共に生物的利用に供せらるるを以て、國民の航空機たるの責を負す者人が、軍の航空機たるの觀念より脱却し、國家國民の航空機たるの觀念を以て軍備の本姿と爲す意義を航空機は充分適切に實現するものなり。且日本人は天性機敏勇敢にして、而も之を練磨して練練の如き強靱銳利なる性格を打出し來れる所なるが、航空機操縦活用は正に此日本人の性格に適合す。古來日本人は日本刀を武器たる以上に國民的威力として堅持し來れり。之日本人の性格

が最もよく日本刀の本質に適合せるに依る。今や航空機は、恰も古來の日本刀の如く、國民的護國の武器として、且日本人の信託的威力の象徴として皇軍の精神的・物質的本體たるに至るべし。由來我國民は日本刀を大和魂の凝固と信じ、各家庭の鎮護と仰ぎ、神武の威力とせり。航空機に對しても斯くあるべし。我國軍備は皇道宣布の威力なり。道義世界建設の活力なり。而して其主體を爲す航空機は、疑ひもなく降魔の利劍、破邪顯正の大乗劍なり。我國民は其精魂を日本刀に練入したるが如く、今や其大和魂を航空機に打込むべし。

### 五、政治的飛躍

政治は、天皇に集中歸一せる全國力を以て國家を統制運営する國家活動にして、其發動は八紘一字、道義立國の皇謨となり、全國民は大御心を體して此の天業を實踐し奉るを以て政治行爲の本分となす。我政治の根本精神は祭政一致、政教合一にして、巍々たる大理想を目指し天地の化育に參せんとする偉大なる文化建設活動なり。これ政治を以て權勢爭奪の具に供し、所謂人衆くして天に勝つが如き低級なるものに非ず、盡く皇謨に従ひ、大御心を體し、天業を恢弘するの自覺的

統一的國民活動なり。而して此の政治の本然を發揮し得べきものは、本國家體制を措きて他に求むべからず。

(一)「政治ハ本國家體制ノ完成ニ全能力ヲ集中シ何等ノ徒勞ナカラシムル爲、之ヲ完全ニ信奉スル全版圖ノ同志ヲ以テ其指導ニ當リ、天皇ニ責ヲ受ケ。」

本體制は大日本國是を歴史の現段階に於て飛躍的に具現せるもの、全世界の諸民族を一大家族として、和合一體たらしめ、等しく廣大無邊なる天恩に浴せしむるは、實に本國家體制の實現にあり。我大日本國民たるもの國家國民の全能力を擧げ、此天業翼賛に戮力協心せざるべからず。而して、政治の大權は 天皇に在り。政權の發動は皆天意に則り、萬民之を翼賛す。天に二日なきが如く、政治に二途なし。大御心に奉行する所以は、唯一絕對にして無二、彼此相對の境地を超越す。故に我國家に二つの政治意志なく、二つの政治團體あるべからず。舉國一致、唯一黨あるのみ。

政黨は、最も深く政治の本體を明悟し、公平無私殉忠至誠の同志の組織する中核的指導團體にして、國民は原則上全部黨員たるべきも、常に中核指導部の指導を得て、其任務を果し得べきものとす。一國一黨の正に世界的規模に於て確立せらるべき所以なり。

舊國家體制に於ては、自由主義國家、階級國家或は組合主義國家たるの何れを論ぜず、皆政治意志多元的にして、唯一絕對の統一意志に非ず。其最も典型的なるは所謂憲政の常道と稱せらるる議會主義なり。自由主義的議會政治に在りては、國民の意志は二個以上の政黨政派に分裂し、遂に政權擔當の政黨政派の外、戮力協心の實を盡さざる政黨政派存在するに至るは當然にして、加之各派の主張を判決するには、多數決の便宜手段を以てし、眞正なる國民の意志遂に樹立せられず、國策の分裂氾濫を來し、拾收するに難く、甚しき徒勞怠慢に墮す。況んや在野黨なるもの、政權爭奪にのみ没頭し、國家の休戚を第二義的に取扱ふに至りては、政治は偉大なる浪費たるに至るや必せり。故に二大政黨の對立、多數決主義に基く自由主義政治は宜しく之を排すべきものとす。

一國一黨の黨員は、本體制を信奉し、皇謨の翼賛に献身奉仕する選民を以て構成すべし。其民族の如何、社會階級の如何を問ふべからず。八紘一宇の大御心に照せば、世界の全民族は總て之、天皇の赤子なり。然るが故に我國家理想に祭り合ふ者、即ち大日本の皇道精神に覺醒し、其道を信奉し、本國家體制の實現に献身奉仕する者、一國一黨の黨員たる有資格者なり。而して如何に大日本國民たりと雖も、以上の如き覺悟を有せざるものは黨員たるの資格なし。



一國ニ黨實現せば、翼賛方法の立案、即ち政策案の討議決定は黨内に於て行ひ、其實施に當つては舉黨以て其指導を擔當し、任務を遂行すべし。斯くて、此黨は、黨を舉げて皇謨の實現に協力し、翼賛の實を盡し、我々大日本天皇に對し率り、忠誠以て責任を受くるものなり。

以上

### 大日本赤誠會綱領

- 一、純忠赤誠ノ志操ヲ練成シ、翼賛ノ實ヲ舉ゲ
- 二、積極的意義ニ於ケル大日本民族ノ活力ヲ練磨昂揚ス
- 三、民族文化ノ創造普及ニ努力ス
- 四、職場ヲ通ジ、高度國防國家體制ノ組織構成ニ貢獻ス
- 五、國防諸般ノ事業ニ挺身努力ス

### 大日本赤誠會本則

- 第一條 本會ハ大日本赤誠會ト稱シ、本部ヲ東京市ニ置ク
- 第二條 本會ハ世界新秩序ヲ指導スベキ思想ヲ創造統
- 一シ、實踐ニヨリ民族精神ヲ作興スルヲ目的トス
- 第三條 本會ハ會ノ目的實現ニ挺身スル同志ヲ以テ會員トス
- 第四條 本會ハ會長之ヲ統卒ス
- 第五條 本會ハ會務執行ノタメ別ニ會規ヲ定ム

### 會員守則

- 一、會員ハ綱領ノ實現ニ挺身シ 他ヲ同化セシムベシ

### 二、會員ハ忠節禮儀 武勇 信義 翼賛ヲ以テ國民ノ儀表タルベシ

### 會規

- 第一條 本會ハ中央本部、地方本部、聯合支部、支部、分會ヲ以テ組織ス
- 第二條 數縣ヲ區域トシテ重要ナル地點ニ地方本部ヲ置ク
- 府縣ヲ區域トシテ聯合支部ヲ置ク、市郡及ビ區制ノ施行スル都市ニ於ケル區並ビニ特定區域ニ支部ヲ置ク町村及ビ特定ノ職場ニ分會ヲ置ク、但シ外地及ビ特定ノ地域ニ於テハ別ニ之ヲ定ム
- 第三條 地方本部、聯合支部、支部、分會ニ各々地方本部長、聯合支部長、支部長、分會長ヲ置キ、會務ヲ總括セシム
- 第四條 中央本部ニ訓練局、庶務局、出版局、調査局ヲ置キ、地方本部、聯合支部、支部分會ニ訓練部及ビ庶務部ヲ置ク
- 第五條 本會ノ組織内ニ青年赤誠團ヲ置ク
- 第六條 本會ノ組織内ニ大日本赤誠婦人團ヲ置ク
- 第七條 本會ニ大日本學生團ヲ置ク
- 第八條 中央本部及ビ地方本部ニ審議員ヲ置ク、審議員ハ會長之ヲ任命ス
- 第九條 本會規ニ依ル役員ハ、會長之ヲ任命シ、一年ヲ以テ任期トス
- 第十條 本會員ノ會費ハ年額一圓トス



大日本赤誠會行進歌

北原白秋作詩  
辻順治作曲

三  
聖上中にましませば  
歸せよ一つに我が命  
光明こゝに赫灼と  
萬邦の民みな朝す  
ダンと往け〜ダン

一  
天に冲する火の柱  
見よや東亞の我が勢力  
正大まさに躍々と  
神州の意氣雲を衝く  
ダンと往け〜ダン

四  
樹てよ國家の新機構  
興せよ生産 我が限り  
遠大さらに生々と  
向上の眼をうち放て  
ダンと往け〜ダン

二  
往け往け今ぞ 秋今ぞ  
示せ無双の我が力  
體制すでに堂々と  
仁愛の熱 義に勇む  
ダンと往け〜ダン

五  
天に冲する火の柱  
騰げよ炎を 我が化育  
赤誠見よや烈々と  
青年の血ぞ今たぎる  
ダンと往け〜ダン

昭和十四年十一月十五日  
昭和十五年七月二十五日  
昭和十七年三月十五日

一版發行  
五版發行  
九版發行  
廿三版發行

第二の開關

定價金壹圓

著者 橋本欣五郎

發行者 橋本音之

印刷者 兼平小治

發行所

東京・明治神宮表參道

大日本赤誠會本部

電話青山(36)二四三四番  
振替東京一二三三九一番

大日本赤誠會札幌塾

Handwritten notes in Japanese characters, including "2/28", "2/28", and "2/28".

¥1.00